

巨悪が作った破壊の悪
魔はヒーローを目指す

鉄仮面さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

巨悪も平和の象徴をも超える破壊者、ここに誕生

目次

破壊者誕生編

始まり | 1

ブロリーの設定／ブロリーの新たな

生活 | 5

ブロリー、新1年生に会う | 19

ブロリー、街へ行く | 30

迫り来る悪 | 47

USSJ襲撃編

敵連合、襲来 | 55

ブロリーVS脳無 Part 1

66

ブロリーVS脳無 Part 2／ブロ

リーVS平和の象徴 | 75

敵連合の新たな仲間 | 87

ブロリー、1-Aの仲間入りをする

91

体育祭編

始まる体育祭 | 101

走れ！障害物競走！！ | 111

始まる！騎馬戦！！ | 125

最終種目！トーナメント戦 | 143

最終種目！トーナメント戦 Part

2 | 159

ブロリーVS轟！！波乱の準決勝！！

174

ブロリーVS爆豪！本気の超決勝戦！！
／終了！雄英体育祭!!!

185

初めての挑戦！ブロリー、1人で街に
行く!!

196

職場体験編

コードネームを考えよう

205

ブロリー、通形ミリオとの手合わせ

218

ブロリー、サー・ナイトアイ事務所へ行

く

230

事件勃発!! ブロリーに迫る影!!!

240

ハイリスク・ハイリターン

251

破壊者誕生編

始まり

「これは素晴らしい…!!ドクター!!この子を見てくれ!!」

男は液体が中に入ったカプセルに入った男の子に手を向けドクターという男を呼ぶ

「なんだね…?この子供は確か衰弱していた…」脳無” を作り出すための実験台じゃないか。この子供がどうした?」

「この子供に個性を3つ与えたんだよ。普通ならばこの時点で物言わぬ人形とかすんだ。しかしこの子供は元の状態に…いやむしろ元よりも力が上がっている!!」

「なんだと…?なんの個性をこの子供に与えた?」

「この子が持っていた個性は”学習”…そして私が与えた個性は”エネルギー”、”身体能力向上”そして”エアウオーク”…!!この子の新たな個性の名は…そうだな…」

破壊者” とでもな付けようか」

男が喜びカプセルに手を置く

「君は…弔を支えてくれるいい配下になってくれる」

すると扉が蹴破られ派手な服装の男が入ってくる

「……来たか。予定より随分と早い…力を上げたね？オールマイト」

「貴様を…初代から続く戦いに終止符を打ちにやって来たぞ!!オール・フォー・ワン!!」
「はあ…」

男はカプセルを触りオールマイトに話しかける

「…この子はね？未来の破壊者だ。ヒーローの時代は終わりを迎えるだろう。さあ…強く生き延びてこの時代を終わらせてくれ!!」

オール・フォー・ワンはカプセルをどこかへテレポートさせた

「なっ?!?貴様!あの子をどこにやった!!」

「さあね…だけど彼は君よりも強い…そして僕よりもね」

液体の入ったカプセルは日本の富士の樹海へ落ちた

しばらく少年はカプセルの中で寝ていたがカプセルの近くにやせ細った小柄な緑色のクマが現れる

「グルルルル…!!!」

クマはカプセルを見つけると匂いを嗅ぎ始め中に少年がいるとわかると少年に近づ

き食べようとする

「うう…あああああ!!!」

突然少年がしゃべったのに驚いたクマは慌ててカプセルを蹴飛ばし逃げ始めた
蹴飛ばされた拍子に表に出た少年は立ち上がり歩き始める

どこ…どこ…？

そしてしばらく歩いているとさつき自分を食べようとした痩せたクマが巨大なクマ
に攻撃されているのを見つけた

巨大なクマは痩せたクマを木へ叩きつけ弱ったところを食べようとする

だが後ろにいた少年を見るとすぐに少年に近づき口を開ける

そうして口を開けながら近づいてきたクマの舌に少年は噛みつき引きちぎる

クマは堪らずに少年から離れるがまた近づいてきて今度は爪で攻撃してきた

少年は逃げようとするが避けきれず頬に傷を負ってしまった

最初は痛みで苦しんでいた少年を見てクマは安心したかのように息を吐き食べよう
とする

しかし少年の手のひらから緑の球が放出され巨大なクマの胸を貫いた

クマは倒れ動かなくなった

少年はクマの匂いを嗅ぎ、食らいつく

そして後ろにいた痩せたクマの前行き肉を置いた

「うあ……あう……」

巨大なクマの皮をとった少年はそれを体に巻き眠りについた

痩せたクマは少年のくれた肉を食べ少年に寄り添いともに眠りについた

この少年、名はブロリー

この世界の破壊者になる男

ブロリーの設定／ ブロリーの新たな生活

名前　　ブロリー

個性　　破壊者

緑色のエネルギー弾を撃つことができ、戦えば戦うほど強くなる。

空も飛ぶことができ人間離れた身体能力を持っている

デメリット：怒ると我を失い暴れまわり髪の色も変わる

言葉についてはたまたま落ちていた本で読めるが発音はできない

誕生日　　不明

身長　　2 m 1 0 c m

体重　　1 5 8 k g

年齢　　1 話　　3 歳　　身長　　1 3 5 c m

2 話　　身長　　1 7 4 c m

3 話以降　　1 6 歳　　身長　　2 m 1 0 c m

髪の毛の色　　黒　　（怒り状態：金髪）（フルパワー：緑）

好物　　肉、美味しいもの

怖いもの　電流（理由は鹿を捕まえようとした時に雷にうたれたことがあるから）
今のところのヒロインは八百万さん
では！本編をどうぞー！！

—————

ブロリーがカプセルから出て7年、たくましく育っていた
服装は最初のクマの皮を使いズボンにしそれを剥いているだけ

※ブロリーは日本語で喋ってますが他の人から聞いたら唸り声です

「ガウ、いえ、かえろう」

「グアウ」

あの頃のやせ細ったクマの名前は“ガウ”

ガウガウと鳴いているからガウ

だが今では俺よりも大きく痩せていた頃の影はない

ガウの不思議なところはそこだけではない

体毛が緑なのだ

「きょうなにたべる？」

俺がガウに聞くとガウは俺の方にある鹿を小突く

「これだけでいいのか？」

「ガウ」

「おれはたりない…だからこれさきにもつていえかえれ。すぐにもどるから…まてなくなつたらたべていい」

そう行つて俺はガウに鹿を持たせ住処へ先に帰らせた

ガウは鹿の足をくわえてプロリーの言われた通りに住処へと帰ろうとする

しかし森の奥地が何やら騒がしい

ガウは鹿を口から離して音のなる方へ走り始めた

「なんか鹿が少ないな…」

「害獣だ。少ない方が嬉しいよ」

「でもここ狩り禁止じゃないのー？」

「害獣減るんだぜ？むしろ感謝してもらわねえとなー！」

音の正体は人間、散弾銃で鹿を狩っていたのだ

人数は4人で若者が3人、あと1人は金髪の女

「あ、あそこに鹿いるぞー！」

そう行つて1人の若者が鹿を狙う

「グオオオオオ!!!」

「うわあつ!?」

鹿を散弾銃で撃とうとした瞬間、ガウが飛び出して威嚇する

「で、デケエし変な色した熊……」

「おい、早く撃てよ!!こんな毛皮のくまいねえぞ!!売ったら儲かる!!」

そう行つてガウのことを銃で撃ち始めた

「グオオ………」

ガウは逃げようとするも足を打たれ動けなくなる

「悪く思うなよ!クマちゃん!!」

ドンツ!!!

「……………」

どこからか聞こえる音に一瞬止まるが再び鹿を2匹担いだプロリーはガウのいたところへと向かう

しかしそこにあつたのはガウが持つて行つたはずの鹿

「ガウ……？ガウ!!!」

ブロリーは新たに狩った鹿をその場に置いて空を飛びあたりを探し回る

「……ガウ……？ガウ……!!」

するとドンツ！とまた音が聞こえた

ブロリーは音のなる方へと急いで向かう

そして音のなっていた近くでブロリーは降り歩きまわる

「……!!!ガウ……」

ブロリーはやつとの思いでガウを見つけた

しかしガウの体は赤い液体で濡れ冷たくなっていた

「あ？なんだ兄ちゃん。それは俺たちの獲物だぞ」

「ガウ……!!」

「ガウ？ハハツ？なんだ兄ちゃんの熊かそりや？なら俺らに感謝しなよ？そんだけかくなつてりや」

喋っていた若者の首をブロリーは掴み持ち上げる

「かはっ!!うぐっ!!」

「グルルルルウウウウ!!」

「お、おい！やめろよ!!」

「ヒーローに電話して!!」

「お、おう!!」

プロリーは掴んでいた男を銃を構える2人に放り投げる

「ゴホツ!!ゴホツ!!」

「大丈夫?!」

「おい!!撃たれたくないなら手を上げろ!!」

「グルルルルルル!!」

「おい!!聞こえねえ…の…か?」

プロリーが低く唸り4人を睨みつける

すると地面が揺れ、亀裂が入り始めた

「な、なんだよ?!」

「おい!!ヒーローは?!」

「すぐに来るって!近くにパトロールしてるヒーローがいるらしい!!」

「おい早く車乗れ!!逃げるぞ!!」

慌てて車に駆け込み、車を発進させる

初めて見る鉄の塊に少し怯んだプロリーだがすぐに睨みつける

「ガアアア…!!」

「ブロリーは飛び上がり走っている車の前に降り、ボンネットを引きちぎる
「ガアアアア!!」

「う、うわああああ!」

ブロリーは車を持ち上げ押し潰していく

「きやああああ!!」

「つ、潰れる!!」

「助けてくれええ!!」

中から聞こえる悲鳴、命乞いはブロリーには聞こえない

ブロリーは力を込めて車をペしやんこにしようと力を込める

が、何者かに後ろから蹴り飛ばされ車を落としてしまった

「もう大丈夫だ!!」

ブロリーは起き上がり自分を蹴飛ばした者を睨みつける

「ヒーローが来てくれた!!」

「ヒーローだ!!」

「やった…助かった!!」

「さっさといけ、下には俺の他にもヒーローがいる!!」

金色のゴーグルをかけた男はそう言って車の扉を開け中の人達を逃した

「グルルルルルル!!!」

「お前…まだ子供だろ。なんでこんなことしたんだ？」

男は話しかけ続けるもブロリーは止まらない

「おい！聞いているのか!!」

「ウガアアアア!!」

「……お前、話せないのか?」

「グルアアアア!!」

ゴーグルの男の質問にブロリーは答えず手からエネルギー弾を飛ばした

「なっ…!!待て!!」

ブロリーはそのまま男を叩き潰そうと殴りかかるが急にエネルギーが抜けていく

「!？」

「個性を消した、もうエネルギー弾は使えないぞ」

金色のゴーグルをかけた男がブロリーの前に立ち再び話し始める

「……!!!」

「俺はお前を攻撃しない…だからお前も暴れるな…って言っても伝わらないか」

「………」

ブロリーはゴーグル男をしばらく睨みつけていたが戦意がないことがわかったのか

後ろを向きガウの死体を持ち上げる

「この熊を守ってたのか?！」

ブロリーは返事をせずにガウを持ち上げどこかへ向かい始める。
するとブロリーは男を見つめ「ついてこい」と合図をする

男は無言でブロリーについて行く

しばらくすると洞窟に到着しそこでガウの死体を下ろす

「お前の名前は？」

「?！」

「あー…名前もわからねえか…俺の名前は相澤消太だ」

「な…ま…え…も…?！」

ブロリーはそう呟き少し考え始める

そして小さな頃から頭の中にある言葉を絞り出した

「ブロ…リー…な、ま、え」

「ブロリー…か」

相澤がブロリーを見ているとブロリーはガウの皮を剥き、肉を食べ始めた

「なっ…いいのか?ブロ」

相澤はブロリーの前に行くとブロリーは涙を流しながらガウの肉を食べていた

「……ブロリー、食べなくていいんだ。ガウを埋めてあげよう…」

「う……める？」

「ああ、埋める。供養してやるんだよ」

相澤が地面に穴を掘ってブロリーは地面にガウを埋める

「ガウ……」

そしてブロリーはガウの墓の前で泣いた

しばらくして相澤はブロリーの肩に手を置き話しかけ始めた

「……ブロリー、俺と一緒に来い」

「……」

「ここには住んじやいけないんだ。お前は俺たちと同じ人間だ」

「……」

ブロリーが下を向いていると誰かに背中を押される気がした

「また来る。だから……」

「……いく」

「合理的でよろしい」

「ゴリテキ？」

「あー気にしなくていい。もうガウとのお別れは済んだか？」

「……」コクツとブロリーは頷き相澤の服を掴む

「行くぞ」

相澤はブロリーと一緒に歩き始め下で待っているもう一人のヒーロー、プレゼント・マイクの元へ向かった

「お、イレイザー!!そいつが今回の敵か？」

「ああ、今まで山で暮らしていたらしい」

「ハア!?!タフネスだなあおい！」

プレゼント・マイクが相澤と喋っている間ブロリーは電柱やガードレールを見てとても驚いている

「初めて見るものばかりか？」

「……があ」

「イレイザー、この子どうすんの？」

「とりあえず雄英に連れて行く。もう警察には連絡してあるから着いた頃にはもういる

だろ」

「さすが合理的大好きマン!!」

「うるさい。早く行くぞ、マイク」

「シヴィー!」

「ブロリー、着いてこい」

「ああ」

相澤 side

この後、雄英につき警察が事情聴取をしブロリーが分かることを全て聞いた

「ブロリーくん、いつから森に?」

「……」

「ブロリーくん、親の顔を覚えてるかい?」

「オヤ……?」

「お前のお母さんとお父さんだよ」

「……?」

「んー……困ったな……」

警察の人は記憶喪失の可能性があると考え病院へ行くことを進めた

そのあと病院へブロリーを連れて行っても脳に異常はなく健康だということ……
それでついにて俺はブロリーにしっかりとしたズボンを買った

正直あのズボンの匂いはとてつもなくキツかったからな

「あれ……な、に？」

ブロリーが指を指す方向にはフランクフルトがあつた

「ああ、これはフランクフルトだ……なんだ？ 食つてみたいのか？」

無言でこくこくと頷くブロリー

「すみません、これーっ」

「あいよー！ 2000円ね！」

2000円……か……

俺は店の人に2000円を渡しフランクフルトをブロリーに渡す

「しっかりと噛んで食えよ」

ブロリーは袋を破りフランクフルトを一口で食べる

「あ、棒は食つたらダメだぞ……」

バリバリバリ……

遅かったか……

「ブロリー、お前は雄英で保護することになった」

「ゆうえい…?」

「俺が働いているヒーロー高校、勉強する場所だ。お前は今…何歳だ?」

「…なんさい?」

「はあ…とりあえずお前は雄英で保護することになりました。早速、雄英に戻るぞ」

「…さっきの大きいのゆうえい…か?」

「…ああ」

俺はブロリーを雄英へ連れて帰り校長に合わせ空いている2年生の教室をブロリーの部屋にすることにした

※これが後の雄英七不思議の1つとなるぞ!

「相澤…あ、り、があ、とう?」

「気にしなくていい、じゃあな」

「ガウ…」

こうしてブロリーの新たな生活の幕が開けた

ブロリー、新1年生に会う

春、それは出会いの季節…

雄英高校 ヒーロー科

偏差値79・倍率300倍を誇るヒーロー科。基本は推薦4名・一般入試36名で定員40名の狭き門である

その狭き門を通り新たな一年生がやってきて1週間後…

授業が終わり、帰る準備をしているショートヘアの女子、名前は耳郎響香。そして横で彼女のことを待っているポニーテールの女子、名前は八百万

2人はこの後一緒に帰ろうとしていた

しかし前からピンク髪で頭に角を生やした女の子、芦戸三奈が現れる

「ねえねえ！耳郎、ヤオモモ！雄英七不思議って知ってる？」

「雄英七不思議？」

「そ…雄英七不思議!!!」

雄英七不思議

1つ目・夜になると音楽室の肖像画の目が光る

2つ目・校庭で1本だけ季節外れに咲く桜の下には死体が埋まつてる

3つ目・2年生の教室に決して開けることができない部屋がある

4つ目・図書室の本棚に並んでいる本が夜の間に入れ替わる

5つ目・午前3時に玄関に置いてある鏡を見ると鏡の世界に閉じ込められる

6つ目・理科実験室にある骨格標本が夜な夜な校舎を徘徊する

7つ目・訓練施設にある廃校舎に幽霊が出る

「そんなの嘘に決まっていますわ」

「それが嘘じゃねえかもしれないねえんだよなー!」

私たちが喋っていると後ろの扉を開け上鳴さんが話しかけてくる

「昨日、サポート科のやつから話聞いたんだけど…訓練施設にある廃校舎に出たんだつてよ!幽霊が!!」

見た目がチャライ黄色の髪の色をした男、上鳴 電気が3人に話しかける

「ど、どんな幽霊だったの?」

「それがよ…身長が高い」女の幽霊「らしいんだよ!」

「ねえ!行ってみようよ!先生には7時までには帰るって約束したし!」

「ええ…ウチ怖い嫌いなんだけど…」

「皆さんが行くのならいきませすわ」

「モモ!？」

「よしや!なら俺切島と爆豪誘ってみる!」

「なんで行くって行つたの…?」

「ねー!七不思議になんか興味ないと思つてた!」

「私は副委員長として…みなさんを見守る義務がありますからね!」

と言っている八百万だが自分の中学校では七不思議なんてなかったので正直なことを言うとなつて仕方ないのである

「なあ爆豪!切島!!雄英七不思議興味ねえか!？」

「ああ!?んなもん興味ねえわ!帰る!」

「わり!俺も今日予定あつから無理だ!」

「おー…そうか…」

「じゃあ…ヤオモモ、私、耳郎、上鳴の4人で雄英七不思議の正体を明かそー!」

そして数時間後…

雄英七不思議の場所を1箇所ずつ巡り何分も往復したりもしたが何にも起こらなかった

そして最後の七不思議、訓練場にある廃校舎の中に入ったが……

「何も起こらねー!!」

「今は6時30分…外も暗くなってきましたわね…」

「やっぱり嘘だったんだよ。ほら早く帰ろ?」

「耳郎さんの言う通りです、玄関に行きましょう」

「わかった…」

少し残念にしている芦戸とホツとする耳郎

4人が廃校舎の玄関の扉を開けようとする

ガタツ…と言う音が聞こえてくる

「ね、ねえ…今の何?」

「音…したね…」

「たっ、たまたまだって!ほら出ようぜ?」

ガタガタツ…ドントツ…

そして音がしていると思われる教室を見ると長い髪の間髪が動いているのが見える

「二で、出たー!!!」

「みなさん、落ち着いっ」

「や、ヤオモモ!早く逃げるよ!!」

みんな大慌てで廃校舎から飛び出し校門の前まで走り続けた

「はあ…幽霊だよね!?あれ!!髪の毛なびいてた!!」

「ああ!怖えええ!!」

「ああもうウチダメだ…怖い…」

「…:…本当に幽霊なのでしょうか…?」

「…え?」

「今日は少し風も強いですし…ほら、廃校舎の中でも隙間風がありましたし」

「言われてみれば…」

「そうかも…」

「なんだあ…そうだったんだ…」

「さあ、帰りましょう!約束の時間まで…あら?」

「どうしたのヤオモモ?」

「携帯を落としてしまいましたわ…」

「え、さつき走った時に?」

「ごめん…ウチが引つ張った時だよねきつと…」

「いえ、大丈夫ですわ!皆さんは先におかえりください。私は携帯を取りに行つてまいります」

八百万は早歩きをしながら走ってきた道に戻って行った

「無いですわね……やはり廃校舎の玄関でしょうか……？」

八百万が廃校舎の方へ行くと廃校舎の玄関の前に携帯が落ちているのが見えた
「ありましたわ！」

八百万が走り出し携帯を取りに行こうと近づく

しかし玄関から突然大きな手が現れ八百万の携帯をつかんで中に戻っていった

「あっ!!」

八百万は廃校舎にゆっくり近づき中を覗く

だが玄関付近には何も居なかった

(まさか……不法侵入している方が……!?)

音を立てずに校舎に入り廊下を右に曲がる

(人の気配はないですわね……とりあえず先生に……)

八百万が廃校舎を出て先生に報告しに行こうとすると何かに手を掴まれた

「きゃっ!!」

八百万が恐る恐る振り向くとそこには頬に傷がある大きな男がいた

「……………これ……お前のか？」

「えっ…あつ、はい私のです…」

「今、相澤に渡しに行こうとしてた。返す」

男は手に持っていた携帯を八百万に渡す

「あ、ありがとうございます」

「……それ、なんだ？」

男は自分の渡したものを指差し不思議そうな目で見る

「携帯を知らないのですか？」

「相澤が使ってたのを何回か見たことがある。ケータイっていうのか？」

相澤先生の名前を出すということは不法侵入をした方ではなく雄英の生徒又は教員の方…？

「名前は？」

男が携帯を見つめ終わると八百万に名前を聞く

「私の名前は八百万百です。あなたは…？」

「俺の名前…ブロリー。お前はモモ？木になってる…」

「それは桃、私は”ひやく”と書いて”もも”というんです」

「百…」

「あなた…廃校舎で何をしていたんですの？」

「勉強だ、俺…まだ勉強出来ないから…」

そう言ってブロリーは腕に持っているカバンの中からいろんな本を出す
八百万がそれを拾い上げ中を見ると同じ教材だった

(同じ年…!? てつきり先輩の方かと…)

「すみませんが年齢をお聞きしてもよろしくて?」

「…ビョーインで10歳って言われて6年経つから16歳だ」

八百万はそれを聞いて驚いた

「やはり同じ年の方だったのですね…ブロリーさんは何故ここに?」

「ここで勉強をすると落ち着く…静かだから…さつきもここで勉強してた」

八百万は教材を返し携帯の時計を見る

「いけない! もう55分ですわ!」

「何かあるのか?」

「先生との約束で7時までには帰らないといけません! すみませんが失礼します

!」

「ああ…」

走って校門へ向かう八百万は見てしまった

すごく寂しそうな顔をしているブロリーの顔を

(きつといつも一人で…)

「ブロリーさん！明日もここにいますか!？」

「……? ああ、いつもここにいます」

「明日！一緒に勉強しましょう!」

「……!!!」

とても驚いていたブロリーだがすぐに首を縦に振り了承する

「では！また明日ー!!」

八百万は手を振り再び走り始めた

八百万と別れたあとブロリーは廃校舎の教室で再び勉強をする

だが頭の中は彼女の笑顔でいっぱいだった

「八百万……か……」

「ブロリー、話がある」

「相澤……なんだ?」

「俺の担当しているクラスが来週、USJに行くんだが……終わったらお前をクラスに入
れようと思う。だがお前が嫌なら」

「行く」

「即答。いいね合理的だ」

「相澤、俺は4年経ってやっとケータイを知ったぞ」

「携帯…？前見せただろ？」

「名前は知らなかった」

「なら今度、買いに行くか？」

「…行く」

「なら、今日の範囲＋課題で満点とつたら買ってやる」

「うっ…が、頑張る」

だが…相澤はブロリーが満点を取るのを知っている

いつも小テストが終わるところに来て間違えたところを勉強し完璧にする

「相澤、課題しないのか…？」

「…すまん、考え事をしていた」

相澤はブロリーの横を通り机に課題を置いた

「さ、はじめだ。頑張れよブロリー」

バキッ

「相澤」

「なんだ？」

「鉛筆壊れた」

「……今新しいの持ってくる」

ブロリー、街へ行く

雄英七不思議調査から4日後

「ヤオモモー！今日さ！耳郎と上鳴と葉隠とスタバに行くんだけど一緒に行かない？」
「すみませんが今日は約束が入っているのでやめておきます」

「そっかー」

八百万はそう言って教室を後にする

「なんかヤオモモ最近忙しそうだね」

「もしかして…彼氏!？」

葉隠が放った言葉に耳郎と芦戸が驚く

「ええ!？」

「だってさー！いつも笑顔でどこか行くんだよ？」

「た、たしかに…」

「そう考えたら…」

「ここで女子3人はニヤリと笑う

「「ヤオモモを尾行しよう!」」

そしてヤオモモの後をつけていると上鳴と切島が話しかけてくる

「おっ？ お前から何してんの？」

「あ！上鳴！切島！！実はね…！！」

芦戸は上鳴と切島に八百万が放課後になると楽しそうな顔で何処かに行くので彼氏が出来たのではないか…：ということを説明した

「ほほおう…それは気になる…！！」

「おい！やめろよ！尾行なんて漢らしくねえ！！」

「女でーす！」と芦戸

「右に同じく」と耳郎

「左に同じく！！」と葉隠

「電子でーす！」と上鳴

「！！おっ！！」

「切島、これは八百万のためでもあるんだぜ…？」

「え…？」

上鳴は切島と肩を組み廊下の隅に連れて行く

「八百万、スタイルいいだろ？それ狙いできてるやつかもしれないねえじゃねえか！そういう時は俺たちが止めてやるんだよ…！！」

「な、なるほど……」

（（それで納得しちゃうのかよ））と思う女子3人

「そういうことなら……俺もついていくぜ」

「切島が仲間に加わった！」

（（チョロいよ切島くん……））

なんだかんだ5人で行動することになり、八百万を尾行するが特に変わった点はなく
すんなりと玄関を出て行ってしまった

「ねえ？ 本当に彼氏いるのかな？」

「なんかいい気がしてきた……」

「ん!? ねえねえ！ あれって……雄英七不思議の”幽霊の出る廃校舎”じゃない!？」

葉隠がそう言い、指を指す

その方向をみんなで見ると確かに廃校舎があつた

「尾行に夢中になりすぎて気づかなかつた……!!」

「なんでモモはまた廃校舎に!？」

「まさか……幽霊に……」

「おいバカなこというなって……あれっ？ 切島は?」

「切島ならあんたの後ろに……あれ？ 本当にいない……」

みんなが周りを見渡すと廃校舎の前に切島がいた

「あいつ何してんの!？」

「き、切島!!早く戻って来いって!!」

上鳴が小声で呼ぶが切島は廃校舎の扉を開け中に入っていく

「ちよ…切島!!」

結局全員で廃校舎へ入り、切島と八百万を探す

「切島!!どこだ!!」

「ヤオモモー!？」

廃校舎の中で4人は叫ぶ

だが2人からは返事がない

「これって神隠しってやつなんじゃ…」

「嘘でしょ…」

「切島ー!!!」

「お前たち、誰だ?」

「「「ぎゃああああ!!」」」

みんなは地面に尻餅をつき、そのままブロリーから離れる

「ブロリーさん?どうしたんですの?…皆さん!どうしてここに?」

「ヤオモモ!!」

「幽霊に連れてかれたんじゃ…」

「おっ!八百万!!」

すると二階の階段から切島が降りてきた

「切島さんもいらしたのですね」

「おう!…この人は…?」

「この人はブロリーさん。私たちと同じ1年生ですわ」

「よろしく」

ブロリーが頭をぺコツと下げると座っている4人も頭下げる

「よ、よろしく…」

「ヤオモモはここで何を…?」

「4日前、ここでブロリーさんと出会いそれからここで一緒に勉強していますの。皆さんも一緒に勉強しませんか?」

「……………」

「じゃあ…お言葉に甘えさせていただきます…」

葉隠がそう言い、全員で廃校舎の教室へ入って行った

くそれからしばらくしてく

「ブロリー、ここ何かわかる？」

「…ここは教科書をよく読めばわかる問題、ヒントはここだ」

ブロリーはそう言って耳郎の教科書に芯を出してない状態のペンで丸を書く

「ブロリーさんは凄いですわね、4日前までは私が教えていたのに…」

「八百万百の教え方が良かったおかげだ」

「ブロリーの個性って何？」

「俺の個性…詳しくはわからない…でも誰かに言われた気がするんだ…」破壊者
つて

「破壊者…？」

「こんな風にエネルギーの弾を出したり空を飛んだりできるんだ」

ブロリーは手のひらに緑色の弾を出す

「綺麗…」

触ろうとする葉隠だがブロリーは弾を消す

「触ったらダメだ…」

「えっ？」

「触ったら怪我する…危ない」

「ええ!？」

「とんでもねえ個性だな…」

「ブロリー！お前どこの科なんだ？」

「…：まだどの科にも入ってない。でもヒーロー科に入る」

「どの科にも入ってない…？」

「ああ。俺…：みんなよりも学ぶのが遅かったから…：編入する」

「そうだったんだ…」

「…：ブロリー！もし同じ組みになったらよろしくな！」

切島がブロリーの前に手を出す

「…：ああ」

ブロリーは切島の手を強く握り笑いあった

すると教室の扉が開かれる

「ブロリー、約束していた携帯を取りに…：ってなんでお前らがいる？」

「相澤先生!!」

「相澤、仕事終わったのか？」

「まあ、昨日のうちに今日の分を終わらせておいたからさっさと行くぞ」

「なんで相澤先生がブロリーの携帯を…？」

「あー…プロリーは雄英で保護してるんだ」

「相澤、言わなくていい。早く行こう」

プロリーは相澤の話を遮り立ち上がる

「ああ、すまない。お前らも帰れよ？」

「はい」

相澤が扉を開けようとするのと相澤の携帯がなる

「もしもし…はい…はい…わかりました」

「どうしたんすか？相澤先生？」

「救援要請が来た。プロリー、悪いが携帯はまた今度になりそうだ」

「…わかった」

プロリーはそう返事をしていたが顔はとても残念そうにしており落ち込んでいるように見えた

「相澤先生!!良かったら俺たち行きましようか？」

「!!」

「取りに行くだけなんすよね？だったら場所案内してくれたら俺たちが付いて行きますよー」

「困ってるなら助けなきゃね！」

「お前たち…」

相澤はそういうと小さな財布をブロリーに渡し校門までついていった

「いいか？必ず7時に帰って帰ること。外で個性を使わないこと。何かされても殴らな

らな」

「わかってる」

「ブロリーの私服のクセよ」

「the・猫好き!!って感じですわね」

「だって服のど真ん中に目のでっかい猫描いてあるよ？」

「ガンリキネコだ…」

「あと…あの毛皮はなんだろ…」

「私も気になって聞いてみたのですが教えてくれませんでしたわ」

「ブロリーが言いたくないなら無理やり聞かないでやろうぜ？」

「そうだね」

7人がそう話していると相澤先生が近づいてきた

「お前たちも気をつけろよ。あと…ありがとな」

「いえ！相澤先生にはお世話になってますので!!」

「それに私たちも用事あったしねー！スタバ！」

「すたば？」

「コーヒーとか飲むとこだよー！」

「コーヒー……か……」

ブロリーは携帯とコーヒーを楽しみにしみんなと街へ向かった

「ここが携帯ショップ……」

「男子たちはブロリーに付いてて！ 私たちはスタバに行くから後から来てねー！！」

「ブロリーさん。また後で」

「ああ、また後で……」

ブロリー達は携帯ショップの中に早速入った

「携帯がいつばいだ……」

「ブロリー！ まず店員さんに携帯の受け取りに来たって言わねえと！」

「そ、そうか……」

ブロリーは上鳴に言われた通りに店員さんに話しかける

「あの……携帯の受け取りに来た……ブロリーです」

「お待ちしておりました。店内で少しお待ちください」

店員はそう言って裏へ行く

「ブロリー！ケースとフィルムはこれがいいぜ！対衝撃！」

「おお……」

「何色にする？」

「……緑」

ブロリーと上鳴、切島が喋っていると店員の人から裏から出てきてブロリーを呼ぶ
「お待たせしました、ブロリーさん。こちらがあなたの携帯になります。お気をつけて
お持ち帰りください」

「あ……ありがとうございます」

ブロリーは店員から携帯の箱の入った袋をもらい、ケースとフィルムを買って店の外
へ出た

「ブロリー！やったな！」

「ああ……！」

「設定とかも教えるから女子達と合流しようぜ！」

「すたば……だったか？」

「ああ！スタバは確かこの先に行ったらあるよな？」

「おう！何度か行ったことあるからもう覚えてるぜ！ブロリー！俺らについて来い！」
「わかった」

ブルリーは携帯を大切に抱えて持ちながら上鳴、切島についていった

「おついた！おー…あれ？男達に囲まれてね？」

「本当だな…ナンパか？」

「なんぼ？」

「あーなんて言えばいいんだろな…知らない人に対して話しかけて…遊びに連れて行くこと？…かな？」

「……八百万百達は困ってるか？」

「それは…困ってるだろうなあ…」

「なら止めに行く」

「えっちょ！おわ!!？」

ブルリーは抱えていた携帯を上鳴に渡して八百万達の元へと向かった

　　ブルリーが男どもを追っ払う2分前

「ねえ！私たちが待ってる人いるから退いてよ！」

「そんなこと言わなでさあ、俺らと一緒に遊ぼうぜ？」

「ベタなナンパの仕方だねえ」

「ほらはやくいこ？切島達もう来てるかもしれないし…」

「いやいや！そんなのほっとけて！」

1人の男が八百万の腕を掴んだ瞬間、後ろの二人が空に浮く

「うお!？」

「ちよちよ!!なんだよ!!離せ!!」

みんなが顔を上げるとそこには2人の男を持ち上げたブロリーがいた

「「ブロリー!」」

「ブロリーさん!」

「八百万百達が嫌がってる、離れろ」

ブロリーの鋭い眼が八百万の手を掴んでいる男を震え上がらせる

「は、はい。す、すみませんでした!!」

男はそうとうと全速力で立ち去った

「「お、俺たちも降ろしてくれええ!!」」

「……すまない。今降ろす」

ブロリーは2人をそつと降ろすと2人は全速力で逃げた男を追いかけていった

「ブロリーさん。携帯買えたのですね！」

「ああ、上鳴に持ってもらった。大丈夫だったか？」

「うん！ありがとうね！ブロリー！」

「はいこれ！男子達のコーヒー！」

葉隠が一人ずつにコーヒーの入った袋を渡す

「コーヒー……」

「見たことあるよね？」

「ある……シヨクインシツで相澤と山田がよく飲んでる」

「山田……？」

「山田だ」

ブロリーは袋からコーヒーを出し蓋を開け飲む

「どうですか？美味しいですか？」

「………苦い」

「コーヒーですもの」

「匂いで薄々気づいてたが……こんなに苦いなんて思ってた……」

そう言いつつもブロリーはコーヒーを飲み干した

「……ちそうさまでした」

「よしや！ブロリー！携帯の設定の仕方とか色々教えてやるよ！」

「ありがとう」

そして全員でスタバに入り、ブロリーに携帯の使い方を教え連絡先、ラインを交換してそれぞれ帰宅した

PM 10:45

『YO！ブロリー！はじめてのスマホはどうだ!?!』

「……山田、どうやるんだ？」

『ん？何が?』

「今日、友達がたくさんできた。それで携帯を取りに行く時もついてきてもらった……だからメールでありがとうって送りたいんだ。でも……どうやって送る?」

『oh…それは一大事だな！まず送りたい奴のアイコンをタップしてみ?』

「あいこんをたつぷ……」

ブロリーは大きな手で携帯の画面を触る

『そこでだな……』

八百万 side

「……いけません、もうこんな時間……そろそろ寝ないといけませんわね」

八百万が机の電気を消しベッドに入ろうとした瞬間、扉がノックされる

「百お嬢様、携帯にメッセージが届いております」

「……誰からでしょう……こんな夜遅くに……」

八百万は扉を開け、執事のお爺さんに携帯をもらいラインを開く

するとそこにはブローリーからのメッセージ

” 今日ありがとう、また明日”

と、書いてあった

「まあ!!」

八百万はとても嬉しくなり執事に携帯を返し、部屋の電気を消して明日のことを考えながら眠りについた

だが八百万は知らない

ブローリーはこのメッセージを送るのに

20分近くかかっていたことを

「やっと送れた…」

『これも練習あるのみだ！頑張れプロリー！！』

「ああ…！！」

『残り6人だろ！？頑張れー！！』

この後、なんとか感謝のメッセージを送り終わったプロリーは相澤に携帯を預けてようやく眠りについたのであった

迫り来る悪

コンコンツ

ブロリーの部屋の扉がノックされブロリーは眼を覚ます

「起きた…」

返事をするとうすぐ相澤がブロリーの部屋に入ってくる

「ブロリー、明日はUSJに行く。お前とは現地集合になってるから絶対遅刻するなよ？」

「わかった。早めに寝る」

ブロリーはそう言って布団から出て顔を洗い始めた

「明日からお前もうちのクラスの一員になる。今回のクラスの連中は…すごい奴らが揃ってる。多少の問題児はいるがきつと仲良くなれる」

相澤の嬉しそうな顔

ブロリーはそれを見て安心する

「相澤が楽しそうでよかった。前のクラスの話をする時は悲しそうな顔をしていたから

な」

「そうか…引き締めていかないと」

相澤は顔をパンツと叩き部屋を出る

「課題終わらせとけよ。それと廃校舎何だが…窓ガラスが割れ、床の損傷が酷いため、しばらく入れねえぞ」

「なら屋上にいるからいい」

「鳥食うなよ？」

「……わかった」

わかったと言うまで少し間があつたため少し心配そうな顔をする相澤だがため息をつくと1—Aに向かって歩き始めた

ブローリーは相澤が部屋を出て10分後に制服に着替えて屋上に登る

「気持ちいい」

屋上で風を受けているとやけに下が騒がしいことに気づく

「またマスコミか…？」

ブローリーが下を見ると校門には沢山の人がいた

オールナイトが就任してきてからと言うもの、毎日マスコミが雄英に押し掛けてくる朝早くから夜遅くまで、1日中いるやつだっている

「……大変な奴らだ」

ブロリーはそう呟くと英単語の書いてある本を読み始める

4時間後……

「……ん……しまった」

ブロリーは相澤からもらった課題を終わらせた後あまりにもいい天気だったため少
しだけ横になった

だが想像以上に気持ちよかったためそのまま目を閉じて寝てしまったのだ

ブロリーは起き上がり伸びをする

そして自分の部屋へ戻ろうと思ひ、教材を持ち屋上の扉を開けようとした瞬間、嫌な
気配を感じた

ブロリーは急いで空に飛び上がり、辺りを見回す

すると校門が崩れていつてるのが見えた

ブロリーは急降下し校門の前で仁王立ちする

「グルルルルル……!!」

そして扉が完全に塵と化しマスコミが入ってきた瞬間、プロリーは体からオーラを放ち始める

「があああああああ!!!」

プロリーが雄叫びをあげるとマスコミ全員の動きが止まる

「うわっ!!!」

「な、何？」

「誰だ…？」

マスコミが再び動き出しカメラの電源を付けようとする

プロリーはカメラを動かそうとしているマスコミを睨みつけ自ら放つオーラをマス

コミ達の方へ向け、オーラで地面に抑えつける

「グルルルルルル!!」

すると相澤と山田が走ってくる

「プロリー!! やめろ!!」

『落ち着け!! プロリー!!』

「相澤、山田!!! 何でだ!! こいつらは扉を壊して入ってきた!!」

「マイク、警察を呼んでくれ。俺はプロリーを落ち着かせる」

『わかった』

マイクは急いで携帯の電源をつけ警察に連絡する

「ブロリー、エネルギーで押さえつけるのをやめるんだ」

「こいつらが…襲ってくるかもしれない!!」

「ブロリー、落ち着け。こいつらはそんなことしない」

相澤がブロリーに近づき落ち着かせようと話しかけていく

「何で…何でそう言い切れる!!?」

ブロリーの問いに相澤が止まる

「こいつらは、悪い奴らだ!!また…誰かがいなくなるのは嫌だ!!!」

ブロリーはそう言って力を強く込めた

「ブロリー!!!」

「相澤くん!!任せて!!」

相澤の横から18禁ヒーローのミッドナイトが飛び出した

ミッドナイトはタイツを少し破り個性を発動させる

ミッドナイトの個性は「眠り香」、その名の通り彼女から発生する香りを嗅ぐと眠りにつく

女よりも男の方が効きやすい

そして彼女は雄英でブロリーのことを一番安全に無力化できる唯一のヒーロー
ブロリーは眠り香を嗅ぐと地面に倒れ眠りにつく

「すみません…ミッドナイトさん」

「いいのよ。それにブロリー君…とても怯えた顔をしてたもの」

『警察にはもう連絡した…が、マスコミたちのビビリ方すげえな…』

相澤とミッドナイトがマスコミの方へと視線を向けるとマスコミたちは全員腰を抜
かし動けなくなっていた

そして15分後、警察が駆けつけマスコミを一人一人連れていった

ブロリーは保健室に運ばれそこで眠っている

念のため検査をリカバリーガールにしてもらい相澤はブロリーの近くに立ち、見守つ
ている

「トラウマ…だろうね」

「トラウマ…?」

「彼、前に起こったこととマスコミが侵入してきたことが重なっちゃったんじゃないか
ねえ…」

リカバリーガールがそういうブロリーの頭を撫でる

「この子にきつちりとヒーローの定義と手加減を教えてやらないとダメだよ。じゃない

とこの子…ヒーローじゃなくなっちゃうよ」

リカバリーガールは厳しい言葉を言い保険室から出ていった

相澤はブロリーの顔を見て自分の顔を片手で抑えたため息をつく

「相澤…怒っているか？」

「!!　ブロリー…目が覚めてたのか？」

「…ごめんなさい…俺…怖かった…また…ガウみたいなきっかけが起きるんじゃないかと思っただ…」

「いいんだ…ありがとうな、俺たちを守ろうとしてくれて。でもなブロリー、ヒーローはどんなに”悪い奴”でも殺したらいけないんだ」

相澤はブロリーに優しい言葉で話す

「ブロリー、人は殺さない。手加減して無力化する。約束できるか？」

「もし、相澤や友達が…殺されてもか？」

「…ああ。怒りに任せて敵を殺めればお前も”悪い奴”になる」

「わかった」

ブロリーは相澤の言葉を渋々受け入れ、ベッドから出る

「相澤、マスコミがやったのか？雄英の扉を壊したのは」

「いや…お前にも言ったが奴らにそんなことする度胸はない」

「じゃあ一体誰が？」

「……」悪が動き始めてるのかもな」

}\
???
}

「ハア……また作っているのかい？ オール・フォー・ワン」

「当たり前じゃないか！ 彼が見つからなかつたんだ。作るしかないだろう！？ 彼を超える

……」悪魔をね。そう思はないかい？ ドクター？」

「君はその悪魔を後何体作るつもりだ？」

つ
オール・フォー・ワンとドクターの前には薄い緑色の液体で満たされたカプセルが3

1つ目のカプセルには、2本の角が生え、尻尾の生えている子供

2つ目のカプセルには、体の色は黄色でぼっちゃりとした子供

そして3つ目のカプセル、そこに入っていたのは……ブロリーによく似た男が入っていた

U S J 襲撃編

敵連合、襲来

マスコミ襲撃の翌日

『グッモーニンツ!!プロオオリイイー!!今日はお前がーA組ヒーロー科の一員になる記念すべき日だぞ!!yeeeeeeeah!!!』

「うるさい…山田…!!叩くぞ…!!」

『お前に叩かれちゃ俺死んじまうぜ!?それより早く起きろよ!イレイザーがキレルぞー?』

「何で…今何時だ?」

「ただ今、昼の12時59分!!!」

「全然グッドモーニングじゃないツツ!!」

ブロリーはベッドから飛び上がり急いで顔を洗い始める

『いやーてつきりもういつてるのかと思つてたら消太から連絡きてよ!!「ブロリーはどこだ?」って低い声が』

山田は髪を下ろしてわざわざ相澤の真似をする

「コスチュームは…!?」

『そのカバンの中だ！お前の超イカしたコスチューム!!ほらほら着替えな! hurry

u p!!』

急かす山田に服を投げ着替える

「……上はいらないかもしれない…」

『一応着てったほうがいいと思うぞ?』

「……わかった」

ブルリーは上を着るとすぐに窓を開け空から飛び出した

『おいブルリー!!頑張ってこいよ!!P u l s u l t r a d a!!!』

「……ああ!」

ブルリーは山田に手を振り急いでUSJへ向かう

ピコンッ

ポケットに入っていた携帯が突然震え、ブルリーは空中で止まり携帯を開く

「…相澤からだ」

”説教は終わってからだ。急いでUSJにこい”

ブルリーは汗を垂らし急いでメールを送信する

”いまむかつてる。ごめんなさい。”

ピコンッ

”場所はわかるか?”

”むかしいったことある、いける”

ブロリーはそう返信してさつきよりもスピードを上げてUSJへ向かった

くその頃、USJではく

「ハア……」

「どうしたんすか?ため息ついて?」

相澤の大きなため息に気づいた切島が話しかける

「今日、本当はブロリーがこの場にいるはずなんだが…寝坊していま学校を出た。ここに着くのは3、4分だろうな」

「ブロリーが…?てことは!!」

「ブロリーさんは1-A組にくるのですね!!」

「そうだ。お前ら、新しい仲間が来るまで……」

「先生、あれなんですか…?」

葉隠が広場の方を指差し、相澤は指を刺された方を見る
するとそこには黒いモヤが宙を漂っていた

「何だあれ！入試みたいなもう始まっているぞパターン!?」

「全員!!ひとかたまりになって動くな!!あれは……敵だ!!」

黒いモヤは次第に大きく広がり始める

「やっぱり先日のあれは……クソ共の仕業だったか!!」

相澤がゴーグルを装着し構えたと同時にモヤの中から顔に手をつけた男が現れた

「……いいか……お前ら……」

” 平和の象徴を殺せ”

顔に手をつけた男、死柄木弔がそういうと敵たちが動き始める

相澤は急いで携帯を開きブローリーに連絡をする

” 来るな!!!”

しかしメールは送られない

相澤は舌打ちをしみんなに指示を出す

「13号!!避難開始!学校に電話試せ!センサーの対策も頭にある敵だ。電波系のやつが妨害してる可能性がある!!上鳴、お前も個性で連絡試せ!」

「ツス!」

「せ、先生は!? 一人で戦うんですか!？」

すぐ後ろにいた緑谷が相澤先生に焦りながら話しかける

「あの敵の数じや個性を消すつて言つても…イレイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの捕縛、正面衝突は…!!」

「いいか緑谷、ヒーローは一芸だけじゃ務まらない、13号! 任せたぞ!!」

相澤はそう言うのと地面へと降りていった

(見たところ…ただのチンピラ達だな…この場ではあの黒モヤ、脳が剥き出しの大男、手のひらが厄介そうだな…)

相澤そう考えながら敵達の中に突っ込んでいった

「みんな! 早くこっちへ!!」

13号が1-A組のみんなを引き連れ入り口に向かう

しかし黒いモヤ、黒霧に先回りされる

「はじめまして、我々は敵連合。せんえつながら…この度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせて頂いたのは平和の象徴、オールマイトに生き絶えていただきたいと思つてのことです」

黒霧の言葉にその場にいる生徒全員が固まる

「本来ならばここにオールマイトがいらっしやるはず…ですが何か変更があつたので

しようか?……まあそれとは関係なく、私の役目は」

黒霧が喋り動こうとした瞬間、切島と爆豪が黒霧に攻撃をする

「その前に俺たちにやられることは考えてなかったか!」

「……危ない危ない、そうですね……生徒といえど優秀な金の卵。さっさと散らして、罅り殺さねば」

黒霧が生徒を霧で囲い始める

回避に成功する者もいればそのまま霧に包まれどこかに消えてしまう者もいた

「おや……7人も残ってしまったか……まあいい。この程度なら私でも倒せる」

黒霧が体を広げ生徒達の方へじりじりと近づいていく

「みんな……僕の後ろに!!」

13号の指示通り全員後ろに隠れる

「みんなは!?!いるか!?!確認できるか!?!」

「散り散りにはなっているが施設内にいる!」

「物理攻撃無効でワープ!?!最悪の個性だぜおい!!」

「……飯田君、学校までかけてこのことを伝えてください」

「ですが……!」

「非常口!外に出たら警報がある!だからこいつらは中でことを起こしてんだ!!」

「外に出れば追っちゃ来ねえよ！お前の足でモヤ振り切れ!!」

砂藤と瀬呂が肩を掴み飯田を後ろに行かせる

「救うために…個性を使ってください!!」

「食堂の時みたく…サポートなら私超できるから！する！から!!」

震えた手で麗日は横に立つ

「みんな…!」

飯田は入り口に向かって走り出した

「手段がないとはいえ…敵前で策を語る阿呆がいますか」

「バレても問題ないから…語ったんでしょうが!!」

13号が指を開き吸い込み始める

「貴方は災害救助で活躍するヒーロー、戦闘経験は一般ヒーローに比べ半端劣る…」

黒霧はそう言うのとチンピラ達を10人ほど呼び寄せる

「私をかまっついては他の卵達がやられますよ?どうします?13号」

「くっ!!」

13号がチンピラー1人をブラックホールで引き寄せ用とした瞬間、前にワープゲートが現れる

「戦闘経験は大事ですね…自分の個性で自分をチリにってしまった」

(しまっ…た…!!)

13号は膝をつき床に伏せる

「さて…あのメガネを捕まえなければ」

黒霧が飯田の前にワープし、チンピラ達は先生に寄り添う生徒達の距離を詰めていく

「絶体絶命…諦めなさい。メガネ」

「諦めない…！俺は…！みんなを助けるために！」

「生意気なメガネだ」

黒霧は体を大きく広げ飯田を覆う

「貴方のように生意気な卵は…空高くから落ちて割れてもらいましょう」

飯田は上空に放り出される

「飯田!!」

「飯田君!!」

「う、うわあああああ!!」

飯田は手を前に出し目を瞑る

しかしいつまでたつても地面に落ちない

飯田は恐る恐る目を開けると自分の体が空中で止まっているのに気がつく

(麗日君の個性…？いや違う…誰かに持たれている!?)

「大丈夫か？」

飯田はハツとし、上を見上げるとそこには足を持っているブロリーがいた

「き、君は？」

「俺は…ブロリー」

「なっ…！まだ生徒がいたとは…!!」

「ぶ、ブロリー君！ぼ…俺を入り口の前で降ろしてくれないか!?」

「わかった」

ブロリーは飯田を抱え、USJの入り口の前に置く

「……あいつらは敵…だな？」

「あ、ああ」

「早く先生達に知らせてこい。俺がここであいつらの足止めをする」

ブロリーは再び空を飛びチンピラ達に囲まれている生徒の元へ飛ぶ

「なんだお前!!」

「ガキが調子乗ってんじゃねえぞ!!」

「……やる」

「あ？」

「手加減してやる。まとめてかかってこい」

「ちよ!?!お前何言ってるの!?!」

瀬呂がツッコむがブロリーに反応はない

「お望み通り!まとめて行ってやるよ!?!」

敵達はナイフを持ってブロリーに近づく

「ああああああ!!!」

ブロリーは雄叫びをあげ、右手にエネルギー弾を作り出す

そしてその右手を横に振る

するとエネルギー弾は横に長く伸び、敵達をまとめて吹き飛ばした

「「はああああああ!?!」」

「凄……!」

「手加減……してるんだが……」

ブロリーは頭を掻き、倒れた敵を1箇所を集めた

「これは……ゲームオーバーですかね……」

体を縮め何処かへ逃げようとする黒霧

しかしブロリーはそれを見逃さずエネルギー弾を黒霧に当てる

「逃がすわけない……!?!」

黒霧がエネルギー弾に怯み、体を出した瞬間、ブロリーは首を掴み地面に叩きつけ山

の方に放り投げた

「芦戸、その敵達縛れ。俺はあいつを倒してくる」

ブロリーは黒霧を追いかけ空を飛び始めた

この時のブロリーはエネルギー弾、地面に叩きつけた時など相澤との約束を守ってとても手加減して攻撃していた

あんな事が…起こるまでは……

ブロリーVS脳無 Part 1

「待て!!モヤモヤ!!!」

「待てと言われて待つ阿呆がいますか!!!」

ブロリーは黒霧を追いかけ山岳ゾーンへと入った

ここは山岳ゾーン

本来ならば崖に落ちた人を助ける時のための訓練に使用する場所

ブロリーは黒霧にエネルギー弾を再び放つがワープホールに吸い込まれ無効化され

る

「チイツ!!」

ブロリーは黒霧に再突進しようとするが下で声が聞こえるのに気づき下を見る

するとそこには敵に囲まれている八百万、耳郎、上鳴がいた

「!!!」

ブロリーはとても驚いた表情を浮かべたがすぐに黒霧を見る

「……あなたにとつてあの卵達は大事なんでね?なら……あなたにもらったエネルギー

弾、全てあの卵達にお返ししましょう!!!

そう言うのと黒霧は3人の上にワープを出現させる

「!! やめろ!!!」

「やめるわけないだろう!!」

ブロリーは急いで3人の上に行き、ワープホールの前にエネルギーの壁を作る

しかしエネルギー弾は来ずにワープホールからは倒したチンピラ達が降ってきた

「あなたのエネルギー弾はすでに外へ出しています。私の作戦にのっただきありがたい
とうございしました」

黒霧はそう言つて空中で消えていく

ブロリーは降ってきたチンピラ達を地面に放り投げ八百万達の元に降りる

「ブロリーさん!来ていらしたのですね!!」

「ああ。無事か?」

「この状況見ろつて!!囲まれてんの!!」

「お前の個性はなんだ?」

「俺の個性は帯電!!電気溜めて出すだけ!!お前らにも被害が出るんだよ!!」

「そうか…八百万…お前、怪我したのか?」

「えっ?…ああこのくらい平気ですわ」

「…待ってろ」

「えっ?」

ブロリーは敵達の方へ向き、自分より少し大きな男の前に行き男の前で止まる

「なんだあ?ガキ!!殺されたくねえならどけ!!」

「お前なんか俺は殺せない」

「なんだと!!!なら…今すぐに叩き潰してやるよ!!!」

男は拳を振り下ろしブロリーの顔を殴る

「なっ…!?!」

しかしブロリーにはダメージは入らなかった

「くそっ!!くそっ!!!どうなってやがる!!」

男は何度もブロリーに殴りかかるがブロリーは平然としている

「ふんッ!!!」

何度も顔に攻撃を受けたブロリーは男の首を掴み持ち上げる

「ガッ!!?」

男は慌てて首に手をやった

だがブロリーの手を引き離すことはできない

「ぐるぐる…!!がああああ…!!」

「ブロリーさん!!落ち着いてください!!」

首を掴まれている男はじたばたと暴れるがブロリーの手は全く緩まらない

「おいー!お前!!手をはな」

「がああああああ!!」

ブロリーは手からエネルギー弾を放ちチンピラ達を吹き飛ばす

「近寄るな…!!」

地を這うほど低い声でブロリーはチンピラ達に話しかける

チンピラ達はそのブロリーを見てとても怯えていた

「ブロリーさん!!」

八百万の声でハツとなるブロリー

「その手を離してください!!!」

ブロリーは自分の手を見ると泡を吹いている男がいた

ブロリーは慌てて手を離し地面に転がった男は引きつった顔をし地面を這いながら

逃げていった

「……」

「ブロリーさん!あのままでは殺してしまうところでしたわよ!」

「流星にやりすぎだよ…」

「す、すまん……」

「まあとりあえずあいつら逃げていったしき！早くみんなと合流しようぜ？」

「俺は……相澤のところへ行く。サポートする」

「え、ちよつと待てブロリー!!おい!!」

上鳴はブロリーを止めようとするがブロリーはすぐに飛び立っていった

「私たちも行きましょう!!!」

「はあ!?!なんで!?!」

「上鳴、あんた見てなかったの!?!ブロリー一人でサポートできるわけないじゃん!!」

「で、でもよ……」

「ああもう!?!ならうちとモモで行くからいい!!」

耳郎と八百万はブロリーを追いかけ山岳ゾーンを抜けていく

「……わかったよ!!俺も行く!!行くからまってくれえ!!」

上鳴も覚悟を決め2人を追い始めた

↳USJの広場↳

「すみません、死柄木弔。子供を一人逃してしまいました」

「はっ……？……はあ……黒霧……お前が移動用の個性持ちじゃなかったら殺してた……プロヒーローは強いしチンピラどもは役に立たない……はあ……ゲームオーバーだ……帰るか……」

死柄木がそう言つて脳みそ丸出しの黒い巨体に近づいていく

「脳無、帰るぞ」

「ぎゅああ……」

脳無は唸り声をあげ立ち上がり手に持つている何か引きずり始める

「ああ……そいつはもういいよ。もう動けないだろうしな……可哀想に……個性を消せるつていう素敵な個性があつたのに……圧倒的な力の前にはただの無個性へ変わってしまう……」

脳無が引きずつていたのは相澤だった

両腕が曲がつてはいけない方向に曲がり

頭からは大量の血が流れている

「ぐっ……く……そ……」

「……脳無、念のためもう一回頭地面に叩きつけとこう」

死柄木がそう言うのと脳無は相澤の頭を掴み地面に叩きつける

「これでいい……さあ帰ろ」

「帰るつて……！今帰るつて言つたか！！助かるんだ俺たち！！」

「でも……気味が悪いわ……緑谷ちゃん……」

「うん……これだけのことであつさり引き返すなんて……」

この場には死柄木、黒霧、脳無の他に蛙吹、峰田、緑谷がいた

脳無の圧倒的な力の前に……死柄木から溢れ出す狂気のオーラに何もできず水の中に入ってしまった

「けどもその前に……平和の象徴としての矜持を少しでも」

先程まで遠くにいた筈の死柄木が突然緑谷の前に現れる

そして素早く蛙吹の顔に手を近づけていった

「……本つ当にかっこいいぜ。イレイザーヘッド」

死柄木の個性は崩壊

五指で触れたものを名の通り崩壊する個性

しかし相澤がその個性を消し、蛙吹を守ったのだ

脳無は再び相澤の頭を地面に叩きつけた

「脳無、この3人殺しておけ」

死柄木がそう命令すると脳無は高くジャンプし緑谷の後ろに大きな水しぶきとともに着地する

!!!

緑谷は慌てて後ろに振り返りスマッシュと叫びながら拳を当てた瞬間激しい風が巻

き起こる

しかし脳無はビクともしなかった

「いい動きするなあ…スマツシユ…オールマイトのフォロワーかい？まあいいや、脳無。そいつ殺」

「相……澤……？」

死柄木が脳無に命令を出す直前

ブロリーが相澤のところにとどり着いていた

「なんだ？もう来たのか？」

「死柄木弔、彼はこの場で殺しておいたほうがいいと思います。彼のパワーは成長していけば必ず我らの邪魔になる」

「…そうか、なら脳無。あいつ殺せ」

脳無は緑谷の手を離しブロリーに近づきブロリーを殴る

「ぐあっ!？」

ブロリーが顔を抑えると脳無は足を掴み水辺に叩きつけ空中に放り投げた

「トドメをさせ。脳無」

脳無は跳ね上がり空中に浮いているブロリーの腹に両腕を振り下ろし水難ゾーンに

沈めた

「……未来の強敵になるガキも殺したし、帰るぞ黒霧」

「はい」

黒霧がワープゲートを開き死柄木が中に入ろうとした次の瞬間、背筋に悪寒が走る

「黒霧……あいつ本当に死んだのか？」

「死柄木弔、あれを!!」

黒霧の視線を追いかけ死柄木は水辺を見る

「なんだ……?」

プロリーの沈んだ場所からどんどんと波が広がっている

次第に波は大きくなり中心に渦を巻いて深く沈んでいく

「うううう!!うおおおおお!!」

そこにいたのは髪の毛が逆立ち緑色のオーラを纏っていたプロリーだった

ブロリーVS脳無 Part 2 / ブロリーVS平和の象徴

「ううううう!!ウオオオおおお!!」

ブロリーの雄叫びと同時に緑のレーザーのようなものがUSJの天井をつき抜いた
「おいおい…なんだよあいつ」

緑谷たちは水から上がり相澤先生を担ぐ

しかしブロリーはそれを見て足元にエネルギー弾を放つ

「がああああああ!!」

「お、おい!!俺ら仲間だよ!!相澤先生を」

「うがああああ!!」

ブロリーは峰田の話を聞かずに3人との距離を詰める

「待って!僕たち悪いやつじゃ…」

「アイザワヲ…!!ツレテイクナアア!!」

ブロリーは手にエネルギー弾を纏わせ地面に拳を振り下ろす

すると地面に緑の光が広がったと同時に亀裂が入り地面は砕ける

「がああああああ!!」

「脳無、あいつを…殺せ!!!」

脳無はブロリーのもとに走り始めブロリーの背中を思いつきり殴る

しかしさつきとは違ってブロリーは怯まずに立ったままだった

「グルルル…!!アアアアアア!!」

脳無の腕を掴んだブロリーは振り返り口からエネルギー砲が放つ

「なんだよ…こいつ!!」

脳無は自らの腕を千切り回避する

「脳無!早く殺せ!!」

脳無はブロリーに再突進するもすんなり避けられる

「がああああ!!」

ブロリーは脳無の顎に拳を当て腹にはエネルギー弾を当てた

脳無の上半身は頭を残し何処かに消し飛んでしまった

「こ、殺しちゃった…」

峰田はブロリーを見てとても怯えていた

「あ、あんな奴がまた俺らを襲ってきたら勝てねえよお…」

「プロリーは相澤を担ごうとしている緑谷たちを見つけると手のひらにエネルギー弾を作り投げようとする」

「緑谷ちゃん！緑の弾が来るわ!!」

「くっ…!!」

プロリーがエネルギー弾を投げようとした瞬間、脳無の足がプロリーの背中を蹴った
プロリーは脳無の方に向き直し構える

するとそこにいたのは何事もなかったかのように立っている脳無だった

「脳無はオールマイトと戦うために作られたサンドバッグ改造人間！お前には殺せない!!」

プロリーは再生した脳無の頭を掴み空を飛ぶ

そして脳無を勢いよく地面に叩きつけそこにエネルギー弾を当て続けた

脳無は体がバラバラになるも再び再生し立ち上がる

だが…何かがおかしい

「おい脳無、なんで震えている!!早くあいつを潰せ!!脳無!!」

脳無がぶるぶると震え始めているのだ

プロリーは上空から脳無を睨みつけている

脳無は心も痛みもない

そのはずなのに脳無の顔は恐怖に満ちていた

「ぎゅあああ…ぎゅ、ぎゅあああ！」

脳無はブロリーに背を向け走り始める

「お、おい！脳無!!」

ブロリーはそんな脳無の頭を掴み地面に押し付けて移動し始める

脳無の顔は削れていき脳の部分もあらわになっていた

「やばい…やばい…脳無が遊ばれてる…ラスボスの前に…こんなのが来るなんて……」

「死柄木弔!!逃げましょう!!」

「ああ、逃げなきや…」

ブロリーは脳無を掴み死柄木のところへ飛び立つ

「はっ…?」

死柄木は理解できなかった

恐怖に歪んだ脳無の顔が自分たちの目の前にあったのだから

「逃サナイ…!!」

脳無を放り投げたブロリーに死柄木は攻撃を仕掛ける

しかしブロリーは逆に死柄木の両腕をへし曲げ思いつきり頭突きをかました

死柄木は頭と両腕から血を大量に流し地面に倒れる

「死柄木弔!!」

黒霧が慌てて死柄木を囲みどんどんと小さくなって消える

「があああああ!!」

脳無は離れたところで倒れて動かなくなっていた

ブロリーはその脳無を何度も何度も殴り続け気が済んだのか周りを見渡す

そしてブロリーは気づく

相澤が3人に運ばれていたことに

「うおおおおおおお!!」

雄叫びをあげたブロリーは3人の元へ行き襲いかかる

「き、来たああ!!」

涙目になっている峰田に対して緑谷はブロリーの前に立ち話しかける

「待って!!僕達は相澤先生を守りたいんです!!信じてください!!」

「グルルルルルル…!!」

ブロリーは緑谷をなぐりつけようとした瞬間、誰かに拳を止められる

「間に合ってよかった…!!もう大丈夫!私が出来た!!」

「オールマイト!!!」

「3人とも、急いで相澤君を!!」

「は、はい!!」

「ブロリー少年!! 落ち着くんだ!! 彼らは味方だ」

「オール…マイ…ト…?」

「そうだ…落ち着きたまえ…」

「俺…相澤守れなかった…」

「私をもっと早くにきていればよかったんだ…すまない…」

ブロリーが少しずつ落ち着き始めた瞬間、後ろのチンピラがブロリーに攻撃する

ブロリーの目は再び怒りに満ち溢れその男を殴り飛ばした

「ぐううあう…! ああアアアア!!」

ブロリーは上空に飛び上がり両手を上にあげる

するとブロリーの頭上に巨大なエネルギーの塊が出現する

「ホーリーシット!」

「がああああああ!!!」

ブロリーがエネルギーの塊を地面めがけて飛ばそうとするとブロリーの横から大きな雷が落ちる

「うああ…!?!」

ブロリーはエネルギーの塊を持ったまま素早く逃げ雷の落ちたところを見るとそこ

には八百万たちがいた

「ブロリーさん！落ち着いてください!!敵はもう戦意を失っていますわ!!」

「があああああ!!」

八百万の話を無視し再び敵たちにエネルギーの塊を振り下ろそうとするがオールマイトがブロリーの腹に拳を当てる

「許せ!!ブロリー少年!!!」

「がっ!!!……………グルルルウウウアアアアア!!!」

ブロリーはエネルギーの塊を消し、オールマイトの顔と左胸を掴みエネルギーをゼロ距離で撃ち放つ

「ぐああああ!!」

（いかん…!!傷口を…!!）

オールマイトは口から血を吐き出し地面に落下する

「邪魔ヲ…スルナアアアア!!!」

ブロリーはオールマイトを対象にしオールマイトに襲いかかった

「お、おい!!どうすんだ!？」

「わかんないよ…でも早く止めなきや…!!」

「……………」

「モモ!!早く止めに…」

「なんで…ブロリーさんは先ほどの雷に怯えていたのでしょうか…?」

「えっ?」

「敵がブロリーさんの背中を思いつきり殴っていた時…びくともしていませんでしたよね?ですが雷が降ってきた時あのエネルギーの塊を持ったまま素早く逃げていました…」

「てことは…雷が苦手?」

「なら!上鳴!!」

「だ、だからお前ら巻き込みまうんだよ!!」

「私が絶縁体シートを作ります!オールマイトをこちらにお呼びになつてください!!
オールマイトが絶縁体シートに入ったら思いつきり放電してください!!」

「緑谷!あんたら早く相澤先生連れてって…あれ!?緑谷は!?」

「耳郎が緑谷を探すと峰田と蛙吹を振り払いブロリーとオールマイトの元へ走つていた」

「緑谷ア!!お前行つても勝てねえよお!!」

「緑谷ちゃん!!」

「ごめん!!でもオールマイトを助けなきゃ!!」

緑谷は地面を思いっきり蹴り飛ばしブロリーめがけて飛んで行った

「オールマイトから…!! 離れる!!!」

緑谷の渾身の一撃がブロリーの腹に炸裂する

「ぐうおああああ!!」

ブロリーは地面に膝をつけ動きが止まる

「緑谷少年!!」

「オールマイト…: 八百万さんたちの元へ…!!」

緑谷は右足と右腕が折れ動けなくなっていた

「グルルルルルル!!」

膝をついていたブロリーだが直ぐに立ち上がり緑谷を睨む

「があああ!!」

ブロリーが緑谷に襲いかかろうとした瞬間、ブロリーの顔が爆発する

「オラア!! 死ぬやクソ敵!!!」

しかし怯まなかったブロリーは爆豪を殴ろうとする

だが足が凍りつき動けなかった

「ぐううう!!」

「大人しくしてろ」

やがてブロリーの顔付近まで凍りつきブロリーは動けなくなった

「オールマイト、こんな雑魚敵に何やられてんだ!!」

「油断でもしたんですか?」

「おーい爆豪!! おっ!?! 緑谷大丈夫か!?!」

「君たち!! 早くそこから離れなさい!!」

「ああ!?!」

「何言ってる…」

バキ…バキツ…

後ろで凍っていたはずのブロリーがエネルギー弾を纏って3人に襲いかかる

「危ねえ! 爆豪!!」

切島が硬化しブロリーの前に立つ

しかしブロリーは切島を無視して爆豪を掴み地面に叩きつけた

「ガハツ…!!」

「クソツッ!」

轟が再びブロリーを凍らせようとするもブロリーは空を飛び轟にエネルギー弾を当

てる

「グッ…!!」

水壁を出しなんとか耐えた轟だがブロリーに殴られ気絶する

「グルルルルルル！ガアアアアアア!!」

「ブロリー！俺だ！切島だよ!!どうしたんだよ!!」

「準備できましたわ!!皆さん早く来てください!!」

「切島少年!!」

オールマイトは切島、轟、爆豪、緑谷を担いで八百万の元へと走る

ブロリーはそれを追いかけ始めた

「上鳴！頼んだよ!!!」

「お、おう！俺だつてやるときややるんだ!!」

上鳴がこつちに向かってくるブロリーの前に入りブロリーを止める

「ドケエエエ!!!」

「上鳴!!絶縁体シートを被りました!!お願いいたします!」

「ふうー!!!いくぜ！無差別放電!!130万ボルトオオ!!」

あたりが黄色い光で染められバチバチという音が響く

「ぐがああああああああ!!!」

ブロリーは雷に包まれ頭を抑えながら大きな叫び声をあげる

「すまねえブロリー！許してくれ!!」

「ぐああああああああ!!」

ブロリーの目が元の目に戻りそして地面に倒れる

「おいブロリー!…ウエイじょうぶか!」

上鳴が半分アホになってブロリーを揺さぶる

そして絶縁体シートから出たオールマイト、八百万、耳郎、切島はブロリーの元へと
急ぐ

「大丈夫か!」

「ああ! 気絶してるだけみてえウエイだ!」

「ブフツ…何その顔」

「耳郎さん! 笑ってる場合じゃありません!! 早くブロリーさんを!!」

「私に任せてくれ。もうすぐここにヒーローたちが来る、それまで上で待とう」

オールマイトはブロリーを担ぎクラスメイトの元へと向かった

敵連合の新たな仲間

「つてえ……頭が割れるくらい痛い……両腕へし折られた……完敗だ……！脳無が遊ばれてた……!!チンピラたちは瞬殺だ……子供も強い……それに平和の象徴は健在だった……!!話が違どうぞ……!!先生……」

『違うないよ、ただ見通しが甘かったね』

『うむ……なめすぎだな。敵連合なんちうチープな団体名でよかった……ところでわしと先生の共作脳無は？回収してないのか？』

「とある子供が……脳無の機能を停止させました……」

『何?!』

「恐ろしい子供だ……俺の腕をこんなにしやがった……!!」

『……弔、その子供はどんな子供だい？』

「頬に斜め傷、髪の毛が逆立って……緑色のオーラを放ってた……」

『ふむ……しばらく調べる必要があるね……いいかい弔、悔やんでも仕方ない！今回だつて無駄ではない!!精銳を集めよう!!じつくり時間をかけて!!我々は自由に動けない!だからこそ君のような悪のシンボルがいるんだ!死柄木弔!次こそ君という恐怖を世に

知らしめろ!!』

「…わかった」

『ああそれと…君の元に新たな仲間を向かわせたが…いるかい?』

「居ますよ」

バーの裏口から頭の角が生えた男が現れる

「誰だ…?」

『僕が作った君の新たな仲間さ! 名前は…』

「フリーザです。死柄木弔さん、よろしくお願いいたします」

『これからも作れる分は作っていいこうとは思いますが…人材が足りなくてね…しばらくはフ

リーザが君の手伝いをするだろう!』

「私は死柄木さんとは対等な立場です。いずれ、オール・フォー・ワン。あなたの座を奪

い裏社会の帝王になってみせます」

『おお…それは楽しみだね。だが帝王になるのは弔だよ?』

「ふん…そうですね。なら死柄木さん。今は仲良くしましょう?」

フリーザの笑いに死柄木はゾツとしたがすぐに返事をする

「ああ…よろしく頼む、フリーザ」

「では…その体を治しましょう? あなたたちが居ない間に回復装置を設置しておきまし

た」

フリーザは死柄木を持ち上げ回復装置の中に入れる

「4〜5時間その中にいればすぐ治るでしょう。それまで仲間集めは私に任せてください」

フリーザは回復装置の扉を閉め、すぐに回復装置の部屋から出る

「黒霧さん。あなたはここで待つてなさい」

「ハイ」

フリーザはそう言うのとバーの入り口を開け何処かに行つた

「彼は大丈夫なのですか？」

『心配ない。彼は駒、いずれでできる他の子達の前座にすぎないさ…』

その言葉に黒霧は驚き手を止める

「それはどう言う…？」

黒霧が問いかけるもテレビの電源が消えて話せなかつた

「終わった後フリーザはどうするんだ？先生」

ドクターがオール・フォー・ワンに話しかけるとモニターがいきなり切り替わり画面

の前に紫色の肌の男が現れる

『殺せばいい…弟は甘いところがある。いずれ使えなくなるぞ』

「…君はいつになつたら来てくれるんだい？いくらなんでも修行長すぎない？」

『確実に殺すための修行だ!!半端なまま行つては足元をすくわれる!!』

画面で拳を握る謎の男

『待っている…あと3カ月。そうすれば…確実にオールマイトを殺せる!!もうすぐ第五形態にも慣れ、完全に!!』

『楽しみにしてるよ…クウラ!』

画面で不敵に笑うクウラにオール・フォー・ワンはとても期待し治療を始めた

「それまでには…僕も体を治さなきゃなあ…ああ!脳無を倒したのが彼なら!!早く取り返しに行かなくてはね」

ブロリー、1-Aの仲間入りをする

「死柄木という名前…触れたものを粉々にする力…20代〜30代の個性登録を洗ってみましたが該当なしです。ワープゲートの方の黒霧というものも同様です」

黒のスーツを着た男、塚内が手に持っている紙をめくりながら雄英教師たちの前で話す

「無戸籍且つ偽名か…個性届けは？」

「提出されていません。いわゆる”裏の人間”」

「何もわかってねえってことか…早くしねえと死柄木とかいう主犯の怪我が治ったらまためんどくさいことになるぞ」

「……主犯…か…」

「どうしたんだい？オールマイト」

「いや、1-Aの子らから聞いた話によると死柄木は自分の個性は言わずに脳無の個性については話していたらしい。それと思い通りに事が進まないと言骨に機嫌が悪くなるぞうだ」

「つまり…死柄木は幼児的万能間の抜け切らない”子ども大人”だと?」

「それがなんの関係が?」

「先日USJで検挙した敵の数72名。どれも路地裏に潜む小物だらけでしたが問題はそういう人間が”子ども大人”に賛同しついてきたという事です…ヒーローが飽和した現代…抑圧されてきた悪はそういう無邪気な邪悪に惹かれるのかもしれない」

塚内の言葉を聞きオールマイトはとあることを思い出した

それはヘドロ事件のあった日

”個性を持て余してるやつなんていくらでもいるし”

「まあ、ヒーローのおかげで我々も地道な捜査に専念できる。捜査網を拡大し引き続け犯人逮捕に尽力して参ります」

塚内の話が終わり他の教員が立ち始める

「オールマイト、死柄木は子ども大人…逆に考えれば生徒らと同じで成長する余地がある…もし優秀な指導者でもついていたりしたら…」

オールマイトに校長は少し不安そうに話しかける

「……考えたくないですね」

ふとオールマイトの頭にとある人物がよぎる

だがすぐに違う…そう判断した

違つてほしいと願つていた

USJ襲撃の翌日は臨時休校になったが生徒たちの気は休まらなかった

そして

「お早う」

いつも通りの時刻に相澤がやってきた

「「復帰はええ!!」」

「先生!!無事だったのですね!!」

「無事っていうんかなアレ……」

相澤は顔、手など見えるところは全て包帯でグルグル巻きだった

みんなが心配するも相澤は話し始める

「おれの安否はどうでもいい、何より……戦いは終わつてねえ」

「ああ?戦い?」

「まさか……!!」

「また敵が……!」

「雄英体育祭が迫ってる！」

「クソ学校ばいのキタアアア!!」

全員椅子から飛び上がり両手を上にあげて叫ぶ

しかし我に返った葉隠が相澤先生に話しかける

「待って待って！敵に侵入されたばっかりなのに大丈夫なんですか？」

「逆に開催することで雄英の危機管理体制が盤石だと示す……って考えてるらしい。警備システムの点検、強化、警備ヒーローも例年の5倍にする。何より雄英の体育祭は最大のチャンス……敵ごときで中止していい催しじゃねえ」

雄英体育祭

それはかつてのオリンピックに代わる日本のビッグイベントの一つ

雄英の体育祭はトップヒーローたちがスカウト目的で見ると

つまり雄英体育祭で目立てば目立つほど名のあるプロヒーローの元に行ける確率が上がる

プロに見込まれればその場で将来が拓ける

みんなは相澤にこのことを説明し終わると話を切り替え

「それと……このクラスに編入生が来る。本当はUSJの時に自己紹介を含めさせるつもりだったんだが……入っておいで」

大きな扉をあけ、ブロリーが中に入ってくる

「…ブロリーです。よろしく…お願いします」

「もちろんブロリーも体育祭に参加する。ブロリー、お前の席は八百万の後ろだ」

「わかった」

ブロリーは葉隠の横を通って八百万の後ろの席に座ってすぐSHRは終わり1限の授業が始まった

く四限目現代文終了後く

「ブロリーさん。改めてよろしくお願いします」

八百万が後ろに振り返りブロリーに話しかけようとするとその前にブロリーは轟の横に立っていた

「……なんだ？」

「あの時、蹴つてごめんなさい」

ブロリーは頭を下げ轟に謝る

「…大丈夫だ」

轟はそう言い席を立って何処かに行く

「あと…爆発する人…ごめんなさい」

「ああ…!? テメエなんかの蹴りいてえわけねえだろ」

爆豪はブロリーを思いっきり睨みつけたあと再び怒鳴り散らす

「いつまで見てんだ テメエ! さっさとどっかいけや!!」

「…:…: 犬みたいだな…」

「あ?」

「あの…:…: もこもこしてる犬…」

ブロリーが頑張つてジェスチャーで伝えようと手を動かす

すると後ろから瀬呂が歩いてきてブロリーに携帯を見せる

「なあ、もしかしてその犬ってこれか?」

その携帯の画面に映っていたのはもふもふした茶色のポメラニアンだった

「あ、これだ」

「あああ!? テメエふざけんな!!」

「ま、まあまあ落ち着けて…: ブフツ」

ブロリーに殴りかかろうと立ち上がった爆豪を切島が止めに入るもその切島は笑っ

てしまう

「笑うな!!」

「爆豪改めポメ豪だな！」

「テメエぶつ殺すぞ!!!」

爆豪が上鳴に「殺す」そう言った瞬間ブロリーの表情が変わった

「殺すって…言うな…!!!」

ブロリーは爆豪を少し睨んでいると背中をトントントツと突かれると元の顔に戻り振り返る

「ブロリーさん。お食事一緒にどうですか？」

「…行く」

「爆豪…ブロリーは“死ぬ”とか“殺す”とか嫌いなんだ。あんまり言うなよ？」

「……チツ」

舌打ちをした爆豪は席に座りなおし弁当を取り出した

「お？これお前の母さんが作った弁当？」

「俺だわ!!ナメんなクソ髪!!」

「いやナメてねえよ…」

食堂に着いたブロリーと八百万

「ブロリーさんは何を食べますの？」

「…カレー、シチュー、パン、肉、ラーメン、寿司…お腹が膨れるまで食べる」

「まあ…よくお食べになるのですね」

「八百万百は何食べるんだ？」

「私もカレーにしようかしら…それに八百万百ではなく八百万や百でいいですわよ？」

「…百」

「はい！」

「…順番来てる」

「あつ…すみません！」

それぞれの食べるものを持ち空いている席を探していると後ろから声が聞こえる

「あれ？ブロリーとヤオモモじゃん！ご飯なら一緒に食べよ！」

「あれ？八百万さん！それとブロリーくん！」

「ブロリー君！」

後ろからやってきたのは芦戸、耳郎、葉隠、蛙吹の4人、そして前からは飯田と麗日
がやってくる

「ブロリーちゃん。私の名前は蛙吹梅雨、梅雨ちゃんと呼んで」

「私！麗日お茶子！」

「俺は飯田天哉だ！よろしく頼む！」

「あ…ああ」

ブロリーはみんなから少し離れた所で座った

「ケロ…？」

「どしたんかな…」

「ブロリーさん？どうしたのですか？」

ブロリーは離れたところから話し始める

「…俺が怖くないのか…？」

「…？怖くないわよ？」

「なんでだい？ブロリー君？」

「俺…USJで暴れた…梅雨ちゃんを殴ろうとした…だから近くにいると…怖がられるかと思って…それにクラスのみんなも…」

「ケロケロ、大丈夫よ。私気にしてないわ。それにI—Aのみんなも怖がってないはずよ」

「ああ！僕もだ!!」

「私も全然気にしてへんよ！」

「本当か…?」

「本当よ。だから心配しなくていいわ」

梅雨ちゃんがにこりと笑うとブロリーはみんなに近づきご飯を食べ始める

「ブロリー! 今日スタバいかない?」

「…今日は訓練するから行かない」

「訓練してるの?」

「うん」

「ブロリーくんマツチョだもんね! 力込めたら制服破けそう!!」

「あーわかる。バーベルとかの棒曲げそう」

「1回曲げて壊した」

「…体験済み!?!」

ブロリーは初めての同級生との食事をし、いつもの何倍もご飯が美味しく感じていた

体育祭編

始まる体育祭

放課後、ブロリーが体育館へ行こうと扉を開けると他のクラスの人達がいた

「…なんだ？」

「ブロリー君どうし…うおお…！何事だあ!？」

「出れねえじゃん！何しにきたんだよ！」

「敵情視察に決まってんだろ雑魚」

峰田に爆豪の鋭い言葉が突き刺さった

「敵の襲撃を耐え抜いた連中を体育祭の前に見ときてえんだろ。意味ねえからどけモブども」

「知らない人のことモブっていうのやめなよ!!」

飯田が独特な動きで爆豪を注意をする

すると紫色の髪の男、心操が爆豪の前に現れる

「どんなもんかと見に来たが随分と偉そうだなあ、ヒーロー科に在籍する奴らはみんなそんなのかい？」

「ああ?」

後ろでブンブンと首を振るクラスメイトたち

「こういうのを見ると幻滅するなあ、普通科とか他の科ってヒーロー科から落ちた奴が多いの知ってた?」

「??」

「体育祭のリザルトによつてはさ、ヒーロー科編入も考えてくれるんだって。その逆も然り：らしいよ。敵情視察? 少なくとも普通科は調子乗つてると足元ゴツソリ抄っちゃうぞつて言う宣戦布告しにきたつもり」

心操が言い終わるが爆豪は何も言わない

すると後ろから牙が鋭い白髪の男、鉄哲が後ろから顔を出し話し始める

「隣のB組のもんだけどよう!! 敵と戦つたつつかうから話聞こうと思つたんだがよう!! エラク調子づいちゃつてんなおい!! 本番恥ずかしいことなつぞ!!」

しかし爆豪は無言で人を押し退け出て行く

「ま、待てこら! どうしてくれんだよ!! オメーのせいでヘイト集まりまくつてんじゃねえか!!」

「関係ねえよ...! 上にあがりや誰も何も言わなくなる!!」

爆豪はそう言い残し教室を去っていった

「…すまん。俺も行きたいところがある。どいてくれ」

ブロリーは入り口の前にいる人たちに頭を下げてどいてもらい体育館へと向かった

ブロリーはいつも体育館でエネルギー弾の特訓をしている

「……………ふんっ!!!」

ブロリーは手からエネルギー弾を放ち壁の後ろにあるターゲットを狙う

エネルギー弾は壁を貫きターゲットに当たる

「……………手加減…難しいな…」

ブロリーが自分の手を見て「はあ…」とため息をつく

「ブロリーさん。いらっしやいますか？」

「…？百…何しにきた？」

「もし…もしよろしければ、私も一緒に特訓してもいいでしょうか…？」

「え…いや…俺と一緒にだと…怪我させてしまうかもしれない…」

「私…戦いのセンスが他の人と比べて低いです。だから…お願いします!!」

「……………わかった…なら百、個性を詳しく教えてくれ」

「私の個性は創造、生物以外のありとあらゆる物を自分の脂質で創り出し、肌から出現させることが出来ますわ。ですが作る時には分子構造まで思考に入れておかないといけ

「ませんわ」

「なら、たくさん組手しよう。あと…精神力をつける」

「精神力？」

「うん。分子構造まで思考に入れておかないといけないなら動揺したりしちやまずい。それに咄嗟の判断力、状況把握能力がいる」

「なるほど…では何を作ったほうがよろしいでしょう？」

そこでブロリーはハツと思いつき壊れたターゲットを指差す

「あれ、ただの四角い板。それに大きさもちょうどいい」

ターゲットの大きさは縦10cm、横5cmととても小さい

「一石二鳥ですわね！」

「ああ」

「早速作っていきますわ！」

八百万はそういうと壁の後ろに行き体操服に着替えて出てくる

「お待たせしました！」

「……………」

ブロリーは無言で八百万の上着のジッパーを上げて腕まくりをさせる

「あのサイズならこのくらいいい。よし、はじめよう」

「はい！」

こうしてブロリーと八百万の特訓が始まった

「百、判断が遅い。常に相手を見て先を予測しなきゃ負けるぞ」

「ツツ！わかりましたわ!!」

ブロリーが八百万をめがけて拳を放つ

八百万はしゃがんで回避しブロリーの足に鉄の棒を引つ掛け転ばせようとする

しかし地面につく瞬間ブロリーは空を飛ぶ

「ハア…ハア…」

「…体力もつけないきやな」

「ええ…やっぱり私は…」

八百万が下を向きマイナス発言をしようとする
とブロリーが八百万の顔を優しく掴んで上を向かせる

「マイナス発言はしたらダメ。失敗してもいい。素直に受け入れるのが大事」

「は、はい!!頑張ります!!」

2人は体育祭が始まるまでの間、ずっと特訓し続け八百万は大きなものでも早めに(4分くらい)作れるようになったり判断力も付いてきた

そして前日

「ハアツ!!」

「くっ…!!すごいな百…!」

「ブロリーさんの教え方が良いんですわ…」

ブロリーは八百万を立ち上げらせ背中についた土を払った

「…:…:ブロリーさん、毛皮が汚れてますわ」

「本当だ…洗わなきゃ…」

ブロリーはそう言うと毛皮を撫で始めた

「大切なものなのですね」

「これはガウの毛皮だから…」

「ガウ…?」

「ああ、俺の家族のクマだ」

「クマ…?」

「ガウは痩せ細ってて…弱かった。だから俺がご飯をあげてたんだ。そうしたら…俺よりも大きくなっちゃった」

「ブロリーさんよりも…大きいクマさん…」

「でも…人に殺された…」

「…!!すみません…嫌なことを思い出させて…」

「百ならいい」

ブロリーはそう言うのと体育館の扉を開け始める

「百、明日の体育祭頑張ろう」

「…ええ!!勿論ですわ!」

2人は握手をし、八百万は帰路に着いた

ブロリーはこの時少し胸がもやもやとしていたが気にせずに自分の部屋へ戻った

そして翌日

ついに体育祭が始まる!!

「群がれマスメディア!!今年もおまえら大好きな大好きな…雄英体育祭が始まディエビ
バディアアユウレディ!!?」

マイクがいつもよりテンション高めで叫んでいる

そしてドームの中はすでに人でいっぱいになっており、外では警備をしているヒーロー含め屋台でたこ焼きや焼きそば、焼きトウモロコシを買っている人たちがいた

その頃の1ーA控え室では

「みんな準備はできてるか!!そろそろ入場だ!!」

「コスチューム着たかったなー」

「ブローリー、上着着ねえの?」

「動きにくいからいらない」

入場まであと少し

手に人をたくさん書いて飲み込む人もいれば雑談をして気を紛らわそうとしているものもある

そんな中、轟が深呼吸をする緑谷に話しかける

「おい、緑谷…客観的に見ても…俺はお前より強いと思う。お前、オールマイトに目えかけられてるよな。別にそこを詮索するつもりねえけど…俺はお前に勝つぞ」

クラス1位の突然の宣戦布告

「おお…!!?轟が宣戦布告!!」

「急に喧嘩腰でどうしたんだよ!?!やめろって…」

「仲良しごっこじゃねえんだ。何だっついていいだろ」

切島を払いのけ轟は緑谷の方を向き続ける

「轟君がなにを思っつて僕に勝つて言っつてんのか…わからないけどさ…そりや君の方が上だよ…実力なんてこのクラスの…他のクラスの大半の人にも敵わないと思う…客観的に見ても…」

緑谷が下を向き拳を握りしめネガティブなことを言いはじめめる

「緑谷もさ、そんなネガティブな事言わねえ方が…」

「でも…!!他の科の人も本気でトップを狙ってるんだ。僕だっつて遅れを取るわけにはいかない!!僕も…本気で獲りに行くよ!!」

「…そうか」

「皆!廊下に出て並ぶんだ!!入場するぞ!!」

飯田の合図にブローリーが立ち上がり廊下に出ようとすると爆豪がブローリーの前に現れる

「おい、毛皮野郎。USJん時の力出せや」

「…ごめん、それはできない」

「ああ…?」

「ちよつと爆豪さん、早く行きますよ!」

「うっせ黙れポニーテール。テメエ…どういう事だ？」

「あの力は…使えない。したくてもできない」

「…：なら俺が引きずり出してやる!! テメエ踏み潰して俺が1位になってやる!!」

爆豪は怒号を上げ、扉を蹴飛ばし廊下へ行った

「ブロリーさん。お気になさらず…」

「いや…俺が悪いんだ」

ブロリーは悲しい顔をして廊下に出て行った

『雄英体育祭！ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!!』

プレゼントマイクの声がドーム中に広がり観客達はその声に反応する

『お前たち!! こいつら見に来たんだろ!?! 敵の襲撃を受けたにも拘らず鋼の精神で乗り越

えた奇跡の新星!! ヒーロー科! 1年!! A組だろお!!!』

1-Aが入場した瞬間、ドームは歓声に包まれた!!!』

『雄英体育祭! ここに開幕!!』

走れ！障害物競走！！

「うおおおおおおおおお！！」

「がんばれよー！！！」

「うわあ……すんごいっばい……」

会場にいる観客全員からの声援。敵に襲われたこともあり1―Aに視線が集まっていた

他のクラスも出揃い、宣誓台に女性が上がり話し始める

「選手宣誓！！」

18禁ヒーロー、ミッドナイトだ

「ほおー今年の1年主審はミッドナイトか！」

「あれ？校長は？」

「校長は例年3年ステージだよ」

「相変わらずすげえ格好だなあ！」

他のヒーロー達もその姿に目を奪われている

もちろん、高校生たちもだ

「18禁ヒーローなのに高校にいていいのか?」

「いいだろ!いいに決まってんじゃない!!」

常闇の言葉にヨダレを垂らしている峰田が反応する

「そこ!!静かにしなさい!!選手代表!!1-A爆豪勝己!!」

ミッドナイトがそう言った瞬間、ブロリーと轟を除く1-Aの皆がえつ…と呟いてしまふ

「ええ〜かつちゃんなの!?!」

「あいつ一応入試一位通過だったしなあ」

爆豪が宣誓台上りマイクを自分の口の高さ似合わせてスイッチを入れる

「せんせい宣誓」

皆、息を飲み爆豪の次の言葉を待つ

「俺が1位になる」

「絶対やると思った!!」

すると爆豪に向けて他の科の人がブーイングが巻き起こる

「調子乗んなよ!!!A組コラ!!!」

「ヘドロヤロー!!!」

「なんで品位を貶めるようなことをするんだ!爆豪くん!!」

「ケツ…せめてハネのいい踏み台になってくれ」

爆豪の一言でブーイングは更にヒートアップ

「どんだけ自信過剰なんだよ!!この俺がぶっ潰したるわ!!」

ほとんどの人は爆豪が自信過剰に見えているだろう

しかし緑谷は違う

(…前までのかつちゃんならああ言ったことは笑って言うはずだ…かつちゃんは…自分を追い込んで…)

「さて！選手宣誓も終わったことだし!!早速第1種目に行きましょうー」

「雄英ってなんでも早速やね…」

「1種目はいわゆる予選！毎年ここで多くのものが涙を飲むわ！ティアドロリンクさあて！運命の第1種

目！今年は…」

ドウルルルルルルという音が鳴り響き画面がくるくると回る

「じゃん！障害物競走!!」

「障害物競走?」

「計1ークラスでの総当りレース！コースはこのスタジアムの外周約4キロ!!我が校は自由が売り文句！うふふふ…コースさえ守れば何をしたらって構わない!」

ミッドナイトの言葉にブローリーは反応し昨日相澤に言われたことを思い出した

「いいか? ブロリー、明日の体育祭の予選はなるべく手の内を見せるな」
「なんでだ?」

「後々対策をされたりするからだ」

「分かった。なら俺は…」

(俺は…個性をなるべく使わない!!!)

「位置に着いたわね!? じゃあ第1種目、スター……スタート!!!」

ミッドナイトの合図と共に全員が全力でスタートゲートに走り出す

しかしブロリーは違った

「ブロリー!? どこ行ってんの!?!」

「ブロリーさん!?!」

「お、おいあれ見ろ!! あいつ観客の席登ってるぞ!?!」

ブロリーはスタートゲート横の観客席に登りその後ろのドーム横の壁をぶち抜いて外に出る

『おーつと!!ブロリーがスタートゲートを無視して壁壊したアアア!!』

この時点でブロリーは1ーAに向いていたプロヒーロー達の視線を全てかつさらった

ブロリーは着地し止まることなく走り始める

「チツ…!!待て!」

「待たない」

ブロリーが轟を引き離し先頭を走っていると大きな影が突然現れる

「ロボットか」

ブロリーの前に現れたのは超巨大なロボット数十体とその周りを囲む小さなロボットたち

『ブロリーが第一関門ロボ・インフェルノに着いたぜ!この関門をどう乗り越える!?!』

巨大なロボットはブロリーに向かって拳を振り下ろす

「こんなパンチ避けるまでもない」

ブロリーはロボの拳を受け止め思いっきり引く

そして倒れてきたロボットの胴体にエネルギーを纏った拳を叩き込みロボの胴体を貫通して先に進む

『1ーA、ブロリー!!ロボの腹を貫き止まることなく先に進んだアアア!』

《標的補足!ブツ》

素早く動く小さなロボットも次々と壊しては後ろに投げ妨害をしていく

「うわっ!?!んだコレ!?!」

「一旦協力だ!!このでかいロボット退かすぞ!!」

そのあともプロリーはひたすらロボを倒し進路を妨害しつつ先に進んでいく

そしてプロリーは第2関門に突入した

「綱渡り……!」

『ここでもプロリーの動きが止まる!流石のプロリーもここはきついかな!』

マイクが解説を入れて話しているとプロリーは縄を通らずにジャンプして渡り始めた

(間隔が意外と狭い……これなら空を飛ばなくても行ける)

『おいおいマジかよ!?!ジャンプして渡りやがった!!だが後ろから負けじと爆豪、轟がやってくる!!』

「追いついたぞ!!」

「待てや毛皮野郎!!!」

後ろから追ってくる二人に向かってプロリーはさらにスピードをあげる

(はええ…!!!クソが!!)

(それにアイツ…全く息切らしてねえ!!)

本来ならば爆豪や轟のように汗を滝のように流し息切らしているはず

なのにブロリーは少し汗を垂らしているだけでまったく息が上がっていない

そしてブロリーが第2関門”ザ・フォール”を超える

『先頭集団は難なく一抜け！後ろは団子状態!!上位何名通過するかは公表しねえから安心せずに突き進めー!!!』

くプロヒーロー席く

「1位の彼…どんな個性なんだ？」

「見た感じ単純なパワー増強型だろうな」

「俺はてつきりエンデヴァーさんの息子が1位を獲るのかと思ってたよ」

「早くもサイドキック^相争奪戦だなー！」

ブロリーの過去を知らないプロヒーロー達からすればブロリーは個性がすごいと思っていない

だがブロリーの過去を知っているプロヒーロー達は彼の素の身体能力に驚く

「ブロリー君、全く疲れてませんね」

「彼の底知れぬ体力、彼が昔にどれほど過酷な生活をしていたかが分かるよ」

『さあついに最終関門!!かくしてその実態は…一面地雷原!怒りのアフガン!!威力は大したことないが音と見た目がド派手な地雷が沢山埋まつてるぜ!埋まつてる場所はよく見りやわかるから目と足を酷使して進めー!!』

他の人はよろよろと地雷をそつと避けて進んでいく

『ここでもブロリー恐ろしい速さで進んでいく!!おいおいこいつを誰か止めてくれえ!!』

ブロリーは地雷の埋まっている場所を一瞬で見分け素早く進んでいく

しかしそれはブロリーだけではない

「追いついたぞ毛皮野郎!!てめえのあの力…引きずり出したらアアアア!!」

爆豪は爆破で空を飛びブロリーに追いつき思いつき背中を爆発させる

「ぐっ!!!」

ブロリーは背中を爆発させられた衝撃で地雷のある場所に手を付き思いつき爆発する

『ここで爆豪がブロリーを止めたアアア!』

ここで轟もブロリーを氷結させ動きを止める

「くっ…!!」

「後続に道を作っちゃまうがそんなこと気にしてられねえからな」

轟と爆豪がブローリーの動きを止める

(早く氷を壊さないと…!!)

ブローリーは手の氷を頭突きで砕き再び走り始める

しかしそれと同時に後ろで大爆発が起こった

「なっ…!!」

ブローリーの上を鉄の板に乗った男が通り過ぎていく

その正体は…緑谷だった

『うおおお!!ここで緑谷、爆発で猛追!!つうか抜いたアアア!!』

(あいつは…たしかミドリヤ…イズク…)

「手の内を隠している場合じゃない」

ブローリーはふふつと微笑むと目を瞑る

「ブローリー!何してんの!?!」

『ここで緑谷間髪入れずに後続妨害!!レーザーお前のクラスすげえな!どんな教育してんだ!?!』

『俺は何もしてないよ。奴らが勝手に火イ付けあってるんだよ。ほらあれ見てみる、マ

イク』

『ん?あれって…何してんだブロリー!?目瞑ってんぞ!?』

プレゼントマイクが声を出し数秒後

ブロリーの声があたりに響く

「うおおおおおおお!!!」

ブロリーの雄叫びに周りにいたほとんどの人が怯む

怯むことなく進み続けていたのはI—A

(ブロリーさんの雄叫び…あの時程ではありませんわ!!)

USJでの雄叫びに比べればまだ余裕はあった

ブロリーは雄叫びを終えると地面から10cm位の高さでホバー移動をするように
進んでいく

そして前にいる爆豪と轟の横に入りそれぞれ顔の前に手を開く

「これを…やる!!」

ブロリーの手にあったのは緑色の球体

その球体を持ったまま2人の顔を掴み爆破させる

「ガハッ…!!」

「ゴホッ…!!」

「さっきの…仕返しだ」

2人が倒れるのと同時にプロローは地面を滑るように前を進んでいく

『ここでプロロー本領を發揮したか!? スロースターターすぎんだろ!!』

プロローが最初のスタートゲートの中に入っていく緑谷を見つける

「緑谷に…追いついた」

「ブ、プロローくん!？」

(まずい!!このままじゃ抜かれる!!)

ゴールまで残り数メートル

プロローが一気に緑谷を抜こうとすると緑谷がプロローの胸元にとある物をくつつける

それは地面に埋まっていたはずの地雷

爆豪と轟を追い抜きコケた時にむき出しになっていた地雷を緑谷は持ってきていたのだ

「持ってきておいてよかったよ…!!」

派手な爆発と音が鳴り響きプロローの姿が煙で見えなくなつた

緑谷はこの隙にゴールに向けて走り始める

「その程度の爆発じゃ…止まらない!!」

ブロリーは緑谷に向けての弱めのエネルギー弾を放ち緑谷の動きを止める
「1位になるのは…俺だ」

『最後の最後で再び1位に返り咲く!!緑谷が1位かと思つてたよ!今1番にスタジアムに還つてきたのは…ブロリィィィィ!!!』

ブロリーがゲートから出てくるとドームは歓声に包まれた

後ろから緑谷がハアハアと息を切らして出てきたのを見るとブロリーは緑谷の元へいき話しかける

「緑谷…」

「えっ!?!どどどうしたの!?!ブロリーくん…」

「最後、エネルギー弾当ててしまった…痛かったか?」

「い、いや!大丈夫だよ!」

「なら…良かった」

ブロリーのほっとした表情を見て緑谷は確信した

(ブロリー君…本当は優しい人なんだ…)

「ブロリー君、次は負けないよ」

「……ああ」

第1種目終了

結果

1位 ブロリー

2位 緑谷

3位 轟

4位 爆豪

5位 塩崎

6位 八百万

7位 骨抜

8位 飯田

9位 常闇

10位 切島

を含む上位43名

「予選通過は上位42名！そして次から本番よ！！取材陣も白熱してくるよ！気張りなさい！！さぁ続いて第2種目の競技とその説明をするわ！」

再びモニターがぐるぐると回り始め勢いよく止まる

そしてそこに書いてあったものは”騎馬戦”

「次の競技は騎馬戦!ルールは簡単!2〜4人でチームを組んで相手のハチマキを奪うだけのチーム戦よ!」

「入試みたいなポイント稼ぎ形式か!」

「本当に簡単なルールだな」

普通の高校ならこの後ポイントの割り振りを発表しチームを決め始める

だがここは天下の雄英

普通のこととはしない

「順位によって割り振られるポイントを発表するわよ!まず1位に割り振られるポイントは1000万ポイント!」

「…いっぱいだ」

「この騎馬戦は上位のやつほど狙われちゃう!下克上サバイバルよ!」

ミッドナイトが1000万ポイントと言った瞬間、みんながブローリの方を見始める

「…?」

今から始まる騎馬戦

それは実質1000万の奪い合い

始まる！騎馬戦！！

「上に行く者にはさらなる受難を…英雄に在籍する以上何度も聞かされるよ。これで
Plus ultra! 予選通過のブロリー君！持ちポイント1000万!!!」

周りの視線が一気にブロリーに集まる

しかしブロリーは全く気にしていなく空を見ている

(いい天気…) ↑The・ノウテンキ!!

「あ、ミッドナイト。質問がある」

「?なに?ブロリー君」

「騎馬戦ってなんだ?」

「「「ええええええええええ!!」」」

その場にいたほとんどの人が驚く

「ブロリーさん！騎馬戦というのはですね…」

「ー八百万がブロリーに説明中ー」

「なるほど、人を馬にするのか」

「言い方があれですけどそうですね」

「八百万さん。ご説明ありがとうございます!じゃあルールの説明もするわよ!!」

騎馬戦のルール!!

制限時間は15分!!

振り当てられたポイントの合計が騎馬のポイントになる!

騎手はそのポイント数が表示された”ハチマキ”を装着する!!

取りやすさを追求しマジックテープ式だ!

取ったハチマキは首から上に巻くこと!

取ればとるほど管理が難しくなる!

「そして重要なのはハチマキを取られてもまた騎馬が崩れてもアウトにならないってところよー!」

「てことは…42名からなる10〜12組の騎馬がずっとフィールドにいることになり

ますわね」

「一旦ポイントとられて身軽になるのもありだね！」

「それは全体のポイントの分かれ方を見ないと判断しかねるわよ、三奈ちゃん」

皆が話し合っているとミッドナイトがムチを振り静かにさせる

”個性” ありの残虐ファイト！でもあくまで騎馬戦！悪質な崩し目的での攻撃等はレッドカード！一発退場とします！それじゃあれより15分間！チーム決めの交渉タイムよ！」

ブロリーはすぐ前にいた八百万に声をかける

「百、一緒に組もう」

「ブロリーさん！私も今行こうとしていたところですよ！」

「他は…どうする？」

「正直なところ、防御は私、攻撃はブロリーさんでなんとかできますわ」

「なら…仲のいいやつにしたい。切島達は？」

「もう既にほかのチームに行っているようです」

「どうする…そうだ」

ブロリーは八百万の腕をつかみある人物を探し始める

「いた。緑谷出久、俺と組もう」

「ブ、ブロリーくん!?僕なんかでいいの!」

「お前は作戦を考えるのが上手いから」

「ブロリー君……!」

「これで後1人ですわね」

3人が残り1人を考えていると麗日がやってくる

「あのお…私も入れてもらっていいかな?」

「麗日さん!」

「麗日さんの個性なら素早く動くことが出来ますわね!!」

「麗日お茶子、いいのか?俺は1000万だから狙われるぞ?」

「良いよ!ブロリーくん強いし八百万さんにデクくんもおるし!」

ニコツと笑った麗日にブロリーも微笑み感謝する

「ありがとう。麗日お茶子」

「お茶子でええよ?」

「お茶子?」

「うん!」

ブロリーがそんなやり取りをしていると八百万が服を引っ張る

「ブロリーさん?そろそろ騎馬を組みましよう」

「そうだな…俺…持てるか？」

「私の個性でブロリーくんを浮かそう！」

「そうだなあ…麗日さんの個性で麗日さん以外浮かせるとして…八百萬さん！上鳴君対策の絶縁体シート作って！ブロリーくんはみんなを近寄らせないようにして！」

「分かった」

「分かりましたわ！」

「あつ！そうだ。ブロリー君、君の個性は？」

「俺の個性は…破壊者。空を飛んだりエネルギー弾を撃てる」

「うわあああ！すごい個性だね！！あとでもっと詳しく…」

「ブロリーさん！緑谷さん！！早く騎馬を作ってください！」

「ああ！ごめん！！」

「15分経ったわ。それじゃあいよいよ始めるわよ！！」

ミッドナイトが準備運動をし始め皆が騎馬を組み始める

「おかしいよな。ここにいるほとんどがA組にばかり注目している…なんでだ？」

「そして鉄哲が言った通りA組連中も調子づいてる」

「彼かと僕らの違いは、会敵、しただけだぜ？」

「ヒーロー科B組が予選で中下位に甘んじたか。調子づいたA組に知らしめてやろう」

『さあ起きろイレイザー！15分のチーム決め兼作戦タイムを経てフィールドに12組の騎馬が並び立ったぞ!!』

『……なかなか面白え組が出揃ったじゃねえか』

『さあ上げてけ鬨の声!!血で血を洗う遊泳の合戦が今!!狼煙を上げる!!』

「お茶子」

「っはい！」

「百」

「はい!!」

「緑谷出久」

「はい!!」

「よろしく頼む！」

ブロリー達のチームは組み終えスタンバイする

『おっしや組み終わったな?!準備はいいかなんて聞かねえぞ！行くぜ行くぜ！残虐バトルロワイヤルカウントダウン！』

『3』

「狙いは…!!」

爆豪チーム

・爆豪 195 P

・切島 160 P

・芦戸 110 P

・瀬呂 155 P

Total 620 P

『2』

「1つ」

轟チーム

・轟 200 P

・飯田 185 P

・常闇 170 P

・発目 10 P

Total 565 P

『1』

ブロリーチーム

・麗日 125P

・緑谷 205P

・八百万 195P

・ブロリー 10,000,000P

『START!!!』

Total 10,000,525P!!!

合図と共に全騎馬がブロリーチームの前に現れる

「実質その奪い合いだ!!A組イイイ!」

「ハツハツハ!!ブロリー君!いったくよー!!」

「ブロリー君!!前の2組の足元にエネルギー弾を!!」

「分かった」

ブロリーはエネルギー弾を作ると迫ってくる2組の前にエネルギー弾を放つ

しかしそのエネルギー弾はノロノロと進んでいく

「んだコレ！こんなのに当たるわけ」

「ふん!!」

ブロリーが手を下に下ろすとエネルギー弾も一緒に下に落ち爆発する

「うお!？」

「ケホツケホツ！何も見えない!!」

あたりに土埃が舞いどこに誰がいるか全くわからなくなった

「くそっ!!どこだ!!10000万!!」

「ここだ」

突然後ろから現れたブロリーに鉄哲は驚き慌てて指示を出す

「塩崎!!捕まえ」

「遅い」

ブロリーはエネルギー弾を鉄哲の前で爆発させ鉄哲からハチマキを奪い土煙の中から逃げ出す

『早速鉄哲チームのハチマキをブロリーチームが奪ったアアアアア!!ここでもブロリーチームが圧倒するか!?!』

「緑谷出久、次は反対側の端に行ってくれ」

ブロリーは奪ったハチマキを頭に巻き会場の端に逃げ、後ろから敵が来ないようにす

る

「おらアア!何逃げてんだ毛皮野郎!!!」

『おっと!?!ここで爆豪単体でブロリーに迫る!!』

「ブロリーさん!!」

「ハアア!」

ブロリーは手からオーラを放ち爆豪を空中で止める

「んだコレっ…!!動けねえ…!!」

ブロリーは爆豪を空に投げ飛ばし構え直した

空に投げ出された爆豪は爆速ターボを使い自分の騎馬に戻る

「チツ!!おいお前ら!!早く毛皮野郎んとこ行」

爆豪が切島の頭を叩こうとした瞬間、自分の頭に巻いていたはずのハチマキが奪われる

「なっ!?!」

『やはり狙われまくる一位と猛追をしかけるA組の面々共に実力者揃い!!さてさて!7分経過した現在のランクは…あら?』

「あれ?…なんか…A組ブロリー以外パツとしてくない?」

「爆豪チームもいつの間にかOPだぜ!」

観客達がモニターを見るとブロリーと轟以外のA組チームは全員OPになっており、B組の面々が上位を占めている

「単純なんだよ。A組」

「ああ!?! てめえ早く俺のハチマキ返せやコラ!!」

「はあ…やっぱり馬鹿だね。ミッドナイトが第1種目って言った時点で予選段階から極端に数を減らすとは考えにくいと思わない?」

「!?!」

「だから僕らは大凡の目安を仮定しその順位以下にならないように予選を走ってさ。ライバルになるもの達の”個性”や性格を観察してたわけ」

「組クラスぐるみってわけか!!」

「全員の総意じゃないけどいい案だろ? 人参ぶら下げた馬みたいに仮初の頂点を狙うよりさ」

その言葉に爆豪が反応する

「あ、あとついでに君有名人だよな? 『ヘドロ事件』の被害者!! 今度参考に聞かせてよ年に1度的に襲われる気持ちってのをさ!」

物間の一言により爆豪の怒りゲージが頂点を通りこし噴火する

「切島あ…予定変更だ…ブロリーとデクの前にこいつら全員殺そう…!!!」

爆豪から黒い煙のようなオーラが放たれ、流れを聞いていた緑谷がブロリーに話しかける

「ブロリーくん!!みんな!!逃げ切りがやりやすく」

「緑谷さん。そう簡単には行かなそうですわ」

緑谷が前を見るとそこには轟チームがいた

「ブロリー…1000万貫うぞ」

「取らせない…!!」

ブロリーと轟が睨み合い両チーム動きが止まる

「ブロリーさん!残り7分!逃げることに専念を…」

「させねえぞ!!無差別放電!!130ま」

「百、緑谷、お茶子!!あれの装着!!」

ブロリーの合図を聞いた3人は耳に防音ヘッドホンをはめた

「すう…:があああああああああああ!!」

ブロリーは障害物競走の時より大きな声で叫ぶ

「くっ…!!?」

USJの時には程遠いがそれでも耳を抑えないと辛い位の雄叫びが響く

「よし、早くここから逃げ」

「させねえ。発目！」

「はい!!どうぞ!!」

発目は轟に短い棒を渡す

すると轟が棒についているスイッチを押し、それを伝って地面が氷結する

「飯田、前進。常闇、後ろで止まってるヤツらのハチマキ取れ」

「分かった!」

「御意」

常闇は影から鳥の形状をしたモンスターを出し凍って動けなくなっているヤツらからハチマキを奪う

「あつ!ハチマキ!!」

「ちくしょう!!!」

「残り5分弱、早めに決めさせてもらおう」

轟チームの騎馬になっている後ろの2人の足にはローラーのようなものがくっついており

前騎馬の飯田の機動力を殺さないように工夫されている

「ブロリーくん!USJでやったみたいに地面にエネルギー弾を!!」

「分かった」

ブロリーはエネルギー弾を地面に投げ込み地面を割る

「常闇!!黒ダークシャドウ影を!!」

「行け!!黒ダークシャドウ影!!!」

【アイヨ!!!】

ブロリーの頭めがけて飛んでくる黒影を八百万の鉄の板で防ぐ

「そう簡単には…取らせません!!」

「ちっ…!」

正直、轟は焦っていた

このままじゃ1000万を取れないまま終わる

だから周りを氷の壁で覆い、ほかのチームが入れないようにした

だがそれは愚策だった

この狭い中じや飯田の機動力が生かせない

常闇の黒ダークシャドウ影はブロリーの光で弱り及び腰

轟自身は常に左側に逃げられ氷結させることが出来ない

発目のサポートアイテムだけでは1000万は取れる可能性は低い

「くそっ!!」

『残り時間は1分弱!!今だ氷の壁の中ではブロリーと轟の攻防戦が繰り広げられてるぞ!!』

「……轟くん!残りの時間、僕は使えなくなる。だから取ったらすぐにこの氷壁の上を通って逃げるぞ」

「飯田?」

「しつかり掴まっていろよ!そして奪れよ!!轟くん!!トルクオーバー!!レシプロバースト!!」

ブロリーが異変を感じ素早く頭を隠そうとするもハチマキを2本とも取られてしまった

そして轟達は発目のサポートアイテムを使って氷の壁を越えて行った

「しまった…!!」

『ここでもさかまさかの大逆転!!ブロリーチーム急転直下のOP!!轟チームが1000万を持って逃げた!!』

「逃がさない!!!」

ブロリーは前の氷壁をエネルギー弾で破壊し轟を追いかける

「返せ!!」

「黒影!!俺たちを守れ!」

【アイヨ!!!】

黒影ダークシャドウが前に出てブロリーのエネルギー弾を受け止める

【キャン!!!】

『そろそろ時間だ!カウントダウン初めっぞ!!エビバディセイヘイ!!』
『3!!!』

カウントダウンがされた瞬間、ブロリーは騎馬を置いて空を飛ぶ

「うおおおおお!」

「なっ!?」

『2!!!』

「行け!!ブロリーくん!!」

轟は咄嗟に炎を出すブロリーに首につけていたハチマキを2本奪われる

『1!!!Time up!!!』

「……………」

ブロリーは2本のハチマキを眺めながら騎馬の元に戻った

『おしゃ!じゃあ上位4チームの4位から順に発表していくぜ!!』

「ブロリーくん…どうやったん?」

「…」

「ブロリーは無言で地面に膝をつき下を向く」

『4位 拳藤…あれ!?心操チーム!?いつの間にな!?』

「大丈夫ですわ…また来年頑張りますよ…う?」

『3位 轟チーム!!』

「えっ!?!」

「どういうこと!?!」

「2人が急いでブロリーと八百万の元に行く」

「ブロリーさん…?これ…」

『2位 爆豪チーム!!』

「そこに書いてあったポイントは」

「70Pと10,000,525P」

「10000万…取れた…」

「ニコツと笑うブロリーに八百万も釣られて笑い、麗日は笑顔で飛び跳ね、緑谷は涙を流した」

『1位 ブロリーチーム!!』以上4チームが最終種目へ出場決定だああー!』
「プレゼントマイクの声とともに観客たちの歓声がドームに響いた」

『よおし!1時間ほど休憩挟んでから午後の部だぜ!!それまでゆっくり休みな!!じゃあ

な!!
』

第2種目 騎馬戦 終了
最終種目 出場人数 16名

最終種目！トーナメント戦

「ブロリー!! 負けたぜ!! お前やっぱ強いな!!」

切島がブロリーに近ずき話しかける

「ブロリーくん!! 悔しいが俺の負けだよ!!」

「飯田天哉…お前の最後のスピードは…なんだ？」

「あれはただの誤った使用方法だ!!」

「あれ…? デクくんは? どこ?」

「ん? 緑谷ならさつき轟に呼ばれてたぜ?」

「…喧嘩か…?」

ブロリーが少し心配そうな顔をしてみんなに話しかける

「ん…そんな雰囲気じゃなかったから大丈夫だと思っよう?」

「それよりブロリー、早くご飯食べに行こうよー!」

「ああ、今日は沢山食べなきゃ…」

芦戸と葉隠に引っ張られブロリーは食堂に向かった

そう言つて八百万達は更衣室へ向かった

「プロリー、会場行こうぜ」

「待つて…エビ食べたい」

「結局まだ食うのかよ!!」

昼休みが終了し予選通過できなかつた人含めた全員が集まる

『最終種目発表の前に予選落ちの皆へ朗報だ！これはあくまで体育祭！ちゃんと全員参加のレクリエーション種目も用意してんのさ！本場アメリカからチアリーダーも呼んで一層盛り上げ……ん？アリヤ？』

プレゼントマイクがサングラスを上げてグラウンドを見る

『なーにやつてんだ、あいつら』

相澤とプレゼントマイクの目線の先にはチアリーダーの格好をした1ーA女子ーズ
「それがちありーだーの格好か？」

「え、ええ…ですが他のクラス的女子達は着替えていませんわね…まさか…!!」

八百万が上鳴と峰田の方を見るとにやにやしていた

「上鳴さん!!峰田さん！騙しましたわねー!!?」

2人がいえーいとハイタッチをし笑っていると突然前にプロリーが現れる

「えっ…ブ、ブロリー?」

ブロリーは普段のおっとりとした顔で2人を持ち上げ八百万達の前に降ろす
「上鳴、もぎもぎ、騙したら…謝らないとダメだ。ごめんって」

「いや…あの…ごめん…」

ブロリーの目を見た2人は突如罪悪感に襲われ女子達に謝った

「はあ…いいよ!許したげる!ちよつとやって見たかったしね!」

「うん!もう着ちやつたんだしレクリエーションの時だけでも着てよーよ!」

葉隠と芦戸がキヤツキヤツとはしやぎ残りのメンバーも仕方なく着たままになった
だが八百万だけは少し落ち込んでいた

「はあ…どうしてこうも2人の策略にハマってしまうのでしょうか…」

「百、気にすることない…可愛いから」

「そうですか…ええ?」

「え?」

八百万はフリーズし周りの女子がにやにやし始める

ブロリーは頭にハテナを浮かべていたが直ぐにモニターの前へ向かった

「ヤオモモー!!可愛いって!!」

「か、からかわないでくださいまし!!ほら!早く行きましょう!」

『気を取り直して…さあさあみんな楽しく競えよレクリエーション!!それが終われば最終種目!!進出4チーム総勢16名からなるトーナメント形式!!一対一のガチバトル!』

「おお…トーナメントかあ!」

「毎年テレビで見てた舞台に立つんだなあ!!」

「あれ?去年トーナメントだっけ」

「形式違ったりするけど例年サシで競ってるぜ?去年はスポーツチャンバラだったと思うぞで」

「組み合わせはどうやって決めるんすか?」

「組み合わせはくじ引きで決めるわ、組が決まったらレクリエーション挟んで開始になります!」

「レクリエーションは全員参加ですか?」

八百万が手を挙げ発言する

「レクに関しては進出者の16名は参加するもしないも個人の判断に任せるわ!息抜きしたい人も温存しときたい人もいるだろうし!それじゃ1位のチームから順に…」

ミッドナイトが進めようとする尾白が手を挙げ話を止める

「あの…すみません。俺、辞退します」

突然の辞退宣言に1-Aの面々は驚く

「尻尾…?なんで辞退するんだ?」

ブロリーが尾白の元へ行き話しかける

「そうだよ!せっかくプロに見てもらおう場なの!!」

ブロリーに続いて麗日も話しかける

「実は騎馬戦の記憶が終盤ギリギリまでほぼぼんやりとしかないんだ…多分やつ個性で…」

(尾白くんが組んでたのは…宣戦布告してきた普通科の…!!)

緑谷は真つ先に心操の方へ向く

それに気づいた心操は目線を外した

「チャンスの場なのはわかるけどさ…みんなが力を出し合い争ってきた座なんだ!!こんなわけもわからないままそこに並ぶなんて…俺は出来ないよ…」

「気にし過ぎだよ尾白くん!!本戦で成果を出せばいいんだよ!」

「そんなん言ったら私だつて全然だよ!」

芦戸と葉隠が尾白に話しかけるが尾白の意思は変わらない

「違うんだ…俺のプライドの話さ…!俺が嫌なんだ…!!あと…なんで君らチアの格好してるんだ…?」

「……僕も同様の理由から棄権したい!!じつりよくいかんいぜん実力如何以前に何もしていかないものが上がるの

はこの体育祭の趣旨しゆしと相反あいはんするのではないだろうか!!」

「こいつら…なんて男らしいんだ!!」

『なーんか妙なことになるんだが…』

『ここは主審ミッドナイトの采配がどうなるか…』

「そういう青臭い話はさあ…好み!!」

ミッドナイトは手に持っていたムチを勢いよく振った

「庄田、尾白の危険を認めます!!」

（（（好みで決めちゃったよ）））

「繰り上がりは5位にいた拳藤チームだけど…」

「拳藤! A組にB組魂見せてやれ!!」

「…鉄哲…! 分かった!!」

「と、言うわけで拳藤と取蔭が繰り上がって16名!! 組はこうなりました!!」

Aブロック

第1試合 緑谷VS心操

第2試合 轟VS瀬呂

第3試合 ブロリーVS拳藤

第4試合 八百万VS取蔭

Bブロック

第1試合 芦戸VS青山

第2試合 切島VS常闇

第3試合 飯田VS発目

第4試合 爆豪VS麗日

「2回戦は…百か…」

「お? ブロリーもう2回戦のこと考えてんの?」

「いや…俺が見ているのは1番上…」

「そっかー1番…ウェイ!」

ブロリーの爆弾発言にみんな振り返る

「俺…優勝する」

「テメエ…!!!調子こいたこと言ってるじゃねえぞ!!」

「調子こいてない」

ブロリーはそう言うのと会場から出て行った

『よーしそんなじゃあトーナメントはひとまず置いといてイッツ束の間!!楽しく遊ぶぞレ』

クリエーション!!』

とはいえ

精神を研ぎ澄ます者、緊張を解きほぐそうとする者

それぞれの思いを胸にあつという間に時は来る

『ヘイガイズー!アアユウレディ!!?色々やつてきましたが結局これだけガチンコ勝負!!頼れるのは己のみ!!ヒーローじゃなくてもそんな場面ばかりだ!!分かるよな!?心・技・体に知恵知識!!総動員して駆け上がれ!!』

くーA座席く

「1回戦…どっち勝つと思う?」

「緑谷じゃねえかなー、力差あるだろうし」

「ブロリーはどっち勝つと思う?」

「…分からない…心操は尻尾を操ってた。どんな個性かわからないから…勝敗も分からない」

「確かに…ねえ尾白!あの人の個性なに?」

「喋った相手のことを操る個性…俺は喋ったと同時に意識がボンヤリになった。緑谷にもその事を話したしきつと」

「なら…緑谷が負けるかもしれない…」

ブローリーが喋ると同時に戦いが始まる

緑谷がなにか喋りながら心操に突っ込むが直ぐに動きが止まる

『おいおいどうした大事な緒戦だ盛り上げてくれよ!!?緑谷開始早々完全停止!』

「ああ!折角忠告したつてのに!!」

「なんで…?知ってるんでしょ!?!」

「…心操は…尻尾を貶してた。緑谷はそれに怒ったんだ」

「!!!」

「ブローリーさん…聞こえるんですか!?!」

「ああ」

すると心操が緑谷に振り向いて場外まであるけと命令を下す

「緑谷負けんのか…?」

心操の洗脳にかかってしまえば最後、衝撃を与えるか心操自身が解除するまで緑谷は

止まらない

「ああ…これは緑谷の負…」

砂藤が喋るのを遮る

「違う…心操の負けだ」

「はあ……？てめえ何言ってるんだ？さっきはクソデクに勝ち目ねえって」
 「一瞬だけ……緑谷の目に色が戻った……」

ブロリーがそう言うのと突然バトルステージから風が吹く

「緑谷……！すげえ無茶を……!!」

そこからの展開はとても早いものだった

緑谷は喋らずに心操に近ずき肩を掴んで場外に押し出そうとする

心操は抵抗して緑谷を思いつきり殴るもその手を掴まれ場外に投げ飛ばされた

結果

緑谷○VS心操●

第2試合 轟VS瀬呂

開始の合図とともに瀬呂が轟をテープで縛り上げ場外へと引つ張りだそうとしたが轟が大氷壁を繰り出し瀬呂が動けなくなる

「せ、瀬呂くん……動ける？」

震えた声でミッドナイトが瀬呂に話しかける

「動けるわけないでしょ……い痛ってえええ……!!」

瀬呂も震えた声で返事する

「瀬呂くん、戦闘不能…轟くん2回戦進出…」

「ど、どんまい…」

会場のドンマイコールが静かに響いた

結果

轟○VS瀬呂●

第3試合 ブロリーVS拳藤

『続いて第3試合!!全て1位と圧倒的な強さ!!さっきの1位宣言びびったぜ!!ヒーロー科1ーA組!!ブロリー!!!』

「聞こえてたのか…」

『対する相手は!皆をまとめる頼れる委員長!!1ーB組の姉御的存在!拳藤一佳!!』

「全力で行くぞ!!」

『んじやま!始めましょーや!!第3試合START!!!』

「先手必勝!!」

拳藤は手を巨大化させブロリーを掴み場外に叩きつけようとする

『おお!?!これは早速勝負が決まったか!?!』

その頃の1―A席では隣の1―B席から覗き込んでくる物間と喋っていた

「ねえB組!!自分たちのクラス最強が瞬殺されるってどんな気持ち!!?ねえねえ!教えてくれよ!!」

「お言葉ですが…瞬殺されるのはそちらかも知れませんよ?」

「は?」

「おい、物間!!!あれ、あれ見ろ!!」

物間は泡瀬に呼ばれ自分の席へ戻る

「なんだ?拳藤が勝ったのか?当然だよね」

「違う!負けちまったんだよ!!」

「…!?!」

それはたった30秒の間に起きた

拳藤がブローリーを場外に叩きつけようとした瞬間

「もらったああああ!!……えっ!?!」

自分の腕が場外までに残り数十cmのところまで動かない

「な、なんで!!」

「お前の力量……分かった」

「プロリーがそう言い放った瞬間、拳藤の腕がどンドン場外から離れていく
「お前は勝てない……はあああ!」

「プロリーは少し力を上げて拳藤の腕を弾いて抜け出した
「くっ!!ならもう一度……」

「もう一度はない」

「プロリーは素早く拳藤の懐に入りエネルギー弾を腹に当てた

「かはっ……!!」

「拳藤は場外の壁まで吹き飛び地面に腹を抑えて倒れる

「……あっ!けっ、決着!!勝者はプロリーくん!!」

「ミッドナイトの終了の合図を聞いたプロリーは拳藤の元へ行きしやがむ

「大丈夫……?立てるか?」

「うう……だ、大丈夫……」

「保健室……連れていく」

「プロリーは拳藤をゆっくり立たせて保健室までゆっくり連れていった

「「お、男前……」」

結果

ブルリー○VS拳藤●

第4試合 八百万VS取蔭

試合開始の合図とともに取蔭が体を25個に分割し八百万に襲いかかる。

最初は惑わされていた八百万だったがすぐに

捕縛用ネットを作り空を飛ぶ取蔭のパーツをまとめて捕まえそのまま場外へと投げ飛ばし勝利した

結果

八百万○VS取蔭●

『さあ！Aブロックが終了した!!続いてBブロックして行くぜええ!』

ブルリーは八百万が勝ったのを見てホツとし微笑む

「お？ブルリーヤオモモ勝って嬉しいの？」

「ああ」

「もしかして…ヤオモモのこと好きだったり！」

「…ああ、好きだ」

「…え？」

「芦戸も…上鳴も…切島も好き。クラスメイトのみんなも…これから好きになっていく…」

「なーんだそんな感じかあ」

「プロリーはみんなが好き」

「しかし八百万だけは少し違った」

「八百万と話すとき誰よりも楽しい気分になる」

「そんなことがあるということプロリーは言わずに次の試合を見始めた」

最終種目！トーナメント戦 Part 2

Bブロック

第1試合 芦戸VS青山

最初に青山がレーザーを撃ち仕掛けるが芦戸が酸で滑りながらレーザーを回避していく

そして青山のレーザーラッシュが少し止んだ瞬間、芦戸はベルトを狙って酸を飛ばしベルトを壊し、完全に動きが止まった瞬間思いつき顎にアッパーを決め勝利した

結果

芦戸○VS青山●

Bブロック

第2試合 切島VS常闇

初めは常闇が押していたが切島がゴリ押しで常闇の間合いに入り思いつき常闇の腹を殴る

常闇は素早く黒影を使って切島を引き離すも切島は間髪入れずに常闇に突っ込んで行き常闇のみぞおちに拳を叩き込み場外まで押し出した

結果

切島○VS常闇●

Bブロック

第3試合 飯田VS発目

飯田が何故か発目同様フル装備で登場するも事情があつて装備したということでもKになつた

しかしこの後、飯田は宣伝塔の代わりにされ全ての説明が終わると発目は自ら場外へと足を出した

結果

飯田○VS発目●

Bブロック

第4試合 爆豪VS麗日

麗日が爆豪を浮かせようと開始の合図とともに突っ込んでいくも爆豪は容赦なく爆発させる

その土ぼこりに紛れ麗日が爆豪を浮かせにかかると爆豪の恐るべき反射神経により触れることが出来ない

この後も麗日は再突進するもバンバン爆破される

「麗日：うちもう見てられない…」

「爆豪まさかそっち系の…」

「なんで間髪入れずに突っ込むんだ!？」

「代わりみを通じなくてヤケになってるんじゃない…」

みんなが話している中ブロリーと八百万は静かに2人の試合を眺めている

するとプロヒーロー席からヤジが飛び始めた

「おい!!それでもヒーロー志望かよ!そんだけ実力者あるならさっさと場外放りだせ!!」

「女の子いたぶって遊んでんじゃねーよ!!」

「そーだそーだ!!」

『一部のプロヒーローからブーイングが…しかし正直俺もそう思…わあ肘つ!!』

『おい、今遊んでるつつつたのプロか?何年目だ?シラフで言ってるならもう見る意味ねえから帰って転職サイトでも見てろ』

「……相澤先生?」

「皆、上」

ブロリーが上に指をさし、みんなが上を見る

「えっ!?何あれ!!」

「麗日さんは低姿勢での突進を何度もしていましたわよね?それは爆豪さんの打点を下に集中させて武器を蓄えていたんですわ」

「突進と爆煙で視野も狭まってた…だから爆豪は上の瓦礫に気づかなかった」

「そんな捨て身の策を…!!麗日さん!!」

麗日が体を軽くし爆豪との距離を詰める

しかし爆豪は動かさず空に手を上げる

その瞬間、ステージで大爆発が起きた

『いつ…一撃!!爆豪、麗日の秘策を堂々と正面突破!!』

麗日はよろよろと立ち上がり再び爆豪に近づいて行くがすぐ手前で倒れる

「許容重量…とつくに超えてたんだ……」

緑谷がぼそつと呟く

「…麗日さん行動不能、爆豪くん2回戦進出者!」

結果

爆豪○VS麗日●

『ああ麗日…爆豪1回戦とつぱ』

『ちゃんとやれよやるなら…』

『さあ気を取り直して…小休止挟んだらすぐに次行くぞー!!』

「じゃあ僕そろそろ行くね」

「緑谷…頑張れ」

「…うん！」

ブロリーは緑谷に手を振り椅子に座り直す

「ブロリーさん、緑谷さん達が終われば私たちです」

「早かったな…でも負けないぞ」

「こちらのセリフですわ」

ブロリーと八百万が話していると爆豪が帰ってきた

2 回戦

第1試合

轟VS緑谷

轟が先に氷結で仕掛けるが緑谷は指ぶっぱで氷結を防ぐ

再び轟が氷結を繰り出してくるも緑谷はまた指ぶっぱで防ぐ

「やっぱ轟すげえな…強烈な範囲攻撃。ぽんぽん出してんな…」

「それな！爆豪も…あとブロリーも！」

「ポンポンじゃねえよなめんな」

「ん?」

「筋肉酷使すりや筋肉繊維が切れるし、走り続けりや息切れる。個性は身体機能のひとつ…半分野郎にも何らかの限度があるはずだ…」

「考えりやそりやそつか…じゃあ緑谷は轟に耐久戦挑んでんのか」

轟は氷結させ緑谷がその氷結を打ち消した瞬間、走り出し氷を使つて緑谷の上をとる。緑谷は慌てて回避するも轟が緑谷の逃げた方に先程よりも大きな氷結を繰り出し緑谷の足を捉えた

しかし緑谷も片腕を犠牲にした高威力の拳圧を放つ

「おい…緑谷やべえぞ」

「腕が…」

轟が緑谷にとどめの氷結を繰り出す

「これは勝負ありましたね」

「いや…まだだ。緑谷の目は死んでない」

「…?ですが緑谷さんは」

八百万が全て話しきる前に爆風が起きる

「!!?」

「怪我した手でまた打つた…緑谷は凄い」

この後も轟と緑谷の攻防戦は続いた
だが変わったところがある

轟の動き、氷結させる速度がどんどん鈍くなっていることと、緑谷の腕がどんどんボロボロになっていることだ

「なんでそこまで…!!」

「期待に応えたいんだよ!!笑って…答えられるような…かつこいいヒーローに!!なりたんだよ!!だから全力で!やっつてんだよ!!みんな!!」

緑谷は轟に近ずき頭突きをし轟を突き飛ばす

「君の境遇も…決心も…僕なんかに測り知れるもんじゃない!!でも全力も出さないう…一番を狙ってるなんてふざけるなって思ってるよ!!」

「うるせえ…!!」

「だからっ!!僕は勝つ!!君をッ!!超えてッ!!」

緑谷は轟の腹を殴り場外ギリギリまで飛ばす

「左は…親父の…!!」

「違う…君の!!力じゃないか!!」

緑谷の一言が轟の心に響き、轟の中で弾けた

辺りがオレンジ色に染まる

「使った!!」

「あれが轟の…熱の力!!」

ここからの展開はとても早かった

轟が熱ひたひたを使ったことで氷結の威力が元に戻り緑谷に攻撃する

緑谷は足が折れながらも轟に向かって攻撃を仕掛けた

2人の攻撃がぶつかった瞬間、ステージは碎け、会場中に爆風が起きる

そして砂埃が晴れ初めステージに立っていたのは…轟だった

「緑谷くん…場外!轟くん3回戦進出!!」

緑谷は搬送ロボに担がれ保健室へ向かった

『今からしばらくはらく補修タイムに入る!!終わりに次第連絡するからそれまで待機!!』

「緑谷の元へ行こう!」

「うん!!」

「ケロ!」

「オイラも!!」

飯田、麗日、蛙吹、峰田は急いで立ち上がり保健室に行った

「百、次だ…頑張ろう」

「ええ!負けませんわよ」

そして15分後

『おつしサンキューセメントス!!始めるぜ2回戦第2試合!!ブロリーVS八百万!!』

2回戦

第2試合 ブロリーVS八百万

「百、全力で来るのか?」

「当たり前ですわ」

「なら…俺も」

『START!!』

プレゼントマイクの開始の合図を聞いたブロリーは八百万の元へ行き拳を叩き込む

しかしそれは八百万ではなく鉄のパイプ

八百万は鉄パイプを地面に向けて創造することにより自身を空に飛ばしたのだ

「甘いですわ!!ブロリーさん!!」

八百万は上を取り両手から小型の爆弾を創造しブロリーの背中に貼り付けると地面を転がり距離を取って握っているスイッチを押し爆破させる

「ぐっ!!」

ブロリーは一瞬怯んだが素早く八百万に向けてエネルギー弾を放つ

「そうしてくると……!思ってたわ!!」

八百万は盾を創造し盾を使ってエネルギー弾を受け流す

ブロリーが逃げた先にエネルギー弾を放つも八百万に予測され逃げる

『八百万がブロリーの攻撃をことごとく回避!!こりやすげえ!!』

そして足元に爆弾を4つ投げ、ブロリーを飛ばせまいと大きなハンマーを使って地面に抑え込む

「八百万がブロリー押してる!!」

「これ案外勝てるんじゃない」

「アホかよく見ろ、ポニーテールのやつ顔の色がどんどん白くなってんだろが」

「ほんとだ……まさか創造しすぎてってこと!?!」

「てことは轟と緑谷の試合と違って早く決着つけないとやばいのか……」

『八百万!ブロリーにヒットアンドアウェイ戦法!!ブロリー手も足も出ないか!?!』

「はあ……はあ……」

ブロリーが近づけば八百万は距離をとり爆弾を投げる

しかし八百万の個性では長期戦は不利になる一方

ブロリーはそれを知っている

(そろそろ勝負を決めないと……!)

八百万は自分のマトリヨシカを作りそれをブロリーに放り投げる

「なんだ……?」

ブロリーはマトリヨシカを弾く

すると突然、辺りが真っ白に光る

「ぐあ???」

『これは……閃光弾!?!』

「これで決めます!!!」

八百万は服を破いて巨大な大砲を作りブロリーに照準を合わせ弾を発射させた

『これで勝負が決まるか!!!?!』

普通ならば避ける一択だろう

しかしブロリーは違った

ブロリーは弾を掴みすぐに上空へ放り投げエネルギー弾であとかたもなく消滅させる

「凄いな……百」

「はあ……はあ……まだ……」

「百、お前の負けだ」

ブロリーがそう言ってエネルギー弾を作り出し八百万に向けて投げた
八百万は盾を創造しようとするも間に合わずエネルギー弾にモロ直撃し、地面に倒れた

「八百万さん行動不能、ブロリーくん3回戦進出!!」

会場が拍手で包まれると同時にブロリーは地面にエネルギー弾を放つ

『ちょ!?!何してんだよブロリー!!』

「百の服が破れてる。だから…砂煙で隠した」

ブロリーは自分の上着を八百万に被せ保健室へ運んだ

『…かっけえー』

『普通だろ』

『いや!あんなことサラツと出来るやつそうそういねえって!!』

2 回戦

第3試合 切島VS芦戸

芦戸が酸でステージをヌルヌルにするも切島は地面に足を突き刺して歩いたため効
果はなかった

その後すぐに切島が芦戸を掴みポンツと放り投げた

すると芦戸はするすると場外まで滑って行き見事切島が3回戦進出した結果

切島○VS芦戸●

2回戦

第4試合 爆豪VS飯田

飯田が開始の合図とともにレシプロで爆豪に蹴りを叩き込もうとするも爆破で地面をボコボコにされ飯田が転ぶ

爆豪はその隙について飯田に爆破ラッシュを叩き込み勝利した

結果

爆豪○VS飯田●

『爆豪のエゲツない爆撃で3回戦進出!!これでベスト4が出揃ったぞ!!それじゃ早速準決してくぜ!!』

ー保健室ー

「……はっ！試合は!?!」

「終わったよ、スニッカーズ食べるかい？」

「はい……」

「しばらく横になって下さい。それと後でお礼言いなさい」

八百万は自分にかけてられている上着をの名前を見る

「ブロリーさん……」

「彼、準決勝のアナウンスが鳴るまでずっとここにいてね、「百の分まで頑張る」って言うてたよ」

「……頑張ってくださいね。ブロリーさん!!」

『両者で揃ったな!?!んじやまあ始めるか!!』

「轟……目が変わったな」

「そうか?」

「スッキリした目が変わってる……お互い全力で……頑張ろう」

「……ああ」

準決勝

第1試合 ブロリーVS轟

波乱の準決勝、
開始
!!!!

ブロリーVS轟!!波乱の準決勝!!

『3回戦第1試合!START!!!』

(轟はきつと大氷壁を繰り出してくる…なら!)

『おっ!?ブロリーが空飛んだ!』

「轟、お前は強い。だから……すぐに終わらせる」

ブロリーは両手でエネルギー弾を作り出し連射する

『容赦ねえー!!!』

「こうでもしないと轟には勝てない」

ブロリーはしばらく上空で砂埃を眺めていた

すると砂埃の中から大氷壁が現れブロリーを包み込んだ

「危ねえ……あと少して場外だった」

『轟ギリギリのところまで踏ん張ったあ!!』

「ブロリーが一瞬で……」

「さすが瞬殺マン轟……!!」

「いや！あれ見ろ!!」

砂藤が席を乗り出し指を指す方を見ると氷が緑に光っていた

「ハアアアアア!!」

大きな声とともに氷が砕かれる

しかしそこにブロリーの姿はない

『あれ？ブロリーどこ行った？』

轟が辺りを警戒して上を見たり左を見たりする

「どこ行った…?」

「後ろだ」

轟が後ろを振り向こうとした瞬間、ブロリーは顔を掴んでエネルギー弾を放ち、轟を

放り投げる

「ぐっ…!!!」

『な!?今どうやって!?』

『砕いた氷塊の後ろに隠れてたのか…?』

轟は再び氷結しようとするもブロリーのスピードには勝てない

ブロリーは轟の襟をつかみ地面に叩きつける

「グハッ…!!!」

「焦凍オオオ!!何してるんだ!!早く炎を使え!!」

「轟、どうする?このまま俺に負けるか…足掻いて…勝利を掴むか」

「聞くまでもねえだろ…勝利を掴む!!」

轟が地面から立ち上がると左半身から炎が吹き出す

「熱っ…」

『轟が炎を使いブロリーに近づいて行く!!』

轟は炎をブロリーに向けて放出するも簡単に避けられる

「轟…動きが大雑把すぎる」

ブロリーは炎を避け続け地面にエネルギー弾を埋め込んだ

すると地面はひび割れ無数のエネルギー弾が現れた

『なんじゃこりゃああ?!』

無数のエネルギー弾は空高く上がっていき、轟の元に急降下していく

轟は迫り来るエネルギー弾を炎で撃ち落とそうとする…が、エネルギー弾がまるで生きているかのように炎を避けた

「なっ!?!」

轟は慌てて氷壁を作りだしエネルギー弾を防ぐ

しかしブロリーのエネルギー弾は1つ1つの威力がとても重いため全てのエネルギー

ギー弾を耐える前に氷壁が砕け散り轟に何発か炸裂した

「あれが俺の今出せる力。轟…まだやるか？」

「……当たり前だ!!」

轟は炎を出したまま右半身を氷で覆い始める

『轟なんだその姿!!!あれか!!!どつかの大冒険の!!!』

「動けるのか？」

「意地でも動く!!」

轟がそう言うのとブロリーはニツと笑い、戦闘態勢を取る

轟はその姿のまま走り出しブロリーに殴りかかった

ブロリーは近づいてきた轟をエネルギー弾で攻撃するが纏っている炎がエネルギー

弾を防いだ

「痛てえが…さつき程じゃねえ」

轟はブロリーを殴って距離をとり、炎と氷を同時に放出する

顔を殴られたブロリーだがすぐに立て直し手のひらに大きなエネルギー弾を作り出

し轟の攻撃を受け止め消し飛ばした

「!!!?」

ブロリーは地面を蹴り、轟へ突っ込んでいく

轟は右足で思いっきり地面を踏み左手をブロリーに向ける

「今…俺が出せる最大限の力を…!!」

「行け!!焦凍!!」

轟が思いっきり溜めた炎をブロリーに向けて放ち、辺りは光に包まれ全員が目を瞑ってしまった

『どうなってるんだ?!』

「ブロリーは?!轟は?!」

「あつ!見ろあれ!!」

そこにはケロッとした顔のブロリーと横になっている轟がいた

『と、轟ダウン!!!ブロリーの勝利!!!ブロリー決勝戦進出だああああ!!!』

「轟、最後倒れてた…あれがなかったら俺、負けてた」

「そんなことねえ…俺の実力が無かったんだ…ブロリー、決勝戦がんばれよ」

「…ああ」

ブロリーは轟と握手をした後すぐに轟を担ぎ保健室へ走り出す

『さ!セメントス!!会場直して!!』

「人使いが荒いですね…」

「プロリー、お前…USJのあの姿はなんなんだ？」

「分からない…相澤が怪我してるのを見て…そこからの記憶が曖昧…でも…怒りで頭がいっぱいだったのは覚えてる…あと悲しみ」

「そうか…悪い…」

「気にしなくていい。轟とは仲が良くなれる気がする」

「…今度蕎麦食べに行くか」

「ソバ…」

蕎麦という言葉に反応したプロリーからは幸せそうなオーラがあふれでいた

「プロリー、保健室まで送ってくれてありがとうな」

「俺も行くついでだ」

プロリーは轟を降ろし保健室へ入った

「プロリーさん！それに轟さんも！」

「百、怪我は？」

「大丈夫ですわ!!試合お疲れ様です」

八百万は2人の前に椅子を置き、轟が先にリカバリーされている間に八百万はプロリーに上着を返す

「プロリーさん、ありがとうございます」

「…ああ」

「火傷が少し酷いね…チユーー!!!」

「今から俺もあれをするのか…?」

「ええ」

八百万がそう言った瞬間、ブロリーの顔が少し嫌な顔になっていた

「はい、これで大丈夫だよ。次はブロリーくんだね」

「う…お、俺はしない」

「何言ってるんだい!ほら、治癒するよ」

「も、百…」

「した方がいいかと」

「と、轟…」

「火傷してるだろ。してもらえ」

「…分かった…」

ブロリーは諦めてリカバリーガールにチユーーしてもらった

準決勝

第2試合 爆豪VS切島

開始早々爆豪が切島の顔を爆破するも切島の硬化により爆破ダメージがそこまで入

らなかった。爆豪の爆破を真正面から受ける切島は最初は余裕がある表情だったもののしばらくして硬化が緩み、そのすきを爆豪は見逃さずラッシュを叩き込み勝利した

結果

爆豪○VS切島●

『よって決勝戦は……！ブロリーVS爆豪に決定だ！』

「ブロリーと爆豪……か」

「弱点突くのが上手い爆豪くと……弱点がないブロリーくん……か」

「どっち勝つかな？」

「正直……ブロリーくんにも弱点はあると思うんだ。だからかつちゃんはその弱点を探し当ててそこをひたすらついていくしかないと思う。でもブロリーくんは今まで弱点を見せない強さがあるから……ブツブツ」

「……ブロリーの弱点……多分光じゃね？」

緑谷がブツブツと言っていると後ろに座つた瀬呂が話しかけてくる

「え？常闇くんと同じ……？」

「いや、ヤオモモの閃光弾？だっけ？あれですんげー怯んだじゃん。だからもしかしたらなーって」

「確かに……そうだ!!ブロリー耳いいから!!」

「人一倍、音とかに弱いのかな?」

「でもしたら…爆豪は最悪の相手じゃない?」

みんなが考察をしまくっていると飯田が突然震えだす

「スマン、電話ダ」

「電話だったんだ…」

飯田は席を外し電話をポケットから取り出し電話に出る

「母さんか…もしもし、負けてしまいました。母さん…不甲斐ないです」

『違うの!その事じゃなくて…!!ごめんなさいね…天哉落ち着いて聞いて…!!天晴が…敵に…!!』

「えっ」

ー保須市ー

「お前らは気づきもしない。偽善と虚栄で覆われた…ハア…歪な社会、ヒーローと呼ばれる者ども…俺が気づかせてやる…」

「探したぞ、ヒーロー殺しのステイン」

ステインは刀を抜き後ろにいる敵に突き刺す

「おお…すごい反応速度だが…俺には効かねえな…」

男はステインの攻撃を受け止め刀をへし折る

「何者だ……？」

「俺の名前は……ターレス。着いてこい。お前に合わせてえやつがいる」

ターレスと名乗る男はヒーロー殺しの前で腕を組み耳にある不思議な機械のボタンを押した

「黒霧、ヒーロー殺しの勧誘は終わったぞ。早くワープさせろ」

『分かりました』

「ターレス……と言ったな。お前の目標はなんだ？」

「……この薄汚えヒーロー社会をぶっ壊してやるんだ。お前だって同じだろ？」

そう言うターレスとヒーロー殺しの前に黒のモヤが現れる

「迎えが来た。ほら中に入れ」

ターレスがヒーロー殺しの肩を掴みモヤの中へ入れた

「ふう……」

「お疲れ様です。ターレスさんも早く」

黒霧が喋り終わる前にターレスは警察達が集まっている路地に向けて何かを投げ込む

その瞬間、路地は大爆発し建物が崩れた

「証拠は…消しかねえとな」

ターレスはクッククック…と笑い黒霧の中へと入っていった

ブロリーVS爆豪！本気の超決勝戦！！／終了！雄英体育祭!!!

「お、轟！それと八百万！」

「おかえり！席開けといたよ！」

耳郎が空いている席をポンポンと叩き、八百万と轟はそこに座る

「どっちが勝ちそうだ?？」

「いやー難しいところよ！今緑谷も解析してたんだけどどっちが勝つかわかんねーって」

「そうか」

「ブロリーさん…頑張ってください…」

『さあ!!長かった雄英体育祭も終盤!!いよいよ始まるラストバトル!!この試合で雄英1年の頂点が決まるぜ!!』

「あん時の…USJん時ので来いや…毛皮野郎!!!」

「…前も言った…使えない」

『決勝戦、ブロリー対爆豪!!今スタアートオ!!!』

「…?なんで二人共動かねえんだ?」

「なんか話してんのかね?」

「テメエ…本気でやらねえでなんでここに立ってやがる!!」

「だから…俺の出せる最大で…お前と戦う!!」

ブロリーはそう言うのと爆豪の前まで一気に距離を詰め、顔を殴ろうとする

しかし爆豪はブロリーのパンチをしゃがんで回避し顔を爆破させる

「うっ!!!」

爆豪はすぐさまブロリーの後ろに周り背中を爆破させる

「ぐうっ!!」

「おら!!動きおせえぞー!」

ブロリーは挑発してくる爆豪にエネルギー弾を当て地面に叩きつける

「があっ!!!」

地面の爆豪を見てブロリーは空を飛びエネルギー弾を撃ちまくる

「この程度で動けなくなる訳ねえだろうが!!」

爆豪は地面を爆破させ空に飛び上がってブロリーの顔めがけて爆破する

そして爆豪はひとつ気づいた

(顔ん時だけぜってえ防御してやがる…)

爆豪は手でブロリーの顔を掴んで思いつきり爆破する

「どうだ!!」

「作戦…通り…!」

「!!!?!」

爆豪は読みが外れ少し焦っていた

「どういうことだ…クソっ!!」

「……俺はトーナメント戦全ての試合で頭を守って戦ってきた。そうすれば決勝戦で戦う相手が頭を狙って攻撃してくる…だがそれだけじゃダメだと思った。だから体に受けた攻撃を無視して顔だけ守った。俺は、顔だけが弱点」と見せたんだ」

ブロリーは話終えると爆豪にエネルギー弾を投げつける

爆豪は手を爆破させエネルギー弾を回避しブロリーを爆破し続ける

「俺は…1位になるんだ!! テメエの… テメエの全てをねじ伏せて!!」

爆豪は手のひらを丸くし一点集中の爆発をブロリーに向けて放つ

ブロリーはギリギリのところまで回避するも左腕に当たり、当たったところから血が流れる

「うぐっ!! うああああ!!」

会場中にブロリーの叫び声が響く

『爆豪、ここでブロリーにダメージを与える!!これは勝負の行方がわからなくなってきたぞ!!』

「これで…!!テメエの防御は意味ねえ…!!テメエも本気で来」

爆豪が喋っている最中にブロリーは爆豪の顔をつかみ地面に叩きつけた

「この程度で…!!俺は負けない!」

爆豪は地面に横になったものの直ぐに立ち上がりまた至近距離で背中を撃つ

「があっ!!ぐううう!!」

後ろに振り返りブロリーは爆豪を殴りにかかるが爆豪が手を合わせ閃光弾スタングレネードを繰り出し

し目をやられる

「うあっ!?目が…!!」

ブロリーが目を瞑った瞬間、爆豪は足を集中的に爆破させ膝をつかせる

「テメエに!!俺が勝つんだよ!!榴弾砲ハウザーインパクト着弾オオオオオ!!」

爆豪が麗日戦で見せた最大火力に勢いと回転を加えた爆破をブロリーに叩き込む

『ここで爆豪が麗日戦の時の特大火力以上の爆破をブロリーに当てたああああ!』

『砂煙が舞っていてブロリーの安否が分からねえ…!ミッドナイト!!』

「こつちからもまだ…あっ!見えてきたわ!!」

砂煙が晴れ始めそこには横になったブロリーが倒れていた

「どうなるんだ…?」

「このままじゃブロリーの負け…」

「ブロリーさん…」

「あつ！見て見て！ブロリーくんが立ち上がるうと…あれ？なんか…目付き違くない？」

葉隠がそう言った瞬間、緑谷、峰田、上鳴、蛙吹、八百万、耳郎が席を立ててブロリーの方を見る

「ほんとだ…」

「あれって…USJの!!」

「やばいって!!早く止めないと爆豪が!!」

6人が慌てていた理由がわかったA組の面々も少し慌て始める

「そうだ!!てめえのその力が」

「グルルルルアアアアアアアアアアアア!!」

爆豪の話を遮りブロリーが雄叫びを上げる

その雄叫びは今までのブロリーの雄叫びとは全くの別物だった。会場中が揺れ、ステージには亀裂が入り、ミッドナイトやプロヒーロー達は冷や汗を流す

「ウオオオオオオオオオ!!!」

次第にブロリーの体から緑色のオーラが溢れ出しあたりを緑色に染めあげる

爆豪はその姿を見て1歩、また1歩と後ろに下がり始めた。しかし爆豪はその光景を見て笑い、再びは榴弾砲着弾を撃とうと飛び上がる

それに対しブロリーは手の平いっぱいエネルギー弾を作り出し力を溜める

「さつきよりも威力上げてやらああああ!!!」

爆豪はさつきよりも回転しさらに爆発の威力も増した榴弾砲着弾を繰り出してきたしかしそれに対してブロリーの目には

殺意が籠もっていた

「ブロリーさん!!!落ち着いて!!!」

「ガアアアアアアア!!!」

ブロリーがエネルギー弾を放つ直前

ガウの毛皮が自分の腰から離れていくのが見える

「!!!ガウ!!!」

ブロリーは正気に戻りエネルギー弾を消し、爆豪に背中を向けガウの毛皮を掴む

その瞬間、爆豪の榴弾砲着弾をくらい場外へと押し出された

「…はっ?」

ブルリーはガウの毛皮を握って丸まったまま気絶していた

どうやら壁に頭をぶつけて意識を失った…いや、疲れて寝ているようだった

「テ…テメエ!!ふざけんなよ!!こんなんで勝つても意味ねえんだよ!!立てや!!立って俺とたた…か…え…」

興奮した爆豪を止めるためにミッドナイトが爆豪に眠り香を嗅がせ眠らせる

「ブルリーくん場外!!よって爆豪くんの勝ち!!」

『…以上、全ての競技が終了!!今年度の雄英体育祭1年優勝は…A組爆豪勝己!!』

プレゼントマイクの声と同時に歓声が起こる

ブルリーは搬送ロボで保健室に運ばれ、爆豪は表彰台の上に運ばれた

そしてそれから30分後

「それではこれより!!表彰式に移ります!」

ミッドナイトの上では花火がポンポン上がっているがみんなはそれを見ていない

「何アレ…」

「起きてからずっと暴れてんだよ…締まんねー1位だよな…」

みんなの目線の先にあるのは1位と書いてある表彰台の上でガツガツに縛られている爆豪がいる

「ん ーん ーん!!!」

3位の座にいるのは切島と轟

「爆豪落ち着けて!!暴れんな!!」

「……鬼みてえだ」

そして2位の座にいるブロリーはそんな爆豪を見て謝る

「爆豪……ごめん……」

「ん ーん!!!」

「……なんて言っただけ?」

「ん ーん ーん!!!」

ブロリーの放った一言に爆豪はさらに暴れ出す

「さ、さあ!!メダル授与式よ!!今年メダルを贈呈してくれるのは勿論この人!!」

ミッドナイトが会場の一番上に手を向ける

「私が……!!!メダルを持って「我らがヒーロー!オールマイイトオ!!!」ええ……」

オールマイイトのセリフとミッドナイトのセリフがカブってしまいオールマイイトはミッドナイトを見ながら小刻みに震え始める

「今年の1年はいいなあ」

「あのオールマイトにメダル授与してもらえんだぜ!?羨ましいねー!!」

「切島少年、おめでとう!!君は強い!だからこそもつと精進するようにね!」

「ウツス!!頑張ります!!」

「轟少年!おめでとう!以前とは顔つきが全然違う。ブロリー少年戦で見せたあの姿…
これから共に慣らしていこう」

「はい」

「ブロリー少年!おめでとう!!」

「オールマイト。俺は…また暴走を…」

「…大丈夫。君には友がいる。その力を使いこなせるようになるさ!」
「…ああ」

ブロリーに銀色のメダルを渡し遂に爆豪の元へ行く

「爆豪少年…つとこりやあんまりだ。伏線回収見事だったな!」

「オールマイトオ!!こんな一番なんの価値もねえんだよ!!世間が認めても俺が認めな
きゃごみなんだよ!!」

(顔すげえ…)

「うむ！ 相対評価に晒され続ける子の世界で不変の絶対評価を持ち続けられる人間はそういうない！ 受け取つとけよ！ 傷」として！ 忘れないよう！」

「いらねっつってんだろが!!」

このあと爆豪はメダルを受け取るのに抵抗するもオールマイトが少しメダルを下げた拍子に口の中にメダルの紐が引っかかりそのままぶら下げられた

「さあ!! 今回は彼らだった!! しかし皆さん!! ご覧頂いた通りこの場のどれにもここに経つ可能性はあつた!! 競い！ 高め合い!! さらに先へと登っていくその姿！ 次世代ヒーローは確実にその目を伸ばしている!! てな感じで最後に一言!! 皆さんご唱和ください!!」

「プルスウル…え？」

「お疲れ様でした!!!」

「プル」プルス」プル…」

オールマイトのお疲れ様でしたがみんなのプルスウルトラをかき消し会場はブーイングで包まれ体育祭は幕を閉じた

「おつかれつつうことで明日明後日は休校だ。プロからの指名などこっちでまとめて休み明けに発表するドキドキしながら休めよ：以上解散」

「「お疲れ様でした!!!」」

この後みんなはそれぞれの帰路につき各家庭で今日の体育祭の録画を見たり疲れを癒したりしていた

そしてプロリーは…

「相澤、明日…街に出かけてもいいか？」

「ああ…ん？ちよつと待て今なんつった？」

「出掛けたい」

次回！初めての挑戦！プロリー、1人で街に行く!!

初めての挑戦!プロリー、1人で街に行く!!

雄英体育祭が終わった翌日、プロリーはジャージを来て雄英高校の校門の前に立つ

「よし…行くぞ」

何故、プロリーが1人で街に行くことになったかと言うとそれは昨日の夜7時に遡る「シャーペンと消しゴム、あとマグカップが壊れた。だから自分で買いに行きたいんだ」「俺が買つといてやるぞ?」

「自分で何か出来るようにならないとダメだ…だから一人で行かせてくれ。頼む」

「…それもそうだな。プロリー、前の約束したこと覚えてるか?」

「必ず7時に帰ってくる、外で個性を使わない、何かされても殴らない」

「そのルールを守るって約束するならいいぞ。明日の朝、財布を渡す。だから今日は寝ろ、分かったか?」

「ああ。分かった」

と、言うことである

相澤から街までの地図と電車の乗る時間、機会の使い方の書いた紙を持ち、お金の

入ったカバンを肩にかけながらブロリーは街に向かい始めた

「耳郎くちよつと休憩しようぜ〜…」

「あんたねえ…まだ始めて30分くらいでしょ!？」

街の喫茶店の窓側の席、そこで耳郎と上鳴は勉強をしていた

「だってよお〜!!」

「だってじゃない!はあ…ヤオモモは少し遅れるみたいだし…ヤオモモ来るまで勉強しようって言ったのあんただよ!？」

「あー!!なんでそんなこと言っちゃまったんだ30分前の俺!!」

上鳴が机に突っ伏して頭を抱えていると耳郎が上鳴の肩を叩く

「ねえ、あれってブロリー?」

「ブロリーは学校にいるんだろー?だったらここにいてるわけ…あ、ブロリーだわアレ」

2人の目線の先には帽子を深くかぶっていて買い物袋をもって歩いているブロリーがいた

「何してるんだろ…」

「ブロリーに何してるか聞きに行こうぜ!!!」

「はあ!? モモはどうすんの!？」

「連絡入れといて後で合流すればいいじゃん! ほら見失う前に行くぞ!!」

上鳴と耳郎は勉強道具をカバンに入れレジでお金を払ってブロリーを追いかけた

「消しゴムとシャーペンは買った…あとはコップ…: マグカップの売っているところはどこだ?」

ブロリーは紙を見ながらマグカップの売っている場所を探していた

「まだ時間はある…ゆっくりできる…」

ブロリーは帽子を被り直し歩き始める

するとその後ろから上鳴と耳郎が手を振って歩いてきた

「おいブロリー!! 何してんだー?」

「…上鳴、それに耳郎…俺は」

ブロリーは2人の方向に向かおうとすると足に何か当たる

ブロリーが下を見るとそこにはアイスを持った小さな女の子がいた

「……」

「…あいす…」

女の子のアイスはブロリーの足に当たって地面に落としたようだ

「す、すみません！ほら、お兄ちゃんにごめんなさいして!!」

近くにいた親が急いでその子の元へ行き誤らせる

「……アイス、どこに売ってる？」

「えっ!?…いや」

「あっち……」

親が断るより先に女の子は泣きながらアイスが売っている場所を指さす

ブルリーはその場所に行き、アイスを持って帰ってきた

「さっきのはどの種類かわからないから……3段アイスつてのを買った。これで許してくれ」

ブルリーがしゃがんで女の子にそのアイスを渡すと女の子は泣きやみ、笑い始める

「わあああ!」

「ありがとうございます……良かったですか？」

「…俺が足元見ていないのが悪かった。ごめんなさい」

ブルリーが頭を下げた瞬間、帽子が地面におち顔が見える

「あつ!キミ雄英体育祭の!!」

「2位の子じゃん!!」

「惜しかったねー!!」

「意外とデカイんだね!!」

ブロリーの周りに一気に人が集まりブロリーは上鳴と耳郎に助けに来てくれと視線で訴えかける

「ちよつとごめんなさい!! 連れを返してー!!」

「ごめんなさい! 行かないといけないところがあるんで…!!」

〜10分後〜

「助かった…ありがとう」

「良いってことよ! いやーまさかあんなに人が集まるなんてな!」

「ウチらも捕まりかけた時は焦っちゃった…」

「ブロリーは何してたんだ?」

「昨日シャーペンと消しゴムを使い切って…あとマグカップを壊したんだ。だから買いに来て…あとはマグカップだけ」

「へえ、なら俺ら案内するぜ?」

「!!…いいのか?」

「ああ! 前も言ったろ? 困ってるなら助けるって! 俺達はヒーローの卵だしな!」

「うん、そうだね。うちも手伝うよブロリー」

「……ありがとう」

「つとその前に……ヤオモモ待とうぜ、多分もうそろくるだろ」

「百が来るのか……?」

「そうだよ??」

耳郎が返事をする。ブロリーは少し笑った

それを見た耳郎は察した

”ブロリー……多分だけど百のこと好きだな”と

「皆さん！お待たせしてすみません！」

耳郎がブロリーを見ているタイミングで八百万が3人の前に現れる

その時、八百万はその耳郎を見てハツとする

(まさか……耳郎さんはブロリーさんのことが!!?)

違う、そうじゃない

「よっし！ヤオモモも来たしブロリーのコップ買いに行くか!!」

「おー」

ブロリーは帽子を被り上鳴について行く

耳郎が席を立ち、2人について行こうとすると八百万が耳郎に近づく。耳元で喋りかけ

る

「私…応援しますわ!」

「?」

八百万は耳郎にそう告げると上鳴とプロリーの元へ足を進める

しかし八百万は少し不思議な感情に襲われていた

(なんでしよう…どこか…モヤモヤしますわ)

そんな気持ちを八百万は気にせずプロリーのマグカップを選びに向かう

「お、プロリーこのマグカップいいんじゃないね?」

「おお…」

プロリーは上鳴の持ってきたマグカップを眺めるが何かが違うと感じ、別のものを探し始める

ちなみに上鳴チョイスのマグカップの柄は黄色に黒のジグザグラインの入ったマグカップ

「プロリーさん、こちらのマグカップはどうでしょう?」

「…緑色…!!」

八百万チヨイスのマグカップは全体的に緑色、そして黒のストライプが入ったコップ
「これにする…」

「早っ!?!」

「即答したね…」

ブロリーは八百万の選んだマグカップを購入し買い物は終了した

「終わった、ありがとう」

「ブロリー、この後どうするんだ?」

「…雄英に帰る。もうすることは無いから…」

「そっかー…」

「でも…:…また、一緒に買い物に来てくれるか?」

「勿論ですわ!」

「当たり前じゃん!」

「今度さ、芦戸とかも誘って遊びにいこうよ」

「それいいね!」

「…楽しみ」

ブロリーの笑顔にみんながぼわつとなりその日はそこで解散した

「ん？プロリーどうしたんだ？マグカップ眺めて」

「百が選んでくれたんだ…嬉しい」

『そうか！そりやよかつたな!!大事に使えよ?』

「…使えない」

『いや使えよ』

職場体験編

コードネームを考えよう

雄英体育祭が終わり、早2日

「相澤、包帯全部取れのか」

「本当は昨日で全部取れてるはずだったんだ。婆さんが取るなつてうるさくてな」

ブロリーが相澤と一緒に教室の前に立っているとワイワイとしているクラスメイト
声が聞こえる

「相変わらず騒がしい…」

「…相澤、今少しにやけてた」

「…先に入れ」

相澤は口元を捕縛具で隠すとブロリーを先に教室に入れると顔をパシツと叩き入っ
てくる

「おはよう」

「先生今廊下で」

「おはよう」

2度目の相澤のおはようにより上鳴は（あ、これ聞いちやダメなやつ）と察し、静かにする

「相澤先生、包帯取れたのね。良かったわ」

「婆さんの処置が大袈裟なんだよ。そんなことより、今回のヒーロー基礎学は少し特別だぞ」

相澤がそう言うのとクラスの半数の表情が少し強張る

（ヒーロー関連の法律とか…?）

（特別…小テストか!? うつわマジかなんも覚えてねえ!）

『『コードネーム』ヒーロー名の考案をしてみよう』

「『『胸膨らむヤツ来たアアアアア!!』』』」

芦戸や切島達が席から立ち上がり全員で歓喜の声を上げた

しかし相澤が一瞥するいちべつると全員席にキツチリと座る

「はあ…というのも先日話した『プロヒーローからのドラフト指名』に関係してくる。だが今回の指名は将来性に対する“興味”に近い」

「え…? なら本格的なのは…?」

「本格的な指名が入るのは即戦力と判断される経験を積んだ2、3年から…そして卒業までにその“興味”がそがれたら一方的なキャンセルなんてこともよくある」

「大人は…!!なんて勝手なんだ!!」

峰田がコンツと机を叩きふるぶると震えている

そんな峰田を無視し葉隠が話し始める

「頂いた指名がそんなまま自身のハードルになるんですね!」

「その通り。で、その指名結果がこうだ」

相澤がりモコンを持ち黒板に映像を表示させる

ブローリー 5 6 6 4

轟 4 1 1 2

爆豪 3 3 4 2

切島 3 5 0

八百万 3 1 0

常闇 2 6 3

飯田 2 3 1

上鳴 1 0 6

麗日 1 7

瀬呂 1 2

「うっわ!白黒着いたア!!」

「見る目ないよね！プロ！」

「やっぱりプロリーが多いなー」

「爆豪くお前体育祭1位なのに2位と3位に負けてんじやん」

「負けてねーわ!!くそが!!」

「そりや表彰台で拘束されたやつとかビビるだろ」

「ビビってんじやねーよ！プロが!!」

「プロリーさん、轟さん…流石です!!私も頑張らなくては!!」

「おお…俺のはほとんど親の話題ありきだろ」

「百…今日訓練するか？」

「ええ！勿論！」

「俺もいいか？」

「ああ、いいぞ」

「おい、そろそろ静かにしろ」

相澤が黒板をコンコンツと叩きみんなを静かにさせる

「これを踏まえて指名の有無関係なく、職場体験”へ行つてプロの活動を実際に体験しより実りある訓練をしてもらう」

「なるほど!!それでヒーロー名か!!」

「俄然楽しみになってきたア!!」

「まあ仮のヒーロー名ではあるが適当なもんは…」

「つけたら地獄を見ちゃうわよ!!」

扉が勢いよく開かれミッドナイトが教室に入ってくる

「この時の名が世の中に認知されそのままプロ名になっている人が多いからね!!」

「ミッドナイト!!」

「えーミッドナイトさんの言った通りだ。その辺のセンスは俺にはないからミッドナイトさんが査定してくれる」

相澤は教卓の中から寝袋を出し寝ようとする

「将来の自分がどうなるのか、名をつけることでイメージが固まりそこに近づいていく

…それが『名を体で表す』ってことだ。そうだな…例えば”オールマイト”とかな」

相澤はそう言い、完全に眠る体勢にはいった

「さー早速ヒーロー名を考えてくわよ!時間は15分!!」

ミッドナイトは前列に小さなホワイトボードを渡して後ろに回させる

そしてみんなで考え始め10分経ったくらい

「ブロリー、お前ヒーロー名考えてるか？」

「…まだだ…轟は？」

「俺は名前で行く」

轟はそう言つて”焦凍”とホワイトボードに書いた

「カタカナで”ショート”にしてみるのはどうでしょう？そうすればコードネームらしくなると思いますわ」

「…それもそうだな」

轟は漢字からカタカナに変えそれを眺める

「ありがとな、八百万」

八百万は笑顔になった轟の顔を見て喜んだ

「百…どんなヒーロー名にするんだ？」

「私は万物ヒーロー、クリエティです。どうでしょう？」

「いいと思うぞ」

「クリエティ…カッコイイ名前…」

轟とブロリーは八百万のヒーロー名を聞き、ピッタリのヒーロー名だと思った

「ありがとうございます！」

「…俺、ブロリーにする」

「名前でもよろしいのですか？」

「ああ、俺はこの名前が1番しっくりくると思う…それに」

「それに？」

「…みんなみたいにカツコイイ名前が付けられそうにない」

ブロリーがそう言うのと、轟と八百万はふふつと笑ってしまった

「？」

「い、いえ…お気になさらず」

「お前見た目と性格が全然違うな」

「そうか？」

「はーい!!そろそろいいかしら!できた人は挙手して発表してね!」

(発表形式かよ!?)

(これはなかなか度胸がいるな…!)

「はい、なら僕から☆」

1番最初は青山優雅

青山は自信満々に席を立ち教卓の前へ移動し始める

「行くよ…?輝きヒーロー! I ^{アイ} ^{キャン} ^{ノツ} ^{トス} ^{トッ} ^{トゥ} ^{ウィン} ^{クリン} ^グ can not stop twinkling!! 訳

してキラキラが止められないよ☆」

「「「短文」」」」

「青山くん!?!?!?」
「そこは I を取ってCan, tに省略した方が呼びやすくなると思うわよ」

「それねマドモアゼル☆」

青山のヒーロー名：Ca^{キャン}nt, s^{ストップ}top t^{トゥ}win^{ウィン}ck^{ック}ling^{リング}

「じゃー次あたし!リドリーヒーロー、エイリアンクイーン!!」

「2!!血が強酸性のあれを指摘してるの!?!やめときな!!!」

「えーいいと思ったのにい」

芦戸は口をとがらせて席に戻っていく

この時、クラスメイトのほとんどは自分のヒーロー名を言いずらくて仕方がなかった
なぜなら最初に短文やエイリアンクイーンのインパクトの強いヒーロー名が出てきてしまったため大喜利っぽい空気になってしまっているからである

「じゃあ次、私いいかしら?」

「蛙吹さん!どうぞ!!」

「私、小学校の頃から決めてたの。フロツピー」

「カワイイ!!親しみやすくもいいわ!!みんなから愛されるお手本のようなネーミングね
!」

蛙吹のヒーロー名：フロツピー

「…よし！なら俺行くぜ！！剛健ヒーロー！烈怒頼雄斗！！」
あかのきようてう

『赤の狂騒』！！これは男気ヒーロー”紅頼雄斗”リスペクトね！」
クリムゾンライオット

「そつす！だいぶ古いつすけど俺の目指すヒーロー像は”紅”そのものなんす！」
クリムケン

「フフ…憧れの名を背負うってからには相応の重圧がついてまわるわよ？」

「覚悟の上つす！」

切島のヒーロー名：烈怒頼雄斗
レッドライオット

蛙吹、切島が大喜利つぽい空気を払い皆が言いやすくなり、ここからはどんどんと発
 表されていく

耳郎のヒーロー名：イヤホンIIジャック

障子のヒーロー名：テンタコル

瀬呂のヒーロー名：セロファン

尾白のヒーロー名：テイルマン

砂藤のヒーロー名：シュガーマン

芦戸の（2回目）ヒーロー名：ピンキー

上鳴のヒーロー名：チャージズマ

葉隠のヒーロー名：インビジブルガール

「ここで1度波が止まり再び

そこでブロリーが手を挙げる

「次…俺いいか？」

「おっ！ブロリーくん出来たの？持ってきて!!」

（ブロリー…一体どんなヒーロー名に？）

（なんか凄そうな名前が来そうだな…!）

「破壊ヒーロー…ブロリー」

「「思ったより普通!!」」

「名前でもいいの？」

「うん…俺に1番しっくりくる。これ以上のヒーロー名はない」

「そうね…いいと思うわ！でも破壊ってのはやめた方がいいかもね」

「なら…：破砕？」

「エネルギーヒーローってのはどうだ？」

瀬呂が席を立ててブロリーを指さしてエネルギーヒーローと言う

「エネルギー？」

「だってブロリーさ、エネルギー弾使うだろ？だからエネルギーヒーローってのがいい

「思っただけど…」

「ブロリーはそれを聞いた瞬間、目を少し開く

「エネルギーヒーロー…それで」

「ブロリーのヒーロー名：エネルギーヒーロー・ブロリー

「さあどンドン行くわよ!!!」

「八百万のヒーロー名：クリエティ

「轟のヒーロー名：シヨート

「常闇のヒーロー名：ツクヨミ

「峰田のヒーロー名：グレイプジュース

「口田のヒーロー名：アニマ

「麗日のヒーロー名：ウラビティ

「そして爆豪は…」

「爆殺王」
ばくさつおう

「そういうのやめた方がいいよ」

「んでだよ!!」

「爆豪〜！爆発さん太郎にしろよー!」

「んな名前にするかクソが!!」

「…グラウンド・ゼロは？」

ブルリーがボソツ口に出す

「おっ!? それいいじゃん！」

「爆豪! ブルリーの考えたのにしろよ！」

「するわきやねーだろ!!」

文句を垂れている爆豪だがバクシンチはまあまあいい案だと思つて一応心に留めて置くことにした

「思つたよりずっとスムーズ! 残つてるのは、再考の爆豪くんと飯田くん…それと緑谷くんね」

飯田は席で悩みに悩んだ結果、ヒーロー名は考えれず天哉てんやになつていた

そして次に手を伸ばしたのは緑谷

「僕のヒーロー名は…これです」

みんなに見せたヒーロー名

それは”デク”

「ええ!? 緑谷それでいいのか!？」

みんなはその名前を驚いたように見ている

「この名前…今まで好きじゃなかったんだ。でもある人に”意味”を変えられてさ…僕

は凄く嬉しかったんだ。だから…だから僕のヒーロー名はこれしかありません！」

「いいね…！ちなみに誰に変えられたの？」

「えっ…いやあそれはちよつと…」

「おい!!てめえいつまでそこいんだ！どけクソが!!」

爆豪が緑谷を跳ね除け自分のホワイトボードを教卓にガンツと置く

そこに書かれていた文字は”爆殺卿”
ばくころしきょう

「どーだ！これでいいだろ!!」

「違う…そうじゃない…」

「んてだよ!!!」

爆豪勝己

勉強、掃除、料理等なんでも出来る才能マン

しかしネーミングセンスだけが有り得ないくらいなかつたのであつた

爆豪ヒーロー名：再々考

こうしてI-A組のコードネーム発案会は終了

爆豪はしつかりとしたコードネームが出来るまでは名前でやることとなつた

ブロリー、通形ミリオとの手合わせ

結局、爆豪がヒーロー名を考え直すより先に相澤が起き、ホワイトボードが回収される

「爆豪のヒーロー名はまた今度だ。今からは職場体験の説明をする」

職場体験

・ 職場体験期間は1週間

・ 指名のあった人は個別に渡すリストの中から自分で選ぶ

・ なかった人は予め雄英でオフア―した全国の受け入れ可の事務所40件の中から選ぶ
んでもらう

・ それぞれの活動地域や得意ジャンルをしっかりと考えて選ぶこと

・ 今週末までに提出

「えっ?!?あと2日しかねーじゃん!!」

「時間は有限、当たり前だ」

相澤は一人一人の指名されていた者の名前を呼びリストを渡した

他の者は前列の机に学校が許可を貰ったヒーロー事務所が書いてあるリストを渡し、

後ろに回させた

「全員に行き渡ったな。よし、じゃあ授業はここまで」

相澤が教室から出ていくと全員がリストを見せ合い始める

「なー！ブロリー!!お前どこから来てた?」

上鳴と瀬呂がブロリーの席に行きブロリーのリストを見せてもらう

「あつ！俺も見てえ！」

「私もー!!」

上鳴の声に釣られブロリーの席の前にたくさん集まってきた

「シールドヒーロークラスト!?!」

「ミルコ…ヨロイムシヤまで!?!」

「上期ヒーローランキング上位ヒーローの名前ほとんどあるじゃん!!!」

「ブロリーさん！凄いですわね！」

「何処に行くのー!?!」

みんなはブロリーを見つめ始めブロリーはそんなみんなの目を見ると下を向きはじめる

「まだ…決めてない…」

「…まだ時間あるしな！ゆっくり決めようぜ!!」

切島がブロリーの肩を叩きニコツと笑う

ブロリーはその切島の笑顔を見てホツとしたのかブロリーもニコツと笑った

そして放課後…

ブロリーが約束通りに轟、八百万と特訓していると相澤がひよこつと顔を出す

「ブロリー…と八百万、轟もいたか」

「?…相澤、どうした?」

「お前に会いたいって言う人達がいてな」

「俺に…? 誰だ?」

「入っただけ」

相澤が手招きすると体操服姿の金髪の男、水色の髪の女子、少し猫背気味の男が入ってくる

「相澤先生、この方達は…?」

「雄英ビッグ3だ」

「ビッグ3!?!」

「…偉い人達か?」

「ブロリーがそう言うとな、相澤、天喰以外みんなコケる

「いや…雄英の中で強い人達のことだろ」

「そういう事か」

「確か先輩方は郊外活動をしていらつしやるのですわよね…一体どんなことを？」

「八百万、それはまた今度だ。さ、自己紹介してけ」

「えーじゃあまずは私から自己紹介！私！波動^{はとう}ねじれ！！ねえねえ君がブロリーくん？大きいね！体育祭見たよ、あの個性はなんて個性？すごい力だね！体力もそれに速さも！！」

「……………」

「ブロリーは波動^{はとう}ねじれの質問ラツシユに困惑し八百万に助けの視線を送る

「ねじれさん、ブロリーくん困ってるよ。僕は……………あ、ああ…天喰^{あまじき}…た、環^{たまき}…です…

言えた」

「3人でこれだと20人の前だと何も言えなさそうだね！ねえねえ知ってる？そういう時はね、みんなじゃがいもだと思って見ればいいんだよ！」

「……………もしする時が来るならやってみるよ」

「2人が終わったんなら俺だよね！！3人ともー！！前途ー！！？」

（（（???）））

3人とも頭にハテナを浮かべフリーズする

「多難なんん!! つつってね! よよし掴みは大失敗だ!! 俺の名前は通形とわがたミリオ!!」

「ビッグ3は変わってるんだな…」

「なんとというか…風格が…」

2人がビッグ3の予想外の行動にこの人たちが雄英のトップなのか…? と思つていとブロリーが通形に近ずき話しかける

「……通形ミリオ先輩、俺と戦つてくれないか」

「えっ!? ブ、ブロリーさん…いきなりそれは失礼じゃ…」

「いや! 実は僕も手合わせしたかったんだよね! あの力がどのくらい強いのか! いいですか? 相澤先生…」

「……ああ、校長に許可取ったからいいぞ」

「よーし!! ブロリーくん!! 今着替えるから待つて!!」

「何に着替えるんだ…?」

「コスチュームさ! あ、後! 俺はミリオ先輩でいいよー!」

通形ミリオがカバンを開けコスチュームを取り出し着替え始めて4分経過

「待たせたね！」

「……かつこいいコスチュームだ」

「おお！嬉しいなあ！」

お互い準備が整い、ミリオは構える

ブロリーは仁王立ちでミリオを睨みつける

「…始め」

相澤の声が体育館に響くと同時にブロリーがエネルギー弾を投げつける

エネルギー弾はミリオに直撃…したと思われたがミリオが突然消える

「!!?」

ブロリーは少し驚きあたりを見渡す

「通形先輩が消えた…?」

「ワープ系の個性でしょうか…?」

「しっかり見ておけよ、通形ミリオは…俺が知る限り最もN.O. 1に近い男だ」

「!!?」

2人が驚くと同時にミリオがブロリーの後ろに現れる

「後ろがガラ空きだよ!!」

ブロリーは声のする方に急いで振り返りミリオの顔に拳を放つ

しかし拳はミリオに当たらずに通り返ける

「ッ!?!?」

ブロリーが驚き動きが止まっている隙にミリオが腹を思いつきり殴る
「うぐっ!!」

ブロリーは腹を抑え、1歩下がってすぐにエネルギー弾を連弾する

だがエネルギー弾は全弾ミリオの体を通り抜けていく

「すごい個性だ…」

「へっ!!よせやい!!」

ブロリーはミリオに飛びかかっていくもミリオが再び消え避けられる

(今…落ちていった…?)

ブロリーは空に飛び上がり地面にエネルギー弾を投げる

「うわっ!凄いなえく…地面が抉れてる…」

「でも…それでもミリオには届かない」

ブロリーは砂煙の中の人影が見えるとそこに急降下し蹴りを入れる

「残念!!こつちだ!!奥義…」
「ブラインドタッチ目潰し!!」

ミリオがブロリーの目に当たる直前に手を透過させる

しかしブロリーに対しての目潰しは悪手だった

(嘘だろ…!?)

本来ならば誰もが咄嗟に目を守るために目を瞑る
しかしブロリーは目を瞑らずにミリオの顔を殴る

「いっつ!!!」

「…初めて一発当たった…!」

「君…なんで目を瞑らなかつたんだい?」

「目を瞑ってる間に救える命があるから」

「…凄いな…ブロリーくん!!」

「ミリオ先輩…お前の個性は…」通り抜け」か?」

ブロリーがミリオにそう言うのとミリオはふふつと笑う

「それは手合わせが終わってからのお楽しみさ!!」

ミリオは消え、再びブロリーの背後を取る

「再び隙あり!!」

ミリオがブロリーの背中を殴ると拳が爆発した

「うぐっ?!?!」

「ミリオ先輩が攻撃してくる大体の場所を予想して、そこにエネルギーの鎧を纏った。
当たれば爆発する」

「……ははっ！参ったね……」

ミリオは自分の手を抑え、痛みに苦しむ

「けど……諦めない!!」

ミリオはブロリーに殴り掛かるもブロリーはミリオの拳をつかみ透過する前に素早く空に投げる

「空中だと逃げる場所はない……!!」

ブロリーは口にエネルギーを溜め始める

(ま、まずい!!)

ブロリーは少しずつ落ちてくるミリオにビームを放った

「ガアアアアアアアアアア!!」

緑色のビームがミリオを包み込み込み体育館の天井を貫く

「なっ……!!なんだあの技……!!」

「ブロリーさんがあのような技を持っていたなんて……」

ブロリーのエネルギー砲が徐々に消えていき辺りは天井が壊れた時に出た砂埃に包まれる

「結果は!?!」

「ミリオ……!!」

「ブロリーは口を閉じ再び仁王立ちし一点を見つめる
すると地面からミリオが出てくる

しかしその姿はコスチュームは壊れあちらこちらに傷がついていた

「……まだ……やるか？」

「……参った……!!」

そう言つて倒れたミリオはパタリと倒れる

「ミリオ!!!」

「うっそお！ミリオ負けちゃった！」

「ブロリー………今のは？」

「口にエネルギーを溜めて撃った」

「お前そんなことできたのか」

「出来た」

「いやー！ブロリーくん!!強いね!!」

「……ミリオ先輩、郊外活動はどこでしてる？」

「俺かい？俺は……サー・ナイトアイの所さ!!」

「……サー・ナイトアイ……」

ブロリーは体育館に持つてきていた指名リストでサー・ナイトアイの名前を探す

「あつた…」

100枚近くあるリストの中からサー・ナイトアイの名前の書いてあるリストを見つけプロリーはホツとし微笑んだ

「俺は決めた…サー・ナイトアイの所に職場体験行く」

「………そうかい!!!」

「相澤、いいか？」

「お前の決めたところに行けって行つたら」

「なら…行く」

プロリーら第1希望の所にサー・ナイトアイ事務所を書き、相澤に渡した

「通形、天喰、波動…こいつら今から7時まで特訓するんだが…アドバイスをしてくれな
いか？」

「もちろん!!」

「俺なんかでいいなら…」

「まかせて下さい!!」

「よろしくお願ひします」

「よろしく…」

「それよりプロリーくん!!あの口からビームの名前は？」

「…名前？」

「そうですわ！あれは必殺技にすべきだと私は思います!!!」

ミリオと八百万が迫ってくる

「……アンガーシャウトなんでどう…かな？」

「…アンガーシャウト…!!…それにする」

「環！いい技名だね!!」

「ありがとう…天喰環先輩…」

「…いい、いや…あ、俺も…環先輩で…いい…」

「私ねじれ先輩でいいよー!」

「分かった」

こうしてブロリー達はビッグ3との中を深め、アドバイスをして貰った

しかしその裏で…

悪が再び動き始めていた

ブロリー、サー・ナイトアイ事務所へ行く

雄英ビッグ3、通形ミリオとの戦いから一週間後

ブロリー達、1年A組は近場の駅に集まっていた

「コスチューム持ったな？本来なら公共の場では着用厳禁の身だ、落としたりすんなよ」

「はい」

「芦戸、『はい』だ。伸ばすんじゃない」

「はい」

「くれぐれも失礼のないように！それじゃ行け」

「「はいッ!!」」

みんながそれぞれの電車に向かっていている中、ブロリーは相澤の前にいた

「ブロリー、何かあったらすぐ連絡しろ？」

「分かった。すぐ連絡する」

「……忘れ物は？」

「ない」

（（相澤先生の意外な一面））

「相澤くん、行かせてあげな？」

ミッドナイトが相澤を止めると相澤はハツとして下を向く

「止めて悪かったな。気をつけて行ってこい」

「相澤、ありがとう。頑張る」

プロリーはそう言つて相澤とミッドナイトを抱きしめ、電車に乗った

「相澤先生とミッドナイト先生下向いたまま動かねえぞ」

「嬉しかったんだろーな」

「娘か息子が都会に独り立ちする時の両親見てえ」

「おい…さっさと行け」

「…は、はいー!!」

切島、上鳴、瀬呂を相澤は睨みつけ電車へ向かわせた

「…：頑張れよ、プロリー」

　　プロリーが電車に乗つて数時間後

「…着いた…サー・ナイトアイ事務所…」

「おっ？プロリーくん!!」

「…ミリオ先輩」

ブロリーが事務所に着くと同時に前からコスチューム姿のミリオが出てくる

「今、迎えに行こうと思ってたんだよね!!きー早くおいで!」

ミリオがブロリーの後ろに周り背中を押して事務所の中へと連れていく

「サー!!ブロリーくん連れてきました!!」

「ブロリーです…よろしくお願いします」

ミリオの挨拶が終わったあと、ブロリーが挨拶をし、部屋を見渡す

すると部屋にはオールマイトの非売品ポスターやフィギュア、本棚の中はオールマイト特集の雑誌が沢山あった

「待っていたよ。ブロリー…」

「職場体験の間…お世話になります」

「私が君を選んだのには理由がある。君のその力、そしてみりおから聞いたその類たくい稀まれなる純粋さ…君は将来、ヒーロー社会を支える立派な柱になる」

「……柱?」

「早速だが…今の君の実力を見せてもらおう。ついてきたまえ」

ナイトアイはそう言うのと立ち上がりブロリーの肩を触るとどこかへ向かった

「どこに行くんだ?」

「地下にあるトレーニングルームさ!」

「ここで今から私と君で訓練をする。エネルギー弾は勿論、飛行も使ってもいい」
「いいのか？」

「ああ、さあ。始めるぞ」

ブロリーは今、不安だった

この人はミリオを育てた強い人：だがこんなにも細かい

自分の拳が当たれば：エネルギー弾が当たれば大怪我をしてしまうのでは…と
だがそんな不安もすぐに無くなる

ナイトアイはブロリーの間合いに入り足を払う

ブロリーは体勢を崩し他がすぐに空を飛び回避する

「私を…甘く見ていたな？」

ブロリーは地面に降り立ち、ナイトアイを殴ろうとする

しかしナイトアイはブロリーの拳を避け、右手で印鑑を投げてきた

ブロリーは両腕で防ぐもその印鑑の威力に驚く

「ぐっ…!!」

「その印鑑は特別製とくべつせいだね。1つ5kgもする印鑑型投擲武器いんかんがたとうてきぶきなんだ」

ナイトアイはブロリーに向けて再び印鑑を投げる

ブロリーは印鑑を撃ち落としナイトアイに蹴りを繰り出した

しかしナイトアイは再び避けるとブロリーの頭に印鑑を当てる

ここでブロリーは考え始める

(なんでだ…う…なんで行く場所がわかる?)

ブロリーはナイトアイから距離をとり、エネルギー弾を2つ投げる

だがこのエネルギー弾はナイトアイに当てるつもりは無い

エネルギー弾はナイトアイにあたる直前で曲がり天井に当たりナイトアイはメガネを上げブロリーを見る

「どこを狙っているんだ？」

「……!!」

ここでブロリーはナイトアイの個性が何かを考え始める

なんで動かなかった？

当てる気がないのがわかったのか？

だが目の前までエネルギー弾は迫っていた

もしかして切島のような硬化の個性か？

プロリーの考えた結果2つの個性が頭に浮かぶ

・体が頑丈がんじょうになる個性

・思考を読み取る個性

「何をぼーつと突っ立っているんだ」

ナイトアイが近づきながら印鑑を投げる

しかしプロリーは印鑑を避け、壁に当たってめり込んだ印鑑を投げ返す

するとナイトアイはその印鑑に当たり、肩を抑える

「うっ……」

(硬化じゃない……それに頭の中も読めない……!!)

プロリーは怯んだナイトアイを押しさえ動きを封じる

「…強いな…ミリオを倒しただけはある…」

「戦いづらい…ナイトアイ、個性は一体…?」

ナイトアイを立たせ、プロリーは個性を聞く

「私の個性は“予知”。人物の数分先から数年先の未来を見ることが出来る。発動条件は秘密だ」

「予知…」

「君の力は素晴らしい。だが動きが単調で読まれやすい。職場体験ではパトロールやこ
ういったトレーニングをするつもりだ」

「はい」

「早速コスチュームに着替えるんだ。パトロールへ行くぞ」

ナイトアイはブロリーに指示をしてトレーニングルームから出ていく

「彼の将来が楽しみだ…」

ナイトアイは扉を出てすぐの所で微笑み歩こうとする

すると突然頭が痛くなり頭の中に映像が流れ始める

「!!?」

彼が見たの壊れた街の真ん中に立ち、泣き叫んでいるブロリーの姿

周りには炎に包まれて、どこかは分からなかった

「これは…一体!?!」

ナイトアイがブロリーの未来を見ようと映像を見始めるも何故か緑の何かに包まれ
ており、見る事が出来なかった

「サー?どうしたんですか?」

「いや…なんでもない。バブルガール、彼らを連れて先にパトロールしていてくれ…」

「は、はい」

「…元気がないな？」

「イエッサ!!」

ナイトアイは階段を登りプロリーの先数日分の未来を見始める

するとそこにも緑色の何かが邪魔をして、あまり詳しく見ることが出来なかった

しかし分かったことがある

明後日…保須^{ほす}の街で敵が来る

少しだけ見えたバスに北保須の文字が書いてありそれを頼りにナイトアイは調べ始める

「センチピーダー、明後日、保須で何かが起こる」

「何か…? 詳しくは分からないのですか？」

「ああ…私達は明後日保須へ向かう。直ぐに保須にいるヒーロー達に連絡をするんだ！

明後日、なにか大きな事故が起こると!!」

「了解しました」

センチピーダーはすぐさま部下達にプロヒーロー達への連絡をさせた

(私の予知は必ず当たる。つまりプロリーが見ていたあの光景は確実に起こる！)

（???)

「ええ…はい。分かりました。センチピーダーさん、ナイトアイにはよろしくと言っておいてください」

「どうかしたんですか?」

「なんでも明後日、保須市で大きな事故が起るらしいですよ」

「えっ!?!それは大変だ!!早く連絡回さなきゃ!!」

眼鏡をかけた女性は直ぐに電話を回しに部屋を出ていく

「……やれやれ、仕事とはいえ…ヒーローとは全くつまらないものですねえ…そうは思いませんか?オール・フォー・ワン?」

暗かったテレビの画面がいきなりつき、画面には生命維持するための呼吸器や点滴をつけたオールフォーワンがいた

《君にしか頼めなかったんだ。クウラもターレスも今の世の中じゃ敵になってる》

「だからといって私を3年間ヒーロー養成高校に通わせる意味はあったんですか?最近になって敵連合というのができたのでどんなものかと楽しみにしていたら…あんなチンケなお遊び集団だとは思いませんでした。それに死柄木弔、彼は子供過ぎますね」

《あまり言うなよフリーザ、君に届いたんだろう? 雄英高校の教師にならないかって。

充分役に立っているじゃないか！ヒーローごっこ！》

「…分かりました。あ、それと。保須の件、私はのらないので…では」

フリーザは電話を切ると窓に近づき夜景を見る

「いずれ、貴方の上にも立ちますよ。オール・フォー・ワン…そしてこの世界の帝王ていおうになつてみせます」

フリーザはそう言うのと再びポッドに座り部下達の給料配分を計算し始めた

事件勃発!! ブロリーに迫る影!!!

ブロリーが職場体験に来て三日目、ナイトアイが保須市での事件を予知した日

「ミリオ、ブロリー、バブルガール、今呼んだ3名は私と共に保須市へ行くぞ」

「イエツサ!!…って突然ですね!!」

ミリオがそう言うのとナイトアイがメガネを上げて喋り始める

「ブロリーの未来を見た結果…今日、保須市で何らかの事故、事件が起こる」

「!!」
「!!」

「なんで俺の未来を見たら保須市が見えたんだ…?」

「それは分からない。だが私の予知は必ず当たる。既に保須市のヒーローに連絡し、警備を強化してもらっている。本来なら私たちの役目はこれで終わりだが…保須には”ヒーロー殺し”と”ターレス”の目撃情報が出た」

「ターレス…?」

「7年前、孤児院こじいんや病院を集中的に狙っていた敵さ。オールマイトとサーはターレスを追ってたんだけど全く情報がなかったから諦めかけてたんだよね」

「そのターレスが保須に現れたとなるとまた何かを企んでるに違いない…その件を踏まえ我らも保須へ向かうことにした。出発は今から1時間後の午後4時だ」

「イエツサ!!」

「いえつき…!」

ブロリーは少しずつ元気に挨拶できるよう努力し始めたが…大きな声で挨拶をするのはまだまだ先になりそうだった

「出発までの間はいつも通りパトロールをして駅に向かう。バブルガールとブロリーはいつもの通りを左に行つて駅に向かってくれ。私とミリオで反対方向を通つて駅に行く」

「イエツサ!!」

「なんで2人は違う道なんだ…?」

「その方が効率がいいからだ。もし何かあればお前のエネルギー弾を空に打ち上げるんだ…分かったか?」

「分かった…じゃない。いえつき…!!」

そうしてブロリーとバブルガールは事務所を出ていつもの通りを左に曲がりパトロールを始める

「バブルガールはどうやってサーの所に来たんだ？」

「プロローはバブルガールの歩くペースに合わせ、話しかける」

「私？私は卒業した時に3年生の時の職場体験でサーに指名されたの」

「3年？…1年の時に行ったヒーローの所には行かなかったのか？」

「私ね、緊張しやすくして学生時代はドジばかりしたんだ…職場体験の時とか酷くてさ。1年の時に指名されてたとこキャンセルされたの。そこから頑張って居残り訓練したりしたり、リラクソスの仕方を調べまくったりしてたんだ」

「それで3年の時にサーに指名されて…卒業して直ぐに相棒に？」

「ううん、その前に試験があったの。実技試験と筆記試験…それでさ！筆記試験も合格点に達して実技もクリアしたの！でも…『元気がないな…』って言われて！”TICKLE HEHEL”って言うマシーンに貼り付けられたの!!」

「なんだ…それ…？」

「こちよこちよマシーン」

バブルガールの口から発せられた言葉にプロローは驚く

「だからプロローくんも気をつけないと貼り付けられるよ？」

「き、気をつける……」

プロローの怯える姿を見てバブルガールはくすくす笑いパトロールを続けた

「バブルガール!!パトロールかい!?頑張れ!!」

「今日は少し暑いから気をつけなよ!!」

「泡のおねーちゃん!!」

「人気者だ…」

「毎日パトロールしてればプロリーくんもなるよ!ムキムキだし!大きいし!!」

「そうか…?」

「そーだよ!つと…もう30分だしそろそろ駅に向かおう!プロリーくん!……プロリーくん?」

「バブルガール、あれ」

プロリーが指を指した方向をバブルガールが見ると小さな子どもが何かに手招きされ路地へと入って行くのが見えた

「プロリーくん。ここで待ってて!!」

「分かった」

バブルガールはプロリーに指示をして路地へと入っていく

「……あつ!いた。ぼく、どうしたの?迷子?」

「迷子なんかじゃねえなあ…そいつは」

バブルガールは慌てて後ろを振り向くとそこにはフードを被った男が立っていた
「あなた…この子の保護者?」

「ああ…そのガキは俺のだ。悪かったなパトロールの邪魔してよ」

「ガキつて…自分の子供になんてことを」

「俺のものを何と言おうと関係ないだろう?…脳無」

「えっ?」

男がそう言うのと後ろの男の子がみるみる大きくなり脳が丸見えになる

「なっ…」

「その女を捕まえろ」

男が脳無に指示すると脳無はバブルガールに手を伸ばす

「捕まるのは貴方よ!!」

しかしバブルガールは脳無の目に泡をあて怯んだ隙に後ろに周り仰向けに倒す

「ちよつとごめんね!」

バブルガールがそう言うって脳無の顎を殴ろうとした瞬間、脳無の顔が溶けだし拳を飲

み込む

「うわっ!?!」

”捕縛用脳無” キャプチャー!…全く…面白いものを作るなあ、
A F Oの野郎は

オール・フオー・ワン

バブルガールが左腕を引き抜こうと足掻くも次第に両足、右腕が取り込まれていく。「動けなくなっちゃまったなあ?」で、俺をどうやって捕まえるんだ? ヒーローさんよ」

「くっ!!」

男はバブルガールの耳についている通信機を取り上げるとボタンを押し、サー・ナイトアイに連絡をする

『バブルガール、どうした?』

「悪いな。バブルガールじゃねえぞ?」

『……貴様、ターレスだな?』

「…ナイトアイか? こりゃあ懐かしい奴が電話に出たもんだ…まさかこの女の上司がためえとは…好都合だぜ」

『何が目的だ!!』

「俺は暴れたいんだよ。お前と…オールマイトにやられた傷が癒えたもんでね。今から俺達は保須市に向かう。この女返して欲しけりゃオールマイトと一緒に俺の前に来な」

ターレスはそう言うのと通信機をグシャッと握りつぶし脳無を立ち上がらせる

「離して! くっ!!」

「おいおい暴れるな…お前はアイツらを釣るための餌…」

ターレスが喋っていると前に誰かが来る

「…バブルガールに…何してる!!」

「……………!!まだ仲間がいたか。面倒くさ」

ターレスが下を向き顔を上げた瞬間、プロローの拳が目の前に現れる

「なっ!?!」

ターレスは急いで避けるも右から来る肘打ちをモロにくらってしまった

「うぐっあ…!?!」

ターレスは奥へ吹っ飛び壁にあたって地面に落ちる

「バブルガールを離せ!!」

プロローは脳無の首を掴むが脳無が再び溶けだしプロローを捕まえる

しかしプロローはエネルギー弾を放ち脳無の頭を吹き飛ばしてバブルガールを引き

抜く

「大丈夫か!?!」

「うん!!サーに連絡は!?!」

「した。場所も伝えた」

2人が構えているとターレスは顔を撫でながら立ち上がりプロロー達に近づいてく

る

「痛てえ…体育祭にでてたプロローだな??すげえ力だ…その力があれば何人殺せるかな

…?」

「…!!!」

ブルリーの顔が少しだけ怒りに歪む

「ブルリーくん！反応しちゃダメだよ！」

「ふん…ブルリー、お前はそんな女…いやこんな世界にいて楽しいか？ヒーローという名のゴミ共が漂うこの腐った社会に!!」

ターレスがそう言った瞬間、バブルガールの足元に黒霧が現れバブルガールを吸い込もうとする

「きゃ…!!」

「バブルガール!!!」

ブルリーはバブルガールを通りに放り投げて黒霧の中へと吸い込まれて行った

「ブルリーくん！」

「バブルガール!!大丈夫ですか!？」

「ミリオくん!!ブルリーくんが!!」

ミリオが慌てて路地を見るがそこにはもう誰もいなかった

「くっ!!サー…ブルリーが連れ去られました、きつと保須市に…!!」

『分かった。直ちに保須市へ向かおう』

く保須市く

「黒モヤ…!! またお前か!!」

「お久しぶりです。プロローさん」

「おいおい、そう睨み合うな…今回は、プロロー…お前を勧誘しに来たんだよ」

「勧誘…? お前は誰だ…!!」

ターレスは薄茶色のフードを外し、目に赤いレンズの機械をはめ込むと自己紹介を始める

「俺の名はターレス。なあプロロー…俺と一緒に来い。そして新たな世界を創りあげるための手伝いをしろ」

「新たな世界?」

「そうだ! 新たな世界を創れば、好きな時”個性”を使って人や街をぶっ壊し、旨い飯を食い、旨い酒に酔う!! そんな理想の生活を出来るんだぞ?」

ターレスは片腕を出しプロローに手を伸ばす

「さあ来い! プロロー!!」

「…嫌だ…!!」

「そうか…それは残念だな…フンツ!!」

ターレスはブロリーの首を掴み自分よりも大きいブロリーを持ち上げる

「ぐっ!! (なんだ…? このパワー…!!)」

「おいおい…本気出せよ」

「グルウウウウ!!!」

ブロリーはオーラを放ち、ターレスの腹を思いつきり殴る

「ぐおっ!？」

「ガアアアアアアアア!!」

ブロリーは腹を抑えたターレスの顔をつかみエネルギー弾を直で爆破させた

「くっ…!!!」

「お前達を捕まえる!!」

ブロリーはターレスにラッシュするがターレスはギリツギリで全部避けていく

「ぐっ!! (まずい…!! このままじゃやられる…!!) 黒霧!!」

「はい!!」

黒霧は部屋中にワープゲートを開きリングゴを出した

「……りんご…?」

「クククツ…!」

「何笑ってる!!」

「俺の勝ちだな!!プロロー!!」

ターレスは落ちてくるリングを掴み、舐め、齧り付く

「グルルルルアアア!!」

プロローはターレスを殴ろうと近づいた瞬間、逆に殴られ飛ばされてしまった

「ウアアアアア!!」

プロローはビルを突きぬけ道路に落ちる

「うっ…ぐううう…!!」

「お、おい君。大丈夫かい!」

「は、早く逃げろ!!」

プロローが飛び出てきたビルからターレスが覗き込み余っていたリングを握りつぶす

「2個目でやっと上回ったか…だがそれでいい…第2ラウンドを始めるぞ!!」

ハイリスク・ハイリターン

「第2ラウンドの始まりだ!!!」

ターレスがブロリーにエネルギー弾を放ち続ける

ブロリーは避けようとするも心配して近づいてきたおじさんが逃げれていないことに気づき、おじさんを庇ってエネルギー弾を受けてしまう

「早く逃げろ…! ヒーローを呼べ!!」

「わ、わかった!!」

「そう易々と逃すか!!」

ターレスがおじさんに近づきエネルギー弾を放とうとするがブロリーがその手を掴み顔を思いつきり蹴る

「ごはっ…!!!」

「相手は…俺だ!!!」

ターレスが地面に膝を着いた瞬間、顔を地面に叩きつけ、そのまま押え付ける

「くっ…!!! 2個でも互角とは…!!!」

「このまま大人しくしろ!!」

「しねえさ!! パワーボール!!」

ターレスがそう叫ぶと手のひらから真つ白い光の玉がブロリーの顔に当たる

「はじけて……」

「こんなもの……効かな」

「混ざれええええええ!!」

ターレスの叫び声とともに小さくなったパワーボールは急激に大きくなり、ブロリーの顔で大爆発を起こした

その爆発でブロリーがターレスを抑える力が少し緩んでしまい、ターレスに逃げられる

「はあ……はあ……!! くくく……その力、やはりな……お前は俺達の仲間だ……」

「お前達の仲間なんかじゃない!!」

ブロリーは全力でターレスとぶつかり合い、殴り合いを始まると2人のラッシュにより建物や地面に亀裂が入る

「グルアアアアアアアア!!」

「はああああああああ!!」

2人の拳が重なった瞬間、辺りに衝撃波が広がり建物が倒壊する

「……ブロリー、もう一度チャンスをやろ。俺についてこい」

「嫌だ…!!何度言ってきたも…絶対行かない!!」

「お前の大切な奴らが死んでもか?」

ターレスの放った言葉にブロリーは動きが止まる

「どういうことだ…?」

「そのままの意味さ。ここでお前が俺についてこなけりやお前の仲間共が死ぬ。ここでお前がもし俺を倒しても俺の仲間がお前の仲間を殺す…つまりお前は仲間を守るためなら俺についてこなけりやダメってことだ」

ターレスはそう言うとき空を飛び元いたビルの中へと入る

「待て!!」

ブロリーが追いかけてビルの中へ入るとそこには注射器のようなものを持ったターレスが待っていた

「ブロリー…俺の誘いを断ったことを後悔させてやる!!!」

ターレスは注射器のようなものを自分の首に差し込み、リングゴにかじりつく

「があああ…グググググッ!!!」

ターレスは頭を抑え、地面に膝をつき苦しみ始める

やがてターレスの呼吸が落ち始めるとターレスの放っていたオーラが先ほどとは比べものにもならないほど大きく膨らみブロリーを包む

「……クク、クククク!! 最高の気分だぜ!!」

ターレスはそう言うところをブローリーを見て、ニヤリと笑う

「さて、どれほど力の差がついたかな？」

「ターレスたちから離れた路地裏」

「はア……あつちではターレスが暴れているのか……全く、奴もあとで粛清してやる。その前に……貴様だ。インゲニウムの弟」

「ぐっ……うう……」

そこにいたのは動けなくなったヒーロー、ネイティブと飯田、それに”ヒーロー殺し”ステイン

「お前も……お前の兄も弱い……なんでわかるか？それはお前らが”贗物”だからだ」

「黙れ……!! お前が兄さんを潰していい理由なんてない!! 兄さんは僕のヒーローだ!! 僕に夢を抱かせてくれた素晴らしいヒーローだったんだ!!」

「はア……まずあいつを助けるよ。目先の憎しみに捉われ私欲を満たそうなどヒーローから最も離れた存在だ」

「黙れ……!! お前は……お前は何を言ったって!! 兄を傷つけた犯罪者だ!!」

「そうか、じゃあな。正しき社会への供物」

ヒーロー殺しが刀を振り下ろそうとした瞬間、刀が何者かにへし折られる

「…!!誰だ…?」

「飯田くん!!助けに来たよ!!」

「!?緑谷くん!!!何故ここに!!」

「そんなことは後で!!飯田くん!立てる!」

「無理だ…奴の個性で動けない…!!」

それを聞いた緑谷はすぐにヒーロー殺しの方へ向き直し構える

「助けに来た…いい台詞だ。だが俺はそいつらを殺す義務がある。ぶつかり合えば当然

弱い方が淘汰される訳だが…どうする?」

「逃げる!緑谷君!!君には関係ない!」

「君は僕の友達!関係なくないよ!それにオールマイイトに教えてもらったんだ。余計な

お世話もヒーローの本質だって!!」

「はア…素晴らしい…」

ヒーロー殺しがもう一本の刀で緑谷の方を少し切った瞬間、ビルが崩壊する

「!?!」

ヒーロー殺しは後ろに下がり、緑谷は飯田とネイティブを連れて大通りへ走った

「何が起きたんだ!？」

崩壊したビルの瓦礫の下から血を流したブロリーが出てくる

「ブロリーくん!？」

「!!緑谷!!」

「大丈夫!？」

「逃げる!!!」

ブロリーが叫んだ瞬間、緑谷の横にエネルギー弾が飛んでくる

「くっ!!」

ブロリーが緑谷を掴んで飯田たちの方に放り投げ、代わりにエネルギー弾を受けてし

まう

「どうしたブロリー!!」

「ガアアアアアア!!」

ブロリーは直ぐにターレスの元へ飛んでいき殴り合うがスピード、パワーが完全に

ターレスに負けており崩れたビルに叩きつけられる

「ウワアアアアア!？」

「ブロリー!俺に跪いて詫げるなら仲間にしてやる!」

「なら…ない!」

「……あそこにいるのはお前の仲間か？」

ターレスは緑谷達の方を見てニヤリと笑う

「やめろ!!」

ターレスがエネルギー弾を撃とうとした瞬間、ターレスが炎に包まれる

「ぐあ!?!」

「ブロリー、無事か？」

「轟……!」

「チツ……!ヒーロー殺し!!来い!!」

「ターレス……お前も粛清対象だが……今は手を貸してやる」

ヒーロー殺しは緑谷を切った刀を舐めブロリーに向けてナイフを投げる

しかし轟が氷の壁を作りブロリーを守る

「させねえよ!」

轟は体に鎧のように炎と氷を纏わせヒーロー殺しの前に立つ

「ブロリー!立てるか？」

「立つ……ターレスを止める!!」

「緑谷!二人連れて逃げろ!」

「だ、ダメだ!動けない!」

「ならこいつらを倒すしかねえな…」

「俺達を倒せると思うか？」

「思う!!」

ブルリーはターレスにエネルギー弾を放つ

「こんなもの…ツ!!」

ターレスがエネルギー弾を弾くとそこにはブルリーが拳を構えていた

「グルウアアアアアア!!」

(こいつ…さつきよりも力が上がっている!?)

「でりやああ!」

ターレスはブルリーの拳を防ぎ腹を殴るもその腕を捕まれ顔を殴られる

「がはっ!!」

「ガアアアアアア!!」

ブルリーはターレスにゼロ距離アンガーシャウトを放ち、ターレスが倒れたのを確認

し轟との元へ行く

「轟!」

ブルリーはエネルギー弾をヒーロー殺しに向けて投げるもヒーロー殺しは避ける

「はア…二人とも個性が強い故に拳動が大雑把だ」

「お前は俺たちを少し嘗めすぎじゃないか？」

「何…？」

ヒーロー殺しが何かに気づき後ろを振り向く

しかし目の前には炎に包まれたエネルギー弾があつた

「ぐああああああ!!」

ヒーロー殺しは炎に包まれ地面に膝をつき倒れる

「なんとか倒せた」

「ブロリー、あの二人を担いで」

轟がそう言った瞬間、肩をレーザーのようなもので撃ち抜かれる

「うあああああ!!」

「轟……!!」

「クククツ!!ブロリー…お前は甘いな…!!」

ターレスは笑いながら立ち上がり、ブロリーを蹴り飛ばす

「お前は大人しくこいつの死ぬところを見ていろ!」

「ぐっ…!!」

「轟くん!」

俺のせいで…轟が…

嫌だ……!

「ぐるぐるうううううううう……」

「死ねえええええ!!」

ターレスがエネルギー弾を轟に放とうとした瞬間、体が硬直してしまう

「な、何!?!」

「グルウウウアアアアアア!!」

ブロリーが雄叫びをあげるとターレスが吹き飛び轟は地面にそのまま落ちる

「ブロリーが……」

「怒った……」

「ガアアアアアア!!!!」

怒りの決着

「な、なんだあれは…!!!」

ターレスは後ろに1歩、また1歩と下がる

（先程まで互角に戦ってたはず…!なのに…!この違いはなんだ!?!）

「グルウウウウウアアアアアアアアアア!!」

ブロリーの雄叫びをあがった瞬間、ターレスはブロリーに自分の出せる最大威力のエネルギー弾を何度も撃ち放つ

「ダダダダダダダッ!!!」

あたりに煙が立ち、その場にいる誰もがブロリーの姿が見えなくなった

「はあ…はあ…!」

ターレスは息を切らし、ブロリーの攻撃に備える

「轟くん!ブロリーくんを止めなきゃ!」

「分かってる!でも…どうやって止める!?!」

轟と緑谷はいかったブロリーの恐ろしさをその身で体験している

だからこそその場を動けない

USJ手は比べ物にならない程のオーラが緑谷達に纏わりついて足が動かないのだ
「……出てこいッ!! ブロリー!! 出てこなければお前の仲間をここで殺」

ターレスが叫んだその時、地面の中からブロリーが飛び出しターレスを蹴り飛ばす
「ぐあっう!!?」

「グガアアアアア!!」

ブロリーは吹き飛んだターレスの首を掴むとビルに押し付け、そのまま動き始める
「ぐあああああああ!!」

ターレスが苦痛の悲鳴をあげるがブロリーはそんなターレスの顔を何度も何度も殴り地面にめり込ませる

そして空に飛び上がりエネルギー弾を放ち続ける

ターレスは地面にどんどんめり込んでいき、やがて痙攣し始める

「ブロリー! 落ち着け!! 殺しちまうぞ!!」

「ブロリーくん!!」

緑谷達の必死の呼びかけもブロリーには届かない

「ウルウウアアアアアアア!!」

トドメを指すと言わんばかりにブロリーはターレスの元へ急降下し拳を振り下ろそ

うとする

しかしターレスにあたる直前のところでブロリーの動きが止まった

《ブロリー！落ち着け!!》

「……ア……イ……ザワ？」

《今飯田に連絡もらった！ブロリー落ち着け!》

動けるようになった飯田が咄嗟にとった行動それは雄英にいる相澤への連絡だった

一か八かの賭けだったがギリギリ間に合い、なんとかブロリーの動きを止めることが出来た

「ブロリー、俺は大丈夫だ……だから止まってくれ」

轟がブロリーにそう伝えるとブロリーの逆だった髪が元に戻り、溢れ出る緑のオーラがブロリーの中へ引っ込み、ブロリーは倒れた

ブロリーが目覚めると目の前には知らない光景が広がっている

「……(ハハ)はっ。」

「ブロリーくん、目が覚めたようだね」

「……誰だ？」

「警察の者だよ。いいかい？君は個性を無断で使い、保須市の街を壊したんだ。君が

やったということはバレてはいないが…それなりの罰は免れない」

「…罰…?」

「無断ではない。私が許可を出した」

病室を開けたのはサー・ナイトアイだ

「サー・ナイトアイ…」

「貴方を言っているのかわかってるんですか!？」

「分かっていますとも。プロリーにもしものことがあつた場合、戦つてもいいと許可を出したのは私だ。処罰を下すなら私にしろ」

ナイトアイの申し付けにより、プロリーは2週間の謹慎という軽罰で済んだ

だがサー・ナイトアイは3ヶ月もの間の活動禁止、教育免許剥奪、減給という重い結果となった

プロリーの殆どの罪をサー・ナイトアイが被つたのだ

「サー・ナイトアイ…ごめんなさい…」

サー・ナイトアイがプロリーの頭を撫で落ち着かせる

「謝らなくていい…プロリー、お前がターレスを止めなければバブルガールや保須市の人々は死んでいた」

そして一呼吸を置いてサー・ナイトアイは再び話し始める

「……ブロリー、私は君の未来を見た。きつと近いうちに君は巨悪と戦うことになる…
そのためにも君という”光”を失う訳には行かないんだよ」

「光……?」

「そう、光…君はオールマイトのような眩い光になる。だが…君の力は強すぎて真の力を制御できていないんだ。だからその力を制御出来るように雄英高校でしっかりと学んだ。いいね?」

「約束する。あの力を制御出来るようになる」

ブロリーはサー・ナイトアイの手を握り約束した

「ブロリーくん!!怪我は!?もう大丈夫なの!?!」

「これ、お見舞いの品!ブロリーくんぶどう好きだろ!分かるんだよねー!」

「バブルガール…ミリオ先輩…あと好きな果物は桃…」

「だと思ったよね!!!」

「怪我は大丈夫。もう治った」

ブロリーはベットから降りて包帯を外し始める

「あ、だめだよ!お医者さんの話を聞かな…い…と…」

バブルガールはブロリーの包帯の下にはおびただしい数のキズがあると思っていた
しかし、ブロリーの包帯の下には傷はほとんどふさがっており傷という傷はひとつも

なかつた

「嘘……ほとんど塞がってる……」

「君の個性って再生能力もあるのかい？」

「わからない。でも昔から直ぐに怪我は治る」

「謎の多い個性だ……」

翌日、ブローリーは退院したが雄英には戻れないのでしばらくの間ミッドナイトの部屋に泊まることになった